特約賣捌所

所在地	店名
京都市油小路御前通上ル	興教書院
大阪市東區後備町	吉岡平助
大阪市東區淡路町	盛文館
大阪市東區南渡邊町	杉本書店
大阪市東區南久太郎町	福音社
名古屋市本町三丁目	川瀬代助
名古屋市宮町一丁目	星野文星堂
福岡縣久留米市米屋町	菊竹金文堂
熊本縣熊本市新町	長崎次郎
長野縣長野市大門町	西澤喜太郎
越後長岡市表四ノ町	目黒十郎
新潟縣越後水原町	西村萬松堂
福井縣福井市佐佳枝中町	品川書店
石川縣金澤市庄町	宇都宮書店

（親鸞上人全集下巻奥附）

正價金壹圓

明治三十九年五月四日印刷
明治三十九年五月八日發行
明治四十四年二月十日訂正四版

不許複製

監修者　南條文雄
監修者　村上專精
監修者　前田慧雲

發行者　東京市神田區南甲賀町　淸水金右衞門
發行者　東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川又三郎
印刷者　東京市神田區表神保町拾番地　今成温平

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川文榮閣
電話京橋三七七番
振替口座東京四一〇九番

前を自行の德とし、御流罪已後を化他の德として、大別したまふか如し。されは聖人一代の自行化他の德を讃し、兼て聖人一流の全く私なく元祖より相承したまへることを顯すもの、即ち此御傳鈔上下二卷なり。是れ全く奥書に出るか如く、知恩報德の爲めに作りたまひたるに外ならさるなり。

* * * * * * *

一、聖人の御撰述中。帖外九首と辭山御書とを除くの外は、製作年代の順序に從て、解題し來れり。

一、其中唯信文意は、先輩悉く八十五歲の御製作と定められたるを以て、今又た一多證文の次に列れ置きしも編輯者は寧ろ本書の御製作を猶ほ早き年時に置かんと欲するもの也。

一、又一念多念證文御製作の年時に就ても、先輩の多數は八十五歲と定められたり。是れ其奥書に基けるもの也。然れとも奥書には書二寫之一とあり、寫の字は所寫の前本を豫想せるものなり、されば此書も猶已前の御製作ならん。慶了擬講師は八十三歲の御製作とせられたり。されば或は一念多念分別事を八十三歲の四月に書寫したまひ、此年一多證證文を製作して彼の要文を釋したまへるには非ざるか。

一、帖外九首和讃及御消息集歎異鈔の如きは、遂に年時を知るに由なく、撰者すら確定し難きものあり。其他の書に於ても之を研究するの材料乏しきを如何せん。只先輩の指導を仰かんのみ。

御勸化の昔を思ひ、戀慕の念制し難く、正應二年三月の頃、初めて東國に下りたまひ、聖人の御舊蹟を遊歷して、坂東八ヶ國奧州出羽の境に至るまて巡見して兩三年の星霜を送り、此間親く當時猶ほ存命せられたる聖人の直弟に對面して聞きたまひたる物語など多かりき。かくて正應五年二月中旬の頃再ひ都に歸りたまひ、後二十六歲にして、遂に此御傳を製作し、御弟子康樂寺淨賀法眼をして之を圖畫せしめ。傳繪相添へて智愚共に了し得可からしめたまへり。覺如上人の御筆數本ありて、淨賀は最初の畫工なりき。彼の弟子淨圓の繪の本も傳は覺如上人の御筆なり。此御傳鈔上下二卷十五段は、年月の次第の外に義類の次第ありて、御老後の事も御流罪已前に記されたるものあるか如きは、大に深意の存する所なり。若し據勝爲論して、一部の大綱を窺へは、上卷は自行の德を讃し、下卷は化他の德を記するものにて、聖人の一代を二分し、御流罪已

本書は覺如上人五十七歳、嘉曆元丙寅年九月五日の撰にして、飛騨の願智房永承の請に應して書き與へたまひたる所なり。一部五條は歎異鈔に記されたる、聖人の法語中其幽玄なるものを開說して、他力眞宗の極致を敎へたまふにありされは第五條のみは結ふに覺師の私見を以てせられたるも、前四條の所說は全く聖人の仰せこと也。本書七丁左名號執持することさらに自力にあらす云云とは、正さに題目の依て來る所なり。御眞蹟は高田の淨輿寺及ひ市田の永福寺にあり。又飛騨の常蓮寺は願智の遺跡なるか故に、覺如上人の御親墨を藏すと云ふ。

御傳鈔　一卷

本書は聖人の滅後、三十四年を經て、永仁三年乙未冬十月中旬覺如上人二十六歳にして撰集したまひし所なり。覺如上人二十一歳の御時聖人

改邪鈔　一卷

本書は延元二丁丑年（北朝建武四年）秋九月覺如上人六十八歲、出雲路乘專の請に應して製作したまふ所にして、月の二十五日に擱筆したまへるものなり。當時聖人の一流漸く盛なると共に、種々の僻見起り、名を當流にかりて猥りに不德迷信の所爲を恣にする者あり。是を以て覺如上人二十條の邪義を掲て悉く之を摧破し、一流の正義を明かにしたまふものなり。されは聖人一代の信念行狀又傳へて此書の中に見るを得るものなり。御眞蹟は參州淨妙寺、野州勸專寺にあり。越後淨興寺には從覺上人、實如上人御寫の本書二本を藏す。本書には本末を別たさる一本あり。

執持鈔　一卷

侍したまひたるは十餘歳に過ぎされは、必すや唯圓房等にも聞きたまひし所ありしならん。

口傳鈔　三卷

本書は聖人の滅後、第七十年元弘元年辛未十一月下旬報恩講七日七夜の勤行に際し、覺如上人丹波の乘專か兼ての懇請を容れ御在世に於ける聖人の言行因みに如信上人傳承の法要を述へたまひ、乘專をして筆記せしめたまへるものなり。時に覺如上人六十二歲、專ら三代傳持の法語を口筆し、當時隆盛の他流に對し黑谷相傳の正義を明かにし、一念業成の宗旨を顯示したまへり。越後高田淨興寺には、巧如上人御書寫の本書を藏す。一本合して一卷とせる者あるは、蓋し後人の合せしものならん。

本書の明す所十八章は、全く聖人の直話にして、他力信心の至極を顯すものなり。是れ聖人御入滅の後、御門弟の間に於て、忽ちに異解を生し、一流の正義將さに亂れんとしたるを以て、爰に聖人在世の時、親く聽聞せし趣の猶ほ耳の底に留まる所を、思ひ出つるまに〳〵、書き付けて、祖訓に背く所の異を歎き、同行者の疑惑不審を解かんとするものなり。然るに本書の撰集者詳ならす。或は如信上人と云ひ、或は唯圓房と云ひ、或は覺如上人と云ふ。然れとも本書の序分及結末の語勢に依れは、親く直說を耳の底に留むる御直弟ならさるへからさる可らされは、覺如上人とは云ひ難きものあり。而して口傳鈔に本書と同一の文二三ありて、如信上人より傳持の趣となしてあれは、本書を唯圓房の作とするよりも、寧ろ如信上人の撰と定めさるを得す。古來多く本書は如信上人の作なりと決定せる所なり。然れとも御幼年の時を除けは、如信上人の聖人に

きたまふ燈明なるか故なり。坊本別つて二卷とするものあり。

御消息集　一卷

本書も上の末燈鈔と同く、御門弟へ授與したまひたる御消息を集錄せしものにして、覺如上人の撰集なりと傳へ云ふ所なり。本書には二本ありて、一本には十九章あり。然るに他の一本には十一章を載す。而して其載せさる八章は、末燈鈔に出つるものと同く、文言少く、具略あるのみ。されは十九章の本は原本にして、十一章の本は後人末燈鈔との復重を避けんか爲め、十九章中の八章を省きたるものなる可し。今は十一章の本を揭く。

歎異鈔　一卷

末燈鈔　一卷

本書は聖人の滅後二十二年を經て、正慶二年癸酉覺如上人の次子從覺上人（諱慈俊、時に三十九歳聖人御已證の法語第一、第五、第二十二、及御門弟へ授けたまへる御消息等を類聚して、總て二十二章を集錄し、之を一部と成したまひしものなり。越後高田の淨興寺には、善如上人御書寫の本書を藏す。而して其集めたまひし御消息は、聖人關東十餘年の化導を終へて、御歳六十にして京都に歸りたまふや、御門弟にして或は異解を生し、或は不審を申す人出來せしを以て、常に法語消息を認めて、懇ろに敎へたまひしもの是なり、此等御消息は年時を詳にせさるもの多く、其年號を明記せるものは、聖人七十九歳より八十八歳迄までの間にあり。而して是を末燈鈔と名くるは、末代昏冥の凡夫を本願一實の大道に導

で輕卒たるを免かれす。されは此九首の讃は必す聖人の御眞撰なる可し。

辭山御書

建仁元年聖人二十九歳の時、六角堂の救世菩薩の靈告を蒙り、聖道を捨てゝ淨土に歸し、將さに吉水に入室せんとしたまふ時、寶幢院の學徒に贈りたまひたる御書なり。御眞筆は叡山西塔の谷堂に藏まりしを、眞宗の道俗六百年來遂に知る者無かりしか、讃州の意戒法師、山門正覺院の執行探題大僧正豪恕師に親近せることの緣を以て初めて之を聞き、僧正に請て面り其眞蹟を拜し奉り、遂に僧正をして之を寫さしめまいらせて、文化二年乙丑九月二日僧正より之を得て歸り來れり、夫より道俗相傳へて今日に至るものなり。

るひとはみな。攝取不捨の利益にて、無上覺をはさとるなり」と云ふ靈告を感得したまひしに依て、之を因縁として重て一帖を作りたまひたるもの、即ち正像末和讃なり。而して高田所傳の正像末和讃の終には、正嘉二歳九月二十四日親鸞八十六歳とあり。されは此一帖は八十五歳に起稿し給ひて、八十六歳に御製作を終へたまひしものなり。然るに終の御法語に、親鸞八十八歳とあるは、三帖の和讃を合して一部と成したまひたる時なり。而して正像末の一帖に明したまふ所は、末法五濁の有情は彌陀の本願を信する外、更らに出離の道有ること無しと云ふにあり。

帖外九首和讃

此和讃は古は知る人稀なりしか、寶曆年中常樂臺の寶庫より出つ。敎典志には極樂の言あるの故を以て、其御眞撰なるを疑ふと雖も、此疑却

一本高田專修寺にありて、其奥には康元二丁巳二月二十七日とあり、是も聖人八十五歳の御時なり。されと又奥の本誓寺に藏せる御眞筆の本は、建長二庚戌十月二十六日の撰なりと云ふ。果して然らは聖人七十八歳の御撰述と謂ふ可き歟。本書は聖人の御同學にして、聖人の常に尊崇したまひたる聖覚法印か、唯信鈔の中に引用したまへる經釋の要文をは、聖人和語を以て慇懃に註解し、末代愚鈍の下機をして、本願他力の法門を知り易からしめたまふもの也。

正像末和讃

一讃の初に康元二年丁巳二月十九日夜寅時夢告云とあり、是れ聖人八十五歳の御時なり。已に淨高二帖の御製作ありて、和讃は全く其終を告け、御滿足の御事なりしか、八十五歳にして「彌陀の本願信す可し、本願信す

を以て釋することを略したまへる也、猶は義を詳にせんか爲めに、聖人自ら多くの證文を加へて、懇ろに此等の文を釋したまへり。本書の御眞蹟は下總國結城の稱名寺に藏す。又高田專修寺にも御眞筆の一本ありと云ふ。而して坊刻の鍥本には、一念多念文意と題するものあり、然れとも北越より出す所の一念多念文意と稱する贋物とは、大に區別せさる可らす。

唯信鈔文意　一卷

本書は奧書に正嘉元歲丁巳八月十九日、愚禿親鸞八十五歲書之とあり是を以て古來聖人八十五歲の御撰述と定むる所なり。先啓目錄に從へは、此御眞筆は武部の慈願寺、市田の永福寺、一身田の專修寺にありと云ふも、同月同日の眞筆三寺に在りと云ふことを疑はしと謂ふ可し。然るに

一念多念證文　一卷

本書は其奥書に正嘉元歳丁巳八月六日書寫之、愚禿親鸞八十五歳とあり。凡そ承元年中に於て一念多念の爭盛なりしかは、爲めに隆寛律師一念多念分別事を作りたまへり。其後建長七年乙卯四月二十三日、聖人八十三歳の時、分別事を書寫したまひ、八十五歳にして本書を作りたまふものなり。本書は一念多念分別事の所引の要文を解釋し、當時の一念往生多念業成の偏見の非なることを示したまふものにして、即ち一念を以ては往生治定の時尅と定め、其時の命のふれは自然と多念に及ふ道理を敎へたまふものなり。特に愚機のために和解したまふことは、奥書に依て知ることを得、而して分別事には所引の文十一あり、然るに本書に於ては、其中の六文を釋したまへり。是れ其餘の五文は、前文と同意なる

本書は其奥書に從へは、康元元年丙辰十一月二十九日、聖人八十四歳の御撰述なり。管窺及ひ敎典志には疑て御門人の鈔錄となせとも、御眞筆三州上宮寺にありて、慧琳師親く之を拜見し奉り、眞作疑なしと斷言せられたることなれは、亦た敬ひ信す可き御眞撰の寶典なり。

聖德奉讃百十四首

此奉讃は康元二年丁巳二月三十日、聖人八十五歳の御製作にして、御眞蹟は八代の願永寺に在りて、平假名なりと云ふ。此外に建長七年聖人八十三歳にして作りたまへる七十七首の太子讃あり。此二種の聖德奉讃は、共に太子の傳記事實を述へたるものにして、正像末和讃に附屬せる十一首の太子讃の如く、本迹化導の恩德を讃したるものとは、大に其趣を異にせるもの也。

無きに非す。特に鬼長の本は七十三行の偈頌なるに、御清書の本は此喩凡夫在煩惱の下に泥中生佛正覺華斯示如來本弘誓の二句を加へて七十四行を成せり。現流の一本にして七十三行なる者あるは、是れ鬼長の本に一致するものなり。而して聖人此偈頌を作りたまふ所以は、廣文類に標せる二回向の義を明かにし、論註の奥旨を探り、行者所修の五念は法藏菩薩の因修なることを示して、他利利他の深義を明かにし、以て他力回向の宗本を顯し、彌陀の佛德を讃して自信敎人信したまふにあり、されは明したまふ所は願力成就の五念五功德にして、因果共に前四は自利の入門、第五は利他の出門なるか故に、題して入出二門偈と稱す、又往還二回向の義を明かにしたまふか故に、或は往還偈とも稱す。

往還回向文類　一卷

に、卑謙して愚禿と題したまふ。然るに後弟敬て此の目を避け、又た二卷鈔と稱す。

入出二門偈頌

此偈頌御製作の年時に就ては、現流の一本更らに記する所無しと雖も、越前大味浦法雲寺傳來の御眞本、及び覺如上人の御延書を見るに、其奥には建長八歲丙辰三月二十三日書二寫之一とありて、是れ聖人八十四歲の御時なり、此の御眞本は眞佛房の次男なる、下總國結城郡稱名寺の信證に書き與へられたるものなり。然るに下總國北相馬郡鬼長聖德寺に、御眞筆と稱する一本ありて、其奥には愚禿八十歲三月四日書レ之、南無阿彌陀佛とあり。若し此本にして眞ならば、是れ御草稿の本にして法雲寺の御眞本は御清書の本なる可し。而して此二本を比較するに相違せる所

元本は更に四法を分ちて廣を略する相を明にしたまひたるもの也。今は二本幷ひ擧く。

愚禿鈔　二卷

本書は建長七乙卯年、聖人八十三歲の御製作にして、廣文類に明したまへる、二雙四重等の義略にして詳ならさるもの有るを以て、更らに撰述したまひたる所也。されは本書は淨土眞宗の敎相安心に就て、聖人已證の自解を述へたまへる寶典にして、即ち撰擇集の餘意たる、元祖附屬の深義の未だ廣文類に顯はしたまはさりしものを、本書に於て示したまふもの也、即ち權實眞假の差別を辨して自力の三心を捨てゝ、他力の三信に入らしむることを明したまへり。若し據勝爲論せは、上卷は敎相を明し、下卷は安心を明したまふものなり。本書已に自解發揮の書なるか故

建長七歲乙卯八月六日、愚禿親鸞八十三歲書之とあり。然るに坊間古鏤の本には、康元二年三月二日書寫之、愚禿親鸞八十五歲とあり。されは前は御草稿にして、此は再治校合の本なるへし。本書は廣文類に明したまへる三往生の義極めて廣博にして道俗容易に解了し難きを以て三經に依て三願三機三往生の法相を詳にし、末代の下機をして三經の眞假、往生の勝劣を知り易からしめんか爲めに、製作したまひし所也。而して本書の二本は大に出沒ありて、普通の草稿淸書の比に非す、建長本は略にして、康元本は廣なり。即ち大經往生の下、建長本には八文を引けとも、康元本は十二文を引けり。而して如此く相違せる所以は、分相門の廣文類を該攝門に移せるは、建長本の所明なり。然るに建長本は甚た略なるを以て、義相の却て知れ難からんことを恐れ、再ひ該攝に分相の義を加へたるもの、是れ康元本なり。即ち建長本は四法を略して信證の二法とし、康

御眞本、及び存覺上人の御延書の奥には、建長七年七月十四日書之釋親鸞八十三歳とあり。然るに覺如上人御延書の奥には、正嘉元年林鐘四日書寫之、愚禿親鸞八十五歳點申之とあり。是れ蓋し前は御草稿にして、此は再治清書の本なる可し、本書は立教開宗の本典たる廣文類の餘りに廣博にして、末代劣機の解了し難きを患ひたまひ、傍依を略して正依に就き、方便を略して眞實に就き、敎相を略して安心に就き、一部六卷をつゞめて一卷となし、其肝要を抄出したまふと共に、又因みに廣文類に顯はれざる幽意を顯したまひたるもの也。是を以て本書を又た略文類と稱す。

三經往生文類　一卷

本書は聖人八十三歳の御撰述にして、即ち興正寺所藏の御眞本には

尊號銘文と云ひ、又た善導大師、法然上人聖覺法印及聖人自身等の眞像を書きて、之に釋文讃頌等を記し、之を眞像銘文と云ふ、而して本書は彌陀尊號の功德利益の廣大なると、及ひ善導大師、法然上人の弘化の恩德の深重なると、並ひに聖覺法印及聖人自身の安心は、全く善導元祖の正意を傳へて、更に私なきことを顯はさんか爲めに、尊號及眞像の銘文を釋し以て愚鈍の衆生をして、平易に念佛成佛の眞宗を知らしめたまふものゝ也是れ聖人平生佛恩師恩を崇仰したまへる精神より、種々の銘文を集め置きたまひけるか、本書は其十六文を列ねて、慇懃に和解を施したまひたるものゝ也。

淨土文類聚鈔　一卷

本書は聖人八十三歲の御製作にして、越後高田の淨興寺に秘藏せる

和讃の名は總即別名にして淨土の莊嚴功德を讃歎する義と、淨土の法門を讃歎する義とを含めり、又高僧和讃は大祖の解釋を述へんか爲と、眞宗の相承を顯はさんか爲とに依て製作したまひしなり。要するに、淨高二帖の和讃は、大聖の眞言大祖の解釋に依て弘願眞宗を弘宣したまふとを顯したまふもの也。

尊號眞像銘文　一卷

本書は聖人八十三歲の御撰述にして、奥書には建長七歲乙卯六月二日愚禿親鸞八十三歲書寫之とあり。此御眞蹟は越前大味浦の法雲寺にあり。然るに高田の專修寺所藏の本には、正嘉二戊午歲六月二十八日書之、愚禿親鸞八十六歲とあり。されは前は草稿にして、此は再治の書なる可し。當時九字十字等の名號の上下の色紙に、經論釋の要文を書き添へ、之を

終に、彌陀和讃高僧和讃都合二百二十五首、寳治第二戊申歲初月下旬第一日、釋親鸞七十六歲書之畢とあり。然るに反古裏十三丁に依れは、淨土和讃の奥書に建長六年甲寅十二月日と記されたるもの有ることを知る、是れ聖人八十二歲の御時なり。而して和讃御製作の御歡悅に書かさせたまひたる、安靜の御影の裏書には、建長七歲乙卯とあり、是れ聖人八十三歲の御時なり。されば七十六歲の御時は最初の脫稿にして、八十二歲、八十三歲の二年間に於ては、再治校合したまひたるものなり。聖人此和讃を作りたまひたる意趣は、「佛慧功德をほめしめて、十方の有緣に聞かしめん、信心すてに得ん人は、常に佛恩報す可し」と云ふに外ならす。されは經釋に顯す所の義理をは、愚鈍無智の輩をして知り易からしめんが爲めに和讃に作りたまひしものなり。即ち其明したまふ所は全部に亘りて勸信誡疑に外ならさるなり。冠頭の二首正しく此意を標す而して淨土

なり。特に終の慶哉樹₂心ヲ弘誓之佛地₁等ノ八十三字は、即ち此意趣を述べたまふものなり。聖人御親筆の本書は東京淺草高龍山報恩寺にあり。又覺如上人御延書の眞本は越中井波の別院に秘在せりと云ふ。而して坊間の刻板は凡そ四種あり。一に寛永十三年丙子之本。二に正保三年丙戌之本。三に明暦三年丁酉之本。四に寛文十三年癸丑之本是なり。其間文字訓點の差異無きに非ず。今は御延書を用ふ。本書は蓮如上人、二十歳已下の者には讀ますす可らすと仰せられし程の尊重す可き寶典にして、其末註又少からすと雖も、特に重んすす可き者としては、六要鈔十巻、敎行信證大意一巻あり、共に存覺上人の作なり。

淨土和讃。高僧和讃

此二帖の和讃は聖人七十六歳の御製作にして、高田所傳の高僧讃の

親鸞聖人全集解題

教行信證文類　六卷

本書は聖人立敎開宗の本典にして、常州稻田の禪房に於て撰述したまへる所也。化卷本の終に至我元仁元年の文字あれば、御撰述の年には正さに聖人五十二歲なりき。高田顯智傳に依れば、四十八歲の頃より御草稿を初めたまひ、五十二歲元仁元年甲申正月十五日より正しく六軸の御製作ありて、五十六歲の時、高田に於て再治淸書したまひ、秋九月其功を畢えたまふと云ふ。然るに木部綿織寺傳に依れば、眞化二卷の御製作は、嘉禎二年丙申正月下旬、聖人六十四歲綿織寺に於て筆を取りたまひ、嘉禎三年丁酉四月中旬に至りて擱筆したまふとあり。蓋し是れ再治淸書したまひしものならん、而して本書御撰述の趣意は出て、總序後序に詳

奥書云

右縁起畫圖之志偏爲﹅知恩報德﹅不﹅爲﹅戲論狂言﹅剩又染﹅紫毫﹅拾﹅翰林﹅其躰尤拙其詞是苟付﹅冥付﹅顯有﹅痛有﹅耻雖﹅然只﹅憑﹅後見賢者之取捨﹅無﹅顧﹅當時愚案之訛謬﹅而已

于﹅時永仁第三暦應鍾中旬第二天至﹅晡時﹅終﹅草書之篇﹅畢

畫工法眼淨賀號﹅康樂寺﹅

（下卷終）

御傳鈔　終

遺訓ますく盛なること。頗在世のむかしにこえたり。すへて門葉。國郡に充滿し。末流處々に遍布して。幾千萬といふことをしらす。其稟教を重して彼報謝を抽るともから。緇素老少。面々にあゆみを運て。年々廟堂に詣す。凡聖人在生の間。奇特これをほしといへとも。羅褸に遑あらす。しかしなから。これを略するところなり

聲に餘言をあらはさす。もはら稱名たゆることなし。しかうして同第八日午時頭北面西右脇に臥給てつゐに念佛のいきたえをはんぬ于時頽齡九旬に滿たまう禪房は長安馮翊の邊押小路南萬里小路東なれははるかに河東の路を歷て洛陽東山の西麓。鳥邊野の南のほとり。延仁寺に葬したてまつる。遺骨を拾て。同山の麓。鳥邊野の北邊。大谷にこれをおさめ畢ぬ。しかるに終焉にあふ門弟。勸化をうけし老若。をの〳〵在世のいにしへをおもひ。滅後のいまをかなしみて戀慕涕泣せすと。いふことなし

第七段

文永九年冬のころ。東山西麓鳥邊野の北。大谷の墳墓をあらためて。同麓よりなを西。吉水の北の邊に。遺骨を堀渡て。佛閣をたて。影像を安す。此時に當て。聖人相傳の宗義。いよ〳〵興し。

たして。無爲に參着の夜。くたんの男夢告云證誠殿の扉を排きて衣冠たゝしき俗人おほせられて云汝何そわれを忽緒して汙穢不淨にして參詣するやとそのときかの俗人に對座して聖人忽爾としてまみえたまふ。その詞にのたまはく。彼は善信か訓によつて。念佛するものなりと云云。爰に俗人。笏をたゝしくして。ことに敬屈の禮を著つゝ。かさねて述ところなしとみるほとに。ゆめさめをはんぬ。おほよそ奇異のおもひをなすこと。いふへからす。下向の後貴坊にまいりて。くわしく此旨を申に。聖人そのことなりとのたまふ。これまた。不思議の事なりかし

第六段

聖人弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より。いさゝか不例の氣まします。自爾以來。口に世事をましへす。たゝ佛恩のふかきことをのふ。

すなはちいまの教主なり。かるかゆへに。とてもかくても。衆生に結縁のこゝろさしふかきによりて。和光の垂跡を留たまふ。垂迹をとゝむる本意。たゝ結縁の群類をして。願海に引入せんとなり。しかあれは本地の誓願を信して。一向に念佛をことゝせん輩。公務にもしたかひ。領主にも駈仕して。その靈地をふみ。その社廟に詣せんこと。更に自心の發起するところにあらす。しかれは。垂迹にをひて。内壞虚假の身たりなから。あなかちに賢善精進の威儀を標すへからす。たゝ本地の誓約にまかすへし。穴賢穴賢。神威をかろしむるにあらす。努力々々冥眦をめくらしたまふへからすと云云。これによりて平太郎熊野に參詣す。道の作法とりわき整儀なし。たゝ常沒の凡情にしたかつて。さらに不淨をも刷ことなし。行住坐臥に本願をあふき。造次顛沛に師教をまもるには

ち三經に隱顯ありといへとも。文といひ義といひともにもて明なるをや。大經の三輩にも。一向と勸て。流通にはこれを彌勒に付屬し。觀經の九品にも。しはらく三心と說て。これまた阿難に付屬す。小經の一心。つゐに諸佛これを證誠す。これによりて論主一心と判し和尚一向と釋す。しかれはすなはち何の文によるとも。一向專念の義を立すへからさるそや。證誠殿の本地すなはちいまの敎主なり。かるかゆへに。とてもかくても。衆生に結緣のこゝろさしふかきをや。大經の三輩にも。一向と勸て。流通にはこれを彌勒に付屬し。觀經の九品にも。しはらく三心と說て。これまた阿難に付屬す。小經の一心。つゐに諸佛これを證誠す。これによりて論主一心と判し和尚一向と釋す。しかれはすなはち何の文によるとも。一向專念の義を立すへからさるそや。證誠殿の本地。

て。しばらく居をしめたまふ。今比いにしへ。口決をつたへ面受をとげし門徒等。をの〳〵好をしたひ。路をたつねて參集したまひけり。そのころ。常陸國。那荷西郡。大部郷に。平太郎なにかしと云庶民あり。聖人の訓を信して。專貳なかりき。而に或時。件の平太郎。所務に駈れて熊野に詣すへしとて。事のよしを尋申かために。聖人へまいりたるに被仰云。夫。聖教万差なり。いつれも機に相應すれは巨益あり。但末法の今時。聖道門の修行にをひては成すへからす。則我末法時中億々衆生。起行修道未有一人得者といひ。唯有淨土一門。可通入路と云々。此皆經釋の明文。如來の金言なり。而今唯有淨土の眞說に就て。忝。彼三國の祖師。をの〳〵この一宗を興行す。所以愚禿勸るところ。更に私なし。しかるに一向專念の義は。往生の肝腑。自宗の骨目なり。すなは

の終夜あそひし侍に。おきなもましはりつるか。いまなん。いさゝかよりゐはんへると思ほとに。夢にもあらすうつゝにもあらて。權現被仰云。たゝ今われ尊敬をいたすへき客人。この路をすきたまふへき事あり。かならす。慇懃の忠節を抽てゝ。殊に丁寧の饗應を儲くへしと云云。示現いまたさめおはらさるに。貴僧忽爾として影向したまへり。何そたゝ人にましまさん。神勅是炳焉なり。感應もとも恭敬すへしと云て。尊重崛請したてまつりて。さま〳〵に飯食を粧し。いろ〳〵に珍味を調けり

第五段

聖人故郷に歸て。往事をおもふに。年々歳々夢のことし幻のことし。長安洛陽の栖も。あとをとゝむるに嬾とて。扶風馮翊ところ〳〵に移住したまひき。五條西洞院わたり。これ一の勝地なりと

たし。やゝしはらくありて。有のまゝに日來の宿爵を述すといへとも。聖人又をところけるいろなし。たちところに弓箭をきり。刀杖をすて。頭巾をとり。柿衣をあらためて。佛敎に歸しつゝ。終に素懷をとけき。不思議なりし事なり。すなはち明法房これなり。上人。これを。つけたまひき

第四段

聖人東關の堺をいてゝ。花城の路にをもむきましくけり。或日晩陰にをよんで箱根の險阻にかゝりつゝ。はるかに行客の蹤ををくりて。漸人屋の樞にちかつくに。夜もすでに曉更にをよんで。月もはや孤嶺にかたふきぬ。于時聖人。あゆみよりつゝ。案内したまふに。まことに齡傾たる翁の。正く裝束たるか。いとことゝなくいてあひたてまつりて云やう。社廟ちかき所のならひ巫とも

く。救世菩薩の告命をうけしいにしへのゆめ。すでにいまと符合せりと

第三段

聖人常陸國にして。專修念佛の義をひろめたまふに。おほよそ疑謗の輩はすくなく。信順の族はおほし。而に。一人の僧山臥と云々ありて。動すれは。佛法に怨をなしつゝ。結句害心をさしはさんで。聖人を時々うかひゞたてまつる。聖人板敷山といふ深山を。つねに往返したまひけるに。彼山にして度々相待といへども。更にその節をとけす。つら〳〵綷の參差を案するに。頗る奇特のおもひあり。仍。聖人に謁せんとおもふこゝろつきて。禪室に行て尋申に。上人左右なくいてあひたまひけり。すなはち尊顏にむかひたてまつるに。害心たちまちに消滅して。あまさへ後悔の涙禁しか

爾者已非僧非俗。是故以禿字爲姓。空師幷弟子等坐諸方邊州經五年之居緒云云。空聖人。罪名藤井元彥。配所土佐國幡多。鸞聖人。罪名藤井善信。配所越後國府。此外門徒。死罪流罪皆略之。皇帝諱守成。號佐渡院。聖代建暦辛未歳。子月中旬第七日。岡崎中納言。範光卿をもて。勅免。此時聖人。右のごとく禿字を書て。奏聞し給に。陛下叡感をくだし。侍臣おほきに褒美す。勅免ありといへども。かしこに化をほどこさんがために。なをしばらく在國したまひけり

第二段

聖人越後國より。常陸國に越て。笠間郡。稲田鄉といふところに隱居したまふ。幽栖を占といへども。道俗跡をたづね。蓬戶を閉といへども。貴賤衢に溢。佛法弘通の本懷こゝに成就し。衆生利益の宿念たちまちに滿足す。この時聖人。おほせられてのたまは

本願寺聖人。親鸞傳繪下

第一段

淨土宗興行によりて。聖道門廢退す。これ空師の所爲なりとて。たちまちに罪科せらるへきよし。南北の碩才憤申けり、顯化身土文類六云。竊以。聖道の諸敎は行證久廢、淨土の眞宗は。證道今盛。然諸寺釋門昏敎兮。不知眞假門戶。洛都儒林迷行兮。無辨邪正道路。斯以興福寺學徒。奏達太上天皇諱尊成。號後鳥羽院。今上諱爲仁。號土御門院。聖曆承元丁卯歲。仲春上旬之候。主上臣下。背法違義。成忿結怨。因玆。眞宗興隆太祖。源空法師。幷門徒數輩。不考罪科。猥坐死罪。或改僧儀賜姓名處遠流。予其一也。

身の彌陀如來にこそと。身の毛いよたちて。恭敬尊重をいたす。また御くしはかりをうつされんに。足ぬへしと云云。かくのことく問答往復して。夢さめをはりぬ。しかるにいまこの貴坊にまいりて。みたてまつる尊容。夢中の聖僧に。すこしもたかはすとて。隨喜のあまりなみたをなかす。しかあれは夢にまかすへしとて。いまも御くしはかりをうつしたてまつりけり。夢想は仁治三年九月廿日夜なり。つら／＼この奇瑞をおもふに。聖人彌陀如來の來現といふこと炳焉なり。しかれはすなはち。弘通したまふ敎行。おそらくは彌陀の直說といひつへし。あきらかに無漏の慧燈をかゝけて。とをく濁世の迷闇をはらし。あまねく甘露の法雨をそゝて。はるかに枯竭の凡惑を。うるほさんかためなりと。仰へし信すへし

（上卷終）

日ころをふるところに。上人その心さしあることをかゝみておほせられて云。定禪法橋七條邊に居住にうつさしむへしと。入西房鑑察の旨を隨喜して。すなはちかの法橋を召請す。定禪左右なくまいりぬ。すなはち尊顔に向たてまつりて申ていはく。去夜奇特の靈夢をなん。感するところなり。その夢の中に拜したてまつるところの。聖僧の面像。いまむかひたてまつる容貌に。すこしもたかふところなしといひて。たちまちに隨喜感歎のいろふかくして。みつからその夢をかたる。貴僧二人來入す一人の僧のたまはく。この化僧の眞影をうつさしめんとおもふこゝろさしあり。ねかはくは禪下筆をくたすへしと。定禪問て云彼化僧たれひとそや。件の僧の云く。善光寺の本願の御房これなりと。こゝに定禪。たなこゝろをあはせひさまつきて。ゆめの中におもふやふ。さては生

しより以來。全くわたくしなし。然聖人の御信心も。他力より給らせたまう。善信か信心も他力也。故に。ひとしくしてかはるところなしと。申也と申侍しところに。大師聖人。まさしくおほせられて云。信心のかはると申は。自力の信にとりての事也。すなはち智慧各別なるかゆへに。信又各別也。他力の信心は。善悪の凡夫ともに。佛のかたよりたまはる信心なれは。源空か信心も。善信房の信心も。さらにかはるへからす。たゝ一なり。我かしこくて信するにあらす。信心のかはりあふておはしまさん人々は。わかまいらん淨土へはよもまいりたまはし。よく〳〵こゝろえらるへき事なりと云云。こゝに面々舌を卷。口を閉て。やみにけり

第八段

御弟子入西房。上人親鸞の眞影を。うつし奉とおもふ心さしありて。

なり侍るへしと。そのとき門葉あるひは屈敬の氣をあらはし。あるひは。欝悔のいろをふくめり

第七段

上人親鸞のたまはく。いにしへわか大師聖人源空の御まへに。聖信房。勢觀房。念佛房。以下の人々おほかりしとき。はかりなき諍論をしはんへることありき。そのゆへは。聖人の御信心と。善信か信心と。いさゝかもかはるところあるへからす。たゝ一也と申たりしに。この人々とかめていはく。善信房の。聖人の御信心と。我信心とひとしと申ることは謂なし。いかてかひとしかるへきと。善信申て云。なとかひとしと申さるへきや。其故は深智博覽にひとしからんとも申はこそ。まことにおほけなくもあらめ。往生の信心にいたりては。ひとたひ他力信心のことはりをうけたまはり

しと。而翌日集會のところに。上人親鸞のたはまく。今日は信不退。行不退の御座を。兩方にわかたるへきなり。何の座につきたまふへしとも。各各示給へと。そのとき三百餘人の門侶。みな其意をえさる氣あり。于時法印大和尚位聖覺。幷に釋の信空上人法蓮。信不退の御座に可著と云云。次に沙彌法力。熊谷直實入道。遲參して申云。善信の御房の御執筆何事哉と。善信上人のたまはく。信不退行不退の座をわけらるゝなりと。法力房申て云。しからは法力もるへからす。信不退の座にまいるへしと云云。仍これをかきのせたまう。こゝに數百人の門徒。群居すといへとも更に一言をのふる人なし。これ恐くは。自力の迷心に拘て。金剛の眞信に昏かいたすところ歟。人みな无音のあひた執筆上人親鸞自名をのせたまふやゝ暫ありて大師聖人おほせられて云く源空も信不退の座につら

のかすあり。都三百八十餘人と云云。しかりといへとも。親その化をうけ。懇その誨をまもる族。甚まれなり。わつかに五六輩にたにもたらす。善信聖人あるとき申たまはく。予難行道を閣て。易行道にうつり。聖道門を遁て。淨土門に入しより以來。芳命をかうふるにあらすよりんは。豈出離解脱の良因を蓄哉。喜の中の悦。なにことかこれにしかん。しかるに同室の好を結て。ともに一師の誨をあふく輩。これ多といへとも。眞實に報土得生の信心を成したらんこと。自他おなしくしりかたし。故に且は當來の親友たるほとをもしり。且は浮生の思出ともしはんへらんかために。御弟子參集の砌にして。出言つかふまつりて。面々の意趣を試とおもう。所望ありと云云。大師聖人のたまはく。この條もともしかるへし。すなはち明日人々來臨のとき。おほせられいたすへ

之敎命㆒所㆑令㆓選集㆒。眞宗之簡要念佛之奧義。攝㆓在斯㆒。見者易㆑諭。誠是。希有最勝之華文。無上甚深之寶典也。渉㆑年渉㆑日。蒙㆓其敎誨㆒之人。雖㆓千万㆒。云㆑親云㆑疎。獲㆓此見寫㆒之徒。甚以難。爾既書㆓寫製作㆒。圖㆓畫眞影㆒。是專念正業之德也。是決定往生之徵也。仍抑㆓悲喜之涙㆒。註㆓由來緣㆒云云

第六段

凡源空聖人。在生のいにしへ。他力往生の旨をひろめ給しに。世あまねくこれにこぞり。人こと〲くこれに歸しき。紫禁青宮の政を重する砌にも。先黃金樹林の蕚にこゝろをかけ。三槐九棘の道を正する家にも。直に四十八願の月をもてあそふ。しかのみならす。戎狄の輩黎民の類ひ。これをあふき。これを貴すといふことなし。貴賤轅をめくらし。門前市をなす。常隨昵近の緇徒そ

第五段

黒谷の先德源空在世のむかし。矜哀のあまり。あるときは恩許を蒙て。製作を見寫し。或時は眞筆を降して。名字を書賜。すなはち顯淨土方便化身土。文類六云。親鸞上人選述しかるに愚禿釋鸞。建仁辛酉曆。棄雜行兮歸本願。元久乙丑歲。蒙恩恕兮書選擇。同年初夏中旬第四日。選擇本願念佛集内題字。幷南無阿彌陀佛往生之業。念佛爲本與。釋綽空。以空眞筆。令書之同日。空之眞影申預。奉圖畫。同二年閏七月下旬第九日。眞影銘以眞筆。令書南無阿彌陀佛與。若我成佛十方衆生。稱我名號下至十聲。若不生者不取正覺。彼佛今現在成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生之眞文。又依夢告。改綽空字。同日。以御筆。令書名之字畢。本師聖人。今年七旬三御歲也。選擇本願念佛集者。依禪定博陸月輪殿兼實法名圓照

眞宗これによつて興し。念佛これによりて煽なり。是併ら。聖者の教誨によつて。さらに愚昧の今案をかまへす。彼二大士の重願たゞ一佛名を專念するにたれり。いまの行者。錯て脇士につかふることなかれ。たゞちに本佛をあふくへしと云云。故に上人親鸞傍皇太子を崇たまふ。けたしこれ佛法弘通の浩なる恩を。謝せんかためなり。

第四段

建長八年丙辰二月九日夜寅時。釋の蓮位夢想の告云。聖德太子親鸞上人を禮し奉て曰。

敬禮大慈阿彌陀佛。爲妙教流通來生者。五濁惡時惡世界中。決定即得無上覺也。しかれは祖師上人は。彌陀如來の化身にてましますといふこと。あきらかなり。

宗繁昌の奇瑞念佛弘興の表示也。しかれは聖人後のときおほせられて云。佛教むかし西天より興つて。經論いま東土に傳る。是偏に。上宮太子の廣德。山よりもたかく海よりもふかし。我朝欽明天皇の御宇に。これをわたされしによつて。すなはち淨土の正依經論等。此時に來至す。儲君もし厚恩をほどこしたまはすは。凡愚いかてか弘誓にあふことをえん。救世菩薩はすなはち儲君の本地なれは。垂迹興法の願をあらはさんかために。本地の尊容をしめすところなり。抑又。大師聖人源空もし。流刑に處せられたまはすは。我又配所におもむかんや。もしわれ配所におもむかすんは。何によつてか邊鄙の群類を化せん。是なを師教の恩致なり。大師聖人。すなはち勢至の化身。太子又。觀音の垂迹なり。このゆへに。われ二菩薩の引導に順して。如來の本願をひろむるにあり。

第三段

建仁三年癸亥四月五日夜寅の時。上人夢想の告ましましき。かの記云。六角堂の救世菩薩。顔容端嚴の聖僧の形を示現して。白衲の袈裟を著服せしめ。廣大の白蓮華に端坐して。善信に告命してのたまはく。行者宿報設女犯。我成玉女身被犯。一生之間能莊嚴。臨終引導生極樂文。救世菩薩善信にのたまはく。これはこれわが誓願なり。善信この誓願の旨趣を宣說して。一切群生にきかしむべしと云云。爾時善信。夢中にありながら。御堂の正面にして東方をみれば。峨々たる岳山あり。その高山に。數千萬億の有情。群集せりとみゆ。そのとき告命のごとく。此文のこゝろを。かの山にあつまれる有情に對して。說きかしめ畢とおぼえて。ゆめさめ畢云云。倩。この記錄を披。かの夢想を案ずるに。ひとへに眞

へ相具奉て。鬢髪を剃除し給き。範宴少納言公と號す。自爾以來。しば〳〵。南岳天臺の玄風を訪て。ひろく。三觀佛乘の理を達し。とこしなへに。楞嚴横川の餘流を湛て。ふかく。四敎圓融の義に。あきらかなり。

第二段

建仁第一の暦春のころ。上人廿九歳。隱遁のこゝろさしにひかれて。源空聖人の吉水の禪坊に尋まいり給き。是則。世くだり人つたなくして。難行の小路まよひやすきによりて。易行の大道におもむかんとなり。眞宗紹隆の大祖。聖人。ことに。宗の淵源をつくし。敎の理致をきはめて。これをのべ給に。たちところに。他力攝生の旨趣を受得し。飽まで。凡夫直入の眞心を。決定しまし〳〵けり

御傳鈔

本願寺聖人。親鸞傳繪上

夫。聖人の俗姓は。藤原氏。天兒屋根の尊。二十一世の苗裔大織冠。鎌子内大臣の玄孫。近衛大將右大臣。贈左從一位内麻呂公。號二後長岡大臣一。或號二閑院大臣一。贈正一位大政大臣。房前公孫。大納言式部卿。眞楯息なり。六代の後胤。弼の宰相有國の卿。五代の孫。皇太后宮大進。有範の子なり。しかあれば朝廷に仕て。霜雪をもいたゞき。射山に趨て。榮花をもひらくべかりし人なれとも。興法の因うちに萠。利生の縁ほかにもよほしゝによりて。九歳の春のころ。阿伯從三位範綱卿。于レ時。從四位上。前若狹守。後白河の上皇の近臣なり。上人の養父。前大僧正。慈圓。慈鎭和尚是也。法性寺殿御息。月輪殿長兄。の貴坊

御傳鈔

僧都範宴印

寶幢院内

學徒中

右應讃岐國僧意戒之求寫之

山門正覺院執行探題

前大僧正豪恕印

離山の御文

如今兵部を以て捧愚書以。予此年月台星の峯に在て。舎那圓頓の菓を拾ひ。三密止觀の水を汲とも。頑魯にていまた迷惑出離の曉を知らす。生死の顚倒を常に恐れ。福林國淸及修禪の寶殿に。抽丹誠。仰神冥慮。終に山王權現の神託をうけ。今夜この觀音の寶前に通夜せしめて重て菩薩の告命を蒙り。直に日頃の積願を滿足せしむ。仍て今日寶幢の場を謙下し。遁世の樞に隱れ畢ぬ。今生の拜謁是を限りに候以上。

建仁元年二月十日

辭山法書

身此書上洛中一日逗留十七日下國仍於燈下馳老筆留之爲利益也

宗昭 七十一

なせは。また廻向の義なり。この能歸の心。所歸の佛智に相應するとき。かの佛の因位の萬行。果地の萬德。こと〳〵く。名號のなかに攝在して。十方衆生の往生の行體となれは。阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。また殺生罪をつくるとき。地獄の定業をむすふも。臨終にかさねてつくらされとも。平生の業にひかれて。地獄にかならすおつへし。念佛もまたかくのことし。本願を信し。名號をとなふれは。その時分にあたりて。かならす往生はさたまるなりとしるへし。

執持鈔

（本云已下六行一本無）嘉曆元歲丙寅九月五日拭老眼染禿筆是偏爲利益衆生也　釋宗昭　五十七

先年如此予染筆與飛彈願智坊訖而今年曆應三歲庚辰十月十五日隨

死するものもあり。水にをほれて死するものもあり。火に燒て死するものあり。乃至寢死するものもあり。酒狂して死するたくひあり。これみな先世の業因なり。さらにのかるへきにあらす。かくのことき死期にいたりて。一旦の安心をおこさんほかは。いかてか凡夫のならひ。名號稱念の正念もおこり。往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束もしたかは丶。往生ののそみむなしかるへし。しかれは平生の一念によりて。往生の得否はさたまれるものなり。平生の時。不定のおもひに住せはかなふへからす。平生のとき。善知識のことはのしたに。歸命の一念を發得せは。そのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふへし。そも／＼南無は歸命。歸命のこゝろは往生のためなれは。またこれ發願なり。このこゝろあまねく萬行萬善をして。淨土の業因と

寳珠をはうるなりとしるへし。

一私にいはく。根機つたなしとて卑下すへからす。佛に下根をすくふ大悲あり。行業をろそかなりとてうたかふへからす。經に乃至一念の文あり。佛語に虚妄なし。本願あにあやまりあらんや。名號を正定業となつくることは。佛の不思議力をたもては。往生の業まさしくさたまるゆへなり。もし彌陀の名願力を稱念すとも。往生なを不定ならは。正定業とはなつくへからす。我すてに本願の名號を持念す。往生の業すてに成辨することをよろこふへし。かるかゆへに臨終にふたゝひ名號をとなへすとも。往生をとくへきこと勿論なり。一切衆生のありさま。過去の業因まちまちなり。また死の緣無量なり。やまひにをかされて死するものもあり。つるきにあたりて

のねかひなにゝよりてか成せん。されは本願や名號。名號や本願。本願や行者。行者や本願といふこのいはれなり。本願寺の聖人の御釋。教行信證にのたまはく。德號の慈父ましまさすは。能生の因かけなん。光明の悲母ましまさすは。所生の緣そむきなん。光明名號の父母。これすなはち外緣とす。眞實信の業識。これすなはち內因とす。內外因緣和合して。報土の眞身を得證すとみえたり。これをたとふるに。日輪須彌の半にめぐりて。他州をてらすとき。このさかひ闇冥なり。他州よりこの南州にちかつくとき。夜すでにあくるかことし。しかれは日輪のいつるによりて。夜はあくるものなり。世のひとつねにおもへらく。夜のあけて日輪。いつと。今いふところはしからさるなり。彌陀佛日の照觸によりて。無明。長夜のやみすでにはれて。安養往生の業因たる名號の

ゝれて。名號の因をうといふなり。かるかゆへに。宗師(善導大師の御ことなり)以光明名號。攝化十方。但使信心求念とのたまへり。但使信心求念といふは。光明と名號と。父母のことくにて。子をそたてはこくむへしといへとも。子となりていてくへきたねなきには。ちゝはゝとなつくへきものなし。子のあるとき。それかためにちゝといひ。はゝといふ號あり。それかことくに。光明をはゝにたとへ。名號をちゝにたとへて。光明のはゝ。名號のちゝ、といふことも。報土にまさしくむまるへき信心のたねなくはあるへからず。しかれは信心をおこして。往生を求願するとき。名號もとなへられ。光明もこれを攝取するなり。されは名號につきて。信心をおこす行者なくは。彌陀如來攝取不捨のちかひ成すへからす。彌陀如來の攝取不捨の御ちかひなくは。また行者の往生淨土

じたまふなり。増上緣とせさるはなしといふは。彌陀の御ちかひのすくれたまへるにまされるものなしとなり。

一又のたまはく。

光明名號の因緣といふことあり。彌陀如來四十八願の中に。第十二の願は。我ひかりきはなからんとちかひたまへり。これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり。かの願すてに成就して。あまねく無碍のひかりをもて。十方微塵世界をてらしたまひて。衆生の煩惱惡業を長時にてらしましますされはこのひかりの緣にあふ衆生やうやく無明の昏闇うすくなりて。宿善のたねきさす時。まさしく報土にむまるへき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり。しかれは名號執持することさらに自力にあらす。ひとへに光明にもよほさるゝによりてなり。これによりて。光明の緣にきさ

あらざるとも。佛智の不。思議なる奇特をあらはさんがためなれは。五劫があひだ。これを思惟し。永劫があひだこれを行して。かゝるあさましきものが。六趣四生よりほかはすみかもなく。うかむべき期なきがために。とりわきむねとおこされたれは。惡業に卑下すべからすとすゝめたまふむねなり。されはをのれをわすれあふぎて。佛智に歸するまことなくんは。をのれがもつところの惡業。なんぞ淨土の生因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて。三途八難にこそしづむべけれ。なにの要にかたゝん。しかれは善も極樂にむまるゝたねにならされは。往生のためにはその要なし。惡もまたさきのごとし。しか。これはたゝ機生得の善惡なり。かの土ののぞみ。他力に歸せすはおもひだへたり。これによりて善惡凡夫のむまるゝは。大願業力そと釋

さだむるところにあらすといふなりと。これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなり。

一又のたまはく。

光明寺の和尚(善導御こと)の大無量壽經の第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに。善惡凡夫得生者。莫不皆乘阿彌陀佛。大願業力爲增上緣といへり。このこゝろは。善人なれはとて。をのれがなすところの善をもて。かの阿彌陀佛の報土へむまるゝことかなふへからすとなり。惡人また申すにやおよふ。已か惡業のちから。三惡四趣の生をひくよりほか。豈報土の生因たらんや。しかれは。善業も要にたゝす。惡業もまたさまたけとならす。善人の往生するも。彌陀如來の別願超世の大慈大悲にあらすはかなひかたし。惡人の往生。またかけてもおもひよるへき報佛報土に

ら凡夫かならす地獄におつへし。しかるにいま。聖人の御化導にあつかりて。彌陀の本願をきゝ。攝取不捨のことはりをむねにをさめ。生死のはなれかたきをはなれ。淨土のむまれかたきを一定と期すること。さらにわたくしのちからにあらす。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するか。地獄の業たるを。いつはりて往生淨土の業因そと。聖人さつけたまふにすかされまいらせて。われ地獄におつといふとも。さらにくやしむおもひあるへからす。そのゆへは。明師にあひたてまつらてやみなましかは。決定惡道へゆくへかりつる身なるかゆへになり。しかるに善知識にすかされたてまつりて。惡道へゆかはひとりゆくへからす。師とともにおつへし。されはたゝ地獄なりといふとも。故聖人のわたらせたまふところへまいらんと。おもひかためたれは。善惡の生所わたくしの

名利に人師をこのむなり。往生淨土の爲には。たゝ信心をさきとす。そのほかをはかへりみさるなり。往生ほとの一大事。凡夫のはからふへきことにあらす。ひとすちに如來にまかせたてまつるへし。すへて凡夫にかきらす。補處の彌勒菩薩を初として。佛智の不思議をはからふへきにあらす。まして凡夫の淺智をや。かへす／＼如來の御ちかひにまかせたてまつるへきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。されはわれとして淨土へまいるへしとも。又地獄へゆくへしともさたむへからす。故聖人(黑谷源空聖人の御こと。なり)のおほせに。源空かあらんところへゆかんとおもはるへしと。たしかにうけたまはりしうへは。たとひ地獄なりとも。故聖人のわたせたらまふところへまいるへしとおもふなり。このたひ。もし善知識にあひたてまつらすは。われ

執持鈔

一本願寺聖人仰云。

來迎は諸行往生にあり。自力の行者なるかゆへに。臨終まつこと○來迎たのむことは。諸行往生のひとにいふへし。眞實信心の行人は。攝取不捨のゆへに。正定聚に住す。正定聚に住するかゆへにかならす滅度にいたる。かるかゆへに臨終まつことなし。來迎たのむことなし。これすなはち第十八の願のこゝろなり。臨終をまち。來迎をたのむことは。諸行往生をちかひまします第十九の願のこゝろなり。

一又のたまはく。

是非しらぬ。邪正もわかぬこの身にて。小慈小悲もなけれとも。

執持鈔

（已下二行一本無）私云應永廿六年己亥卯月十四日

以秘本之書寫之畢

改邪鈔終

改邪鈔末

さるやから。大憍慢の妄情をもては。まことにいかてか。佛智無上の他力を受持せんや。難以信斯法の御釋。いよ〳〵おもひあはせられて。嚴重なるもの歟。しるへし。

右此抄者(一本云)　祖師本願寺聖人親鸞面授口決于先師大綱如信法師之正旨報土得生之最要也余壯年之往日忝從受三代黑谷本願寺大綱傳持之血脈以降鎭所蓄二尊興說之目足也遠測宿生之値遇倩憶當來之開悟佛恩之高大宛超于迷盧八萬之巓師德之深廣(一本殆)過于蒼溟三千之底爰近會號祖師御門葉之輩中搆非師傳之今案自義謬贖權化之淸流恣稱當敎自失誤他云云太不可然不可不禁過因茲(一本爲)焉碎彼邪幢而挑厥正燈錄斯一名曰改邪鈔而已

建武丁丑第四曆季商下旬廿五日染翰訖不圖相當曾祖聖人遷化之聖日是知不違師資相承之直語應尊可喜矣

釋宗昭六十八

口傳と稱するや。自失誤他の過佛祖の智見にそむくもの歟。おそるへし。あやふむへし。

一至極末弟の建立の草堂を稱して本所とし。諸國こそりて崇敬の聖人の御本廟本願寺をは參詣すへからすと。諸人に障碍せしむる。冥加なきくはたての事。

夫慢心は聖道の諸教にきらはれ。佛道をさまたくる魔とこれをのへたり。わか眞宗の高祖。光明寺の大師。釋してのたまはく。憍慢弊懈怠。難以信此法とて。懈慢と弊と懈怠とは。もてこの法を信することかたしとみへたれは。憍慢の自心をもて。佛智をはからんと擬する不覺鈍機の器としては。さらに佛智無上の他力をきゝうへからされは。祖師の御本所をは蔑如し。自建立のわたくしの在所をは。本所と自稱するほとの冥加を存せす。利益をおもは

智滿入して。不成の迷心を他力より成就して。願入彌陀界の往生の正業成するときを。能發一念喜愛心とも。不斷煩惱得涅槃とも。入正定聚之數とも（己下六字又一本無）「住不退轉とも。」聖人釋しましませり。これすなはち即得往生の時分なり。この娑婆生死の五蘊所成の肉身。いまたやふれすといへとも。生死（られ又一本）流轉の本源をつなく。自力の迷情。共發金剛心の一念にやふれて。知識傳持の佛語に歸屬するをこそ。自力をすて、他力に歸するともなつけ。また即得往生ともならひはんへれ。またくわか我執をもて隨分に是非をおもひかたむるを他力に歸すとはならはす。これを（一本無）金剛心ともいはさるところなり。三經一論。五祖の釋。以下當流高祖(親鸞)聖人自證をあらはしましまず。御製作敎行信證等にみへさるところなり。しかれは（と又一本）なにをもてか。ほしいまゝに自由の妄說をのへて。みたりに祖師一流の

しかも祖師の御末弟と稱するこの條。ことにもておとろきおほゆるところなり。まつ能化所化をたて。自力他力を對判して。自力をすてゝ他力に歸し。能化の說をうけて。所化は信心を定得するこそ。今師御相承の口傳にはあひかなひはんへれ。いまきこゆる邪義のことくは。煩惱成就の凡夫の妄心をおさへて金剛心といひ。行者の三業所修の念佛をもて。一向一心の行とすと云〻。この條つや〳〵自力他力のさかひをしらすして。ひとをもまよはし。われもまよふもの歟。そのゆへは。まつ金剛心成就といふ。金剛（一本謂）はこれたとへなり。凡夫の迷心において。金剛の類同すへき謂なし。凡情はきはめて不成なり。されは大師の御釋には。たとひ淸心をおこすといへとも。みつに畫せるかことしと云〻。不成の義。これをもてしるへし。しかれは凡夫不成の迷情に。令諸衆生の佛

者は。謝徳のおもひをもはらにして。如來の代官とあふいて。あかむへきにてこそあれ。その知識のほかは別の佛なしといふこと。智者にわらはれ。愚者をまよはすへきいひこれにあり。あさましく。

一凡夫自力の心行をおさへて。佛智證得の行體といふ。いはれなき事。

三經のなかに。觀經の至誠深心等の三心をは。凡夫のおこすところの自力の三心そとさため。大經所說の至心信樂欲生等の三信をは。他力よりさつけらるゝところの佛智とわけられたり。しかるに方便より眞實へつたひ。凡夫發起の三心より。如來利他の信心に通入するそとおしへおきまします。祖師(親鸞)聖人の御釋を拜見せさるにや。ちかころこのむねをそむひて。自由の妄說をなして。

とくこはみたる邪義にあらす。子細多重あり。ことしけきにより
て。いまの要須にあらさるあひた。これを略す。善知識において
は。本尊のおもひをなすへき條。渇仰のいたりにおいては。その
理しかるへしといへとも。それは佛智の次第相承しましまず願力
の信心。佛智よりもよほされて。佛智に歸屬するところの一味な
るを。仰崇の分にてこそあれ。佛身佛智を本體とおかすして。た
ゝちに凡形の知識をおさへて。如來の色相と眼見せよとすゝむら
んこと。聖教の指説をはなれ。祖師の口傳にそむけり。本尊をは、
なれていつくのほとより知識は出現せるそや。荒涼なり。髣髴な
りたゝ。實語をつたへて口授し。佛智をあらはして決得せしむる
恩徳は。生身の如來にもあひかはらす。木像ものいはす。經典く
ちなけれは。つたへきかしむるところの恩徳を耳にたくはへん行

改邪鈔　末

しつらひたまふをもて眞宗とす。しかるに風聞の邪義のことくんは。廢立の一途をすてゝ。此土他土をわけす。淨穢を分別せす。此土をもて淨土と稱し。凡形の知識をもて。かたしけなく三十二相の佛體とさたむらんこと。淨土の一門においては。かゝる所談あるへしともおほへす。下根愚鈍の短慮。おほよす迷惑するところなり。己身の彌陀。唯心の淨土と談する聖道の宗義に。差別せるところいつくそや。もとも荒涼といひつへし。ほのかにきく。かくのことくの所談の言語をましふるを夜中の法門と號すと云云。

またきく。祖師の御解釋。敎行證にのせらるゝところの顯彰隱密の義といふも。隱密の名言は。すなはちこの一途を顯露にすへからさるを。隱密と釋したまへりと云云。これもてのほかの僻韻歟。

かの顯彰隱密の名言は。わたくしなき御釋なり。それはかくのこ

乘所談の極理とおほしきには。已身の彌陀。唯心の淨土と談する歟。この所談においては。聖のためにして凡のためにあらす。かるかゆへに淨土の教門は。もはら凡夫引入のためなるかゆへに。己身の觀法もおよはす。唯心の自説もかなはす。たゝとなりのたからをかそふるにたり。これによりて。すてに別して淨土の一門をたてゝ。凡夫引入のみちを立せり。龍樹菩薩の所判。あにあやまりあるへけんや。眞宗の門においては。いくたひも廢立をさきとせり。廢といふは捨なりと釋す。聖道門の此土入聖得果。己身の彌陀。唯心の淨土等の凡夫不堪の自力の修道をすてよとなり。立といふは。すなはち彌陀他力の信をもて凡夫の信とし。彌陀他力の行をもて凡夫の行とし。彌陀他力の作業をもて凡夫報土に往生する正業として。この穢界をすてゝ。かの淨刹に往生せよと

事。

それ自宗の正依經たる三經所説の癈立においては。ことしげきによりてしばらくさしをく。八宗の高祖とあがめたてまつる龍樹菩薩の所造。十住毗婆娑論のこときんは。菩薩阿毘跋致をもとむるに二種の道あり。ひとつには難行道。ふたつには易行道。その難行道といふは多途あり。粗五三をあげて義のこゝろをしめさんといへり。易行道といふは。たゞ信佛の因縁をもて。淨土にむまれんと願ずれば。佛力住持して。すなはち大乘正定の聚にいれたまふといへり。曾祖師黒谷の先德。これをうけて難行道といふは聖道門なり。易行道といふは淨土門なりとのたまへり。これすなはち聖道淨土の二門を混亂せずして。淨土の一門を立せんがためなり。しかるに聖道門のなかに。大小乘權實の不同ありといへとも。大

する十方衆生たる凡夫。因果相順の理に封せられて。別願所成の報土に凡夫むまるへからさるゆへなり。いま報土得生の機にあたへましますす佛智の一念は。すなはち佛因なり。かの佛因にひかれて。うるところの定聚のくらゐ。滅度にいたるといふは。すなはち佛果なり。この佛因佛果においては。他力より成すれは。さらに凡夫のちからにてみたすへきにあらす。また撥無すへきにあらす。しかれはなにゝよりてか。因果撥無の機あるへしといふことをいはんや。もともこの名言他力の宗旨をもはらにせらるゝ當流にそむけり。かつてうかゝひしらさるゆへ歟。はやく停止すへし。一本願寺の聖人の御門弟と號するひと〳〵のなかに。知識をあかむるをもて。彌陀如來に擬し。知識所居の當體をもて。別願眞實の報土とすといふ。いはれなき

改邪鈔　末

の強盛なるに。よこさまに超截せられたてまつりて。三途の苦因をなかくたちて。猛火洞燃の業果をとゝめられたてまつること。おほきに因果の道理にそむけり。もし深信因果の機たるへくんは。植ところの悪因のひかんところは。悪果なるへけれは。たとひ彌陀の本願を信するといふとも。その願力はいたつらことにて。念佛の衆生三途に墮在すへきをや。もししかりといはゝ。彌陀五劫思惟の本願も。釋尊無虚妄の金言も。諸佛誠諦の證誠も。いたつらことなるへきにや。おほよそ他力の一門においては。釋尊一代の説敎に。いまたその例なき通途の性相をはなれたる言語道斷の不思議なりといふは。凡夫の報土にむまるゝといふをもてなり。もし因果相順の理にまかせは。釋迦彌陀諸佛の御ほねをりたる他力の別途。むなしくなりぬへし。そのゆへは。たすけましまさんと

らす。たとひかの經の名目をとるといふとも。義理參差せは。いよ〱いはれなかるへし。そのゆへは。かの經の深信因果は。三福業の隨一なり。かの三福の業は。また人天有漏の業なり。なかんつくに深信因果の道理によらは。あに凡夫往生ののそみをとけんや。まつ十惡において。上品に犯するものは地獄道に墮し。中品に犯するものは餓鬼道に墮し。下品に犯するものは畜生道におもむくといへり。これ大乘の性相のさたむるところなり。もしいまの凡夫所犯の現因によりて。當來の果を感すへくんは。三惡道に墮在すへし。人中天上の果報。なをもて五戒十善またからすは。いかてかのそみをかけんや。いかにいはんや。出過三界の無漏無生の報國報土にむまるゝ道理あるへからす。しかりといへとも。彌陀超世の大願。十惡五逆四重謗法の機のためなれは。かの願力

ますゆへなり。これをもておもふに。いよ／＼葬喪を一大事とすへきにあらす。もとも停止すへし。

一おなしく祖師の御門流と號するやから。因果撥无といふことを持言とすること。いはれなき事。

それ三經のなかに。この名言をもとむるに。觀經に深信因果の文あり。もしこれをおもへる歟。およそ祖師聖人御相承の一義は。三經ともに差別なしといへとも。觀無量壽經は。機の眞實をあらはして。所説の法は定散をおもてとせり。機の眞實といふは。五障の女人惡人を本として。韋提を對機としたまへり。大無量壽經は。深位の權機をもて。同聞衆として。所説の法は。凡夫出要の不思議をあらはせり。大師聖人の御相承は。もはら大經にあり。觀經所説の深信因果のことはをとらんこと。あなかち甘心すへか

本とすへきやうに衆議評定する。いはれなき事

右聖道門について。密教所談の父母所生身。速證大覺位といへるはかは。淨刹に往詣するも。苦域に墮在するも。心の一法なり。またく五蘊所成の肉身をもて。凡夫速疾に淨刹のうてなにのほるとは談せす。他宗の性相に異する自宗の廢立。これをもて規とす。しかるに往生の信心の沙汰をは手かけもせすして。沒後葬禮の助成扶持の一段を。當流の肝要とするやうに談合するによりて。祖師の御己證もあらはれす。道俗男女往生淨土のみちをもしらす。たゝ世間淺近の無常講とかやのやうに。諸人おもひなすことこゝろうきことなり。かつは本師聖人のおほせにいはく。某(親鸞)閉眼せは。賀茂河にいれて魚にあたふへしと云云。これすなはちこの肉身をかろんして。佛法の信心を本とすへきよしをあらはしまし

業とすくりとり。餘の四種をは。助業といへり。正定業たる稱名念佛をもて。往生淨土の正因とはからひのるすら。なをもて凡夫自力のくはたてなれは。報土往生かなふへからすと云云。そのゆへは。願力の不思議をしらさるによりてなり。當敎の肝要凡夫のはからひをやめて。たゝ攝取不捨の大益をあふくものなり。起行をもて。一向專修の名言をたつといふとも。他力の安心決得せすんは。祖師の御己證を相續するにあらさるへし。宿善もし開發の機ならは。いかなる卑劣のともからも。願力の信心をたくはへつへしと。しるへし。

一當流の門人と號するともからのなかに。祖師先德の報恩謝德の集會のみきりにあ。りて。往生淨土の信心においては。その沙汰におよはす。沒後葬禮をもて

このとき願力をもて。往生決得すといふは。すなはち攝取不捨のときなり。もし觀經義によらは。安心定得といへる御釋これなり。また小經によらは。一心不亂ととけるこれなり。しかれは祖師聖人。御相承弘通の一流の肝要これにあり。こゝをしらさるをもて他門とし。これをしれるをもて御門弟のしるしとす。そのほかかならすしも外相において。一向專修行者のしるしをあらはすへきゆへなし。しかるをいま「以下十八字又一本無」風間の說のことくんは。三經一論につきて。」文證をたつねあきらむるにおよはす。たゝ自由の妄義をたてゝ。信心の沙汰をさしをきて。起行の篇をもて。まつ雜行をさしをきて。正行を修すへしとすゝむと云云。これをもて一流の至要とするにや。この條。總しては眞宗の廢立にそむき。別しては祖師の御遺訓に違せり。正行五種のうちに。第四の稱名をもて正定

たゝおのれかこゝろの生得なるにまかせて。田舎のこゝろは。ちからなくなまりて念佛し。王城のこゝろは。なまらさるおのれなりのこゝろをもて念佛すへきなり。こゝろ佛事をなすいはれも。かたのことくの結縁分なり。音曲さらに報土往生の眞因にあらす。たゝ他力の一心をもて。往生の時節をさためまします條。口傳といひ。御釋といひ。顯然なり。しるへし。

一 一向專修の名言をさきとして。佛智の不思議をもて。報土往生をとくるいはれをは。その沙汰におよはさる。いはれなき事。

それ本願の三信○（心一本）といふは。至心信樂欲生これなり。まさしく願成就したまふには。聞其名號。信心歡喜。乃至一念ととけり。この文について。凡夫往生の得否は。乃至一念發起の時分なり。

したゝ彌陀願力の不思議。凡夫往生の他力の一途はかりを。自行化他の御つとめとしまし〱さ。音聲の御沙汰さらにこれなし。しかれともときの世の風儀。多念の聲明をもてひとおほくこれをもてあそふについて。御坊中のひと〱も。御同宿達も。かの聲明にこゝろをよするについて。いさゝかこれを稽古せらるゝひと〱ありけり。そのとき東國より上洛の道俗等。御坊中逗留のほと耳にふれける歟。またく聖人のおほせとして。音曲をさためて。稱名せよといふ御沙汰なし。されはふしはかせを御沙汰なきうへは。なまれるをまねひ。なまらさるをもまなふへき御沙汰におよはさるものなり。しかるにいま生得になまらさるこゑをもて。生得になまれる坂東こゑをわさとまねひて。字聲をゆかむる條。音曲をもて往生の得否をさためられたるににたり。詮するところ。

一をまなんて。念佛するいはれなき事。

それ五音七聲は。人々生得のひゝきなり。彌陀淨國の水鳥樹林のさへつる音。みな宮商角徵羽にかたどれり。これによりて曾祖師聖人のわか朝に應をたれまし〱て。眞宗を弘興のはじめ。こゑ佛事をなすいはれあれはとて。かの淨土の依報のしらへをまなんて迦陵頻伽のことくなる能聲をえらんて。念佛を修せしめて。萬人のきゝをよろこはしめ。隨喜せしめたまひけり。それよりてのかた。わに朝に一念多念の聲明あひわかれて。いまにかたのこしく餘塵をのこさる。祖師聖人の御ときは。さかりに多念聲明の法燈倶阿彌陀佛の餘流。充滿のころにて。御坊中の禪襟達も。少々これをもてあそはれけり。祖師の御意巧としてはまたく念佛のはひ。き。いかやうに節はかせをさたむへしといふおほせな

それ得分といふ疊字は世俗よりおこれり。出世の法のなかに。經論章疏をみるに。いまたこれなし。しかれとも。おりにより。ときにしたかひて。ものをいはんときは。このことは出來せさるへきにあらす。しかるに謳歌のことくんは。造次顚沛。このことはをもて規模とすと云云。

七箇條の御起請文には。念佛修業の道俗男女。卑劣のことはをもて。なましゐに法門をのへは。智者にわらはれ。愚人をまよはすへしと云云。かの先言をもて。いまを案するに。すこふるこのたくひ歟。もとも智者にわらはれぬへし。かくのことときのことは。もとも頑魯なり。荒涼に義にもあたらぬ疊字をつかふへからす。すへからくこれを停止すへし。

一なまらさる音聲をもて。わさと片國のなまれるこゑ

くのごとく簡別隔略せは。おの〳〵確執のもとゐ。我慢の先相たるへきをや。この段祖師の御門弟と號するともからのなかに。當時さかんなりと云云。祖師聖人御在世のむかし。かつてかくのことくはなはたしき御沙汰なしと。まのあたりうけたまはりしことなり。たゝことにより。便宜にしたかひて。わつらひなきを本とすへし。いま謳歌の説においては。もとも停止すへし。

改邪鈔 本終

改邪鈔（末）

一祖師聖人の御門弟と號するともからのなかに。世出世の二法について得分せよといふ名目を。行住坐臥につかふこゝろえかたき事。

生といふ。廢立をしはらくさたむるはかりなり。和會するときは。此土他土一異に。凡聖不二なるへし。これによりて。念佛修行の道場とて。あなかち局分すへきにあらさる歟。しかれとも廢立の初門にかへりて。いくたひも爲凡をさきとして。道場となつけてこれをかまへ。本尊を安置したてまつるにてこそあれ。これは行者集會のためなり。一道場に來集せんたくひ。遠近ことなれは。來臨の便宜不同ならんとき。一所をしめても。ことのわつらひありぬへからんには。あまたところにも道場をかまふへし。しからさらんにおいては。町のうち。さかひのあひたに面々各々に。これをかまへてなんの要かあらん。あやまつてことしけくなりなは。その失ありぬへきもの歟。そのゆへは同一念佛無別道故なれは。同行はたかひに四海のうち。みな兄弟のむつひをなすへきに。か

いては。あとを娑婆にとをさかりて。（一本無）心を淨域にすましむるうへは。なにゝよりてかこの決判におよふへきや。しかるに二季の正時（時正又一本）をえりすくりて。その念佛往生の時分とさためて。起行をはけますともから。祖師の御一流にそむけり。いかてか當教の門葉と號せんや。しるへし。

一道場と號して簷をならへ墻をへたてたるところにて。各別（と一本）々々に會場をしむる事。

おほよそ。（す一本）眞宗の本尊は盡十方無碍光如來なり。かの本尊所居の淨土は。究竟如虛空の土なり。こゝをもて祖師の教行證には。佛はこれ不可思議光佛。土はまた無量光明土なりとのたまへるこれなり。されは天親論主は。勝過三界道と判したまへり。しかれとも。聖道門の此土の得道といふ教相にかはら。（しめ又一本）んために他土の往

このゆへをもて他力の安心をさきとしまします。それについて三經の安心あり。そのなかに大經をもて眞實とせらる。大經のなかには第十八の願をもて本とす。十八の願にとりては。また願成就をもて至極とす。信心歡喜乃至一念をもて。他力の安心とおぼしめさるゝゆへなり。この一念を他力より發得しぬるのちは。生死の苦海をうしろになして。涅槃の彼岸にいたりぬる條勿論なり。この機のうへは。他力の安心よりもよほされて。佛恩報謝の起行作業はせらるべきによりて。行住坐臥を論ぜす。長時不退に到彼岸のいひあり。このうへは。あながち中陽院の衆聖。衆生の善惡を決斷する到彼岸の時節をかぎりて。安心起行等の正業をはげますべきにあらざる歟。かの中陽院の斷惡修善の。決斷は。佛法疎遠の衆生を濟度せしめんがための集會なり。いまの他力の行者にお

から。法名をもちゐる條。本形としては。往生淨土のうつはものにきらはれたるににたり。たゞ男女善惡の凡夫をはたらかさぬ本形にて。本願の不思議をもて。むまるへからさるものをむまれさせたれはこそ。超世の。願ともなづけ。横超の眞道ともきこへはんへれ。この一段。ことに曾祖師(源空)ならびに祖師(親鸞)已來。傳授相承の眼目たり。あへて聊爾に處すへからさるものなり。

一　一季の彼岸をもて。念佛修行の時節とさだむるいはれなき事。

それ淨土。一門について。光明寺の和尚の御釋をうかゞうに。安心起行作業のみつありとみへたり。そのうち起行作業の篇をは。なを方便のかたとさしをいて。往生淨土の正因は。安心をもて定得すへきよしを釋成せらるゝ條顯然なり。しかるに吾大師聖人。

一優婆塞優婆夷の形體たりなから。出家のことくしゐて法名をもちゐるいはれなき事。

本願の文に。すてに十方衆生のことはあり。宗家の御釋に。また道俗時衆とらあり。釋尊四部の遺弟に。道の二種は。比丘比丘尼。俗の二種は。優婆塞優婆夷なれは。俗の二種も。佛弟子のかすにいれる條勿論なり。なかんつくに。不思議の佛智をたもつ道俗の四種。通途の凡體に［已下十一字一本無］こえたるをやその形體においては。しはらくさしをく。佛願力の不思議をもて。無善造惡の凡夫を攝取不捨したまふときは。道の二種はいみしく。俗の二種か往生のくらゐに不足なるへきにあらす。その進道の階次をいふときたゝおなし座席なり。しかるうへはかならすしも俗の二種をしりそけて。道の二種をすゝましむへきにあらさるところに。女形俗形たりな

まつる御門弟達。堂舍を營作するひとなかりき。たゞ道場をは。すこし人屋に差別あらせて。小棟をあけてつくるへきよしまで御誡諌ありけり。中古よりこのかた。御遺訓にとをさかるひと〳〵の世となりて。造寺土木のくはたてにおよふ條。おほせに違するいたり。なけきおもふところなり。しかれは造寺のとき。義をいふへからさるよしの怠狀。もとよりあるへからさる題目たるうへは。これにちなんたる誓文。ともにもてしかるへからす。すへての〔一本〕事数箇條におよふといへとも。違變すへからさる儀〔義一本〕において。嚴重の起請文を同行にかゝしむること。かつは祖師の遺訓にそむき。かつは宿緣の有無をしらす。無法の沙汰ににたり。詮するところ。聖人御相傳の正義を存せんともがら。これらの今案に混して。みたりに邪義にまよふへからす。つゝしむへし。おそるへし。

かう。るべきよしの起請文をかゝしめて。數箇條の篇目をたてゝ。連署と號するいはれなき事。

まづ數箇條のうち。智識をはなるへからさるよしの事。祖師聖人御在世のむかし。より〳〵かくのごときの義をいたすひとありけり。御制のかぎりにあらさる條。過去の宿縁にまかせられて。かつてその御沙汰なきよし。先段にのせおはりぬ。又子細かの段に、違すへからす。つぎに本尊聖教をうばひとりたてまつらんとき。おしみたてまつるへからさるよしのこと。またもて同前さきに違すへからず。つぎに堂をつくらんとき。義をいふへからさるよしの事。おほよそ造像起塔等は。彌陀の本願にあらさる所行なり。これによりて一向專修の行人。これをくはたつへきにあらす。されば祖師聖人御在世のむかし。ねんごろに一流を面授口決したて

れみな過去の因縁によることなれは。今生一世のことにあらす。かつはまた宿善。ある機は。正法をのふる善智識にしたしむへきによりて。まねかされともひとをまよはすましき法燈にはかならすむつふへきいはれなり。宿善なき機は。まねかされともおのつから悪智識にちかつきて。善智識にはとをさかるへきいはれなれは。むつひらるゝも。とをさかるも。かつは智識の瑕瑾もあらはれしられぬへし。所化の運否。宿善の有無も。もとも能所ともに耻へきものをや。しかるにこのことはりにくらきかいたすゆへ歟。一旦。我執をさきとして。宿縁の有無をわすれ。わか同行ひとの同行と相論すること愚鈍のいたり。佛祖の照覧をはゝからさる條。至極つたなきもの歟。いかん。しるへし。

一念佛する同行智識にあひしたかはすんは。その罰を

もろ〳〵の煩惱おこる。智者これを遠離すること百由旬。いはんや一向念佛の行人においてをやと云云。しかれはたゝ是非を糾明し。邪正を問答する。なをもてかくのことく嚴制におよふ。いはんや人倫をもて。もし世財に類する所存ありて。相論せしむる歟。いまたそのこゝろをえす。祖師聖人御在世に。ある御直弟のなかに。つねにこのさたありけり。そのときおほせにいはく。世間の妻子眷屬も。あひしたかふへき宿縁あるほとは。別離せんとすれとも。捨離するにあたはす。宿縁つきぬるときは。したひむつれ〳〵とすれともかなはす。いはんや出世の同行等侶においては。凡夫のちからをもてしたしむへきにもあらす。はなるへきにもあらす。あひともなへといふとも。縁つきぬれは疎遠になる。したしむましとすれとも。縁つきさるほとはあひともなふにたれり。こ

かるへからさる事。

この條。おなしく前段の篇目にあひおなしきもの歟。大師聖人の御自筆をもて。諸人にかきあたへ、、わたしましまず聖敎をみたてまつるに。みな願主の名をあそはされたり。いまの新義のことくならは。もとも聖人の御名をのせらるへき歟。しかるにその義なきうへは。これまた非義たるへし。これを案するに。智識の所存に。同行あひそむかんとき。わか名字をのせたれはとて。せめかへさん料のはかりこと歟。世間の財寶を沙汰するにゝたり。もとも停止すへし。

一わか同行。ひとの同行と簡別して。これを相論するいはれなき事。

曾祖師(源空聖人の七ヶ條の御起請文にいはく。諍論のところには

さにあらす。いかてかたやすく。世間の財寳なんとのやうに。せめかへしたてまつるへきや。釋親鸞といふ自名のりたるを。法師にくけれは袈裟さへの風情に。いかなる山野にもすくさぬ。聖敎をすてたてまつるへきにや。たとひしかりといふとも。親鸞またくいたむところにあらす。すへからくよろこふへきにたれり。そのゆへはかの聖敎。すてたてまつるところの有情。蠢々のたくひにいたるまて。かれにすくはれたてまつりて。苦海の沈没をまぬかるへし。ゆめ〳〵この義あるへからさることなりとおほせことありけり。そのうへは。末學として。いかてか新義を骨張せんや。よろしく停止すへし。

一本尊ならひに聖敎の外題のしたに。願主の名字をさしをきて。智識と號するやからの名字をのせおく。し

相應の難行をましへて。當今相應の他力執持の易行をけかさんこと。總しては三世諸佛の冥應にそむき。別しては釋迦彌陀二尊の矜哀をわすれたるににたり。おそるへし。はつへしならくのみ。

一談議かたるとなつけて同行智識に鉾楯のとき。あかむるところの本尊聖教をうはひとりたてまつるいはれなき事。

右祖師(親鸞)聖人御在世のむかし。ある御直弟御示誨のむねを領解したてまつらさるあまり。念結して貴前をしりそきて。すなはち東關に下國のとき。ある常隨の一人の御門弟。この仁にさつけらるゝところの聖教の外題に。聖人の御名をのせられたるあり。すみやかにめしかへさるへきをやと云云。ときに祖師のおほせにいはく。本尊聖教は衆生利益の方便なり。わたくしに凡夫自專すへ

たくしの弟子にあらすと云云。これによりてたかひに仰崇の禮儀をたゝしくし。昵近の芳好をなすへしとなり。その義なくして。あまさへ惡口をはく條。こと〴〵く祖師先徳の御遺訓をそむくにあらすや。しるへし。

一同行を勘發のとき。あるひは寒天に冷水をくみかけ。あるひは炎旱に艾灸をくはふるらのいはれなき事。

むかし役の優婆塞の修驗のみちをもはらにせし。山林斗藪の苦行。樹下石上の坐臥。これみな一機一緣の方便。權者權門の難行なり。身をこの門にいるゝともからこそ。かくのことき の苦行をはもちゐけにはんへれ。さらに出離の要路にあらす。ひとへに魔界有緣の僻見なり。淨土の眞宗においては。超世希有の正法。諸佛證誠の祕懷。他力即得の直道。凡愚横入の易行なり。しかるに末世不

にはその德をかくしまします。大聖權化の救世觀音の再誕。本願寺(親鸞)聖人の御門弟と號しなからうしろあはせに振舞かへたる後世者氣色の威儀をまなふ條。いかてか祖師の冥慮にあひかなはんや。かへす〲停止すへきものなり。

一弟子と稱して同行等侶を自專のあまり。放言惡口することいはれなき事。

光明寺の大師の御釋には。もし念佛するひとは。人中の好人なり。妙好人なり。最勝人なり。上人なり。上上人なりとのたまへり。しかれはそのむねにまかせて。祖師のおほせにも。それかしはまたく弟子一人ももたす。そのゆへは彌陀の本願をたもたしむるほかは。なにことをおしへてか弟子と號せん。彌陀の本願は佛智他力のさつけたまふところなり。しかれはみなともの同行なり。わ

佛等の門人をいふ歟。かのともからは。むねと後世者氣色をさきとし。佛法者とみへて。威儀をひとすかたあらはさんとさため振舞歟。そか大師聖人の御意は。かれにうしろあはせなり。つねの御持言には。われはこれ賀古の敎信沙彌この沙彌の樣。禪林永觀の十因にみへたり)の定なりと云云。しかれは縡を専修念佛停廢のときの左遷の勅宣によせましまして。御位署には。愚禿〔おろかなるかふろ又一本〕の字をのせらる。これすなはち僧にあらす。俗にあらさる儀を表して〔あらはして又一本〕。敎信沙彌のことくなるへしと云云。これによりてたとひ牛盜〔ぬす人一本〕とはいはるとも。もしは善人。もしは後世者。もしは佛法者とみ(ゆ)るやうに振舞へからすとおほせあり。この條かの裳無衣黒袈裟をまなふともからの意巧に雲泥懸隔なるものをや。顯密の諸宗。大小乘の敎法に。なを超過せる〔こえすぎたる又一本〕彌陀他力の宗旨を心底〔こゝろのそこ又一本〕にたくはへて。外相

一遁世のかたちをことゝし。異形をこのみ。裳無衣を著し黒袈裟をもちゆるしかるへからさる事。

それ出世の法においては。五戒と稱し。世法にありては五常となつくる仁義禮智信をまもりて。內心には他力の不思議をたもつへきよし。師資相承したてまつるところなり。しかるにいま風聞するところの異樣の儀においては。世間法をはわすれて。佛法の義はかりをさきとすへしと云云。これによりて世法を放呵するすかたとおほしくて。裳無衣を著し。黒袈裟をもちゐる歟。はなはたしかるへからす。末法燈明記(傳敎大師諱最澄製作)には。末法には袈裟變してしろくなるへしとみへたり。しかれは末世相應の袈裟は白色なるへし。黑袈裟においては。おほきにこれにそむけり。當世都鄙に流布して。遁世者と號するは。多分一遍房。他阿彌陀

戀慕し。仰崇せんかために。三國傳來の祖師先德の尊像を圖繪し。安置すること。これまたつねのことなり。そのほかは祖師聖人の御遺訓として。たとひ念佛修行の號ありといふとも。道俗男女の形體を。面々各々。圖繪して所持せよといふ御おきて。いまたきかさるところなり。しかるにいま。祖師先德のおしへにあらさる自義をもて。諸人の形體を安置の條。これ渇仰のため歟。これ戀慕のため歟。不審なきにあらさるものなり。本尊なをもて。觀經所説の十三定善の第八の像觀よりいてたる丈六八尺隨機現の形像をは。祖師あなかちに御庶幾御依用にあらす。天親論主の禮拜門の論文。すなはち歸命盡十方無碍光如來をもて眞宗の御本尊とあかめましき。いはんや。その餘の人形において。あにかきあかめましますへきや。末學自己の義。すみやかにこれを停止すへし。

稱する條。冥衆の照覽に違し。智者の謗難をまねくもの歟。おそるへし。あやふむへし。

一繪系圖と號して。おなしく自義をたつる條謂なき事。

それ聖道淨土の二門について。生死出過の要旨をたくはふること。經論章疏の明證ありといへとも。自見すればかならすあやまるところあるによりて。師傳口業をもて最とす。これによりて意業におさめて。出要をあきらむること。諸宗のならひ勿論なり。いまの眞宗においては。もはら自力をすてゝ。他力に歸するをもて。宗の極致とするうへに。三業のなかには。口業をもて他力のむねをのふるとき。意業の憶念。歸命の一念おこれは。身業禮拜のために。渇仰のあまり。瞻仰のために。繪像木像の本尊を。あるひは彫刻し。あるひは畫圖す。しかのみならす。佛法示誨の恩德を

ろきおもひたまふところなり。いかに行者の名字をしるしつけたりといふとも。願力不思議の佛智をさつくる善知識の實語を領解せずんは往生不可なり。たとひ名字をしるさすといふとも。宿善開發の機として。他力往生の師說領納せは。平生をいはず。臨終を論せず。定聚のくらゐに住し。滅度にいたるへき條。經釋分明なり。このうへになにゝよりてか經釋をはなれて。自由の妄說をさきとして。わたくしの自義を骨張せんや。おほよそ。本願寺の聖人。御門弟のうちにおいて。二十餘輩の流々の學者達。祖師の御口傳にあらさるところを禁制し。自由の妄義を停廢あるへきものをや。「なかんつくに。かの名帳と號する書において。序頭をかき。あまさへ意解をのふと云云。かの作者において。誰のともからそや。おほよそ」師傳にあらさる謬說をもて。祖師一流の說と

帳と號して。その人數をしるすをもて（又一本して）。往生淨土の指南とし。佛法傳持の支證とすといふことをは（一本無）。これおそらくは。祖師一流の魔障たるをや。ゆめ〳〵かの邪義をもて。法流の正義とすへからざるものなり。もし即得往生住不退轉等の經文をもて。平生業成の他力の心行獲得の時剋をきゝたかへて名帳勘錄の時分にあたりて。往生淨土の正業治定するなんと。はしきゝあやまれるにやあらん。たゝ別の要ありて人數をしるさはそのかぎりあり。しからすして。念佛修行する行者の名字をしるさんからに。このとき往生淨土のくらゐに治定すへけんや。この條號するところ。黑谷本願寺兩師御相承の一流なりと云云。展轉の說なれは。もしひとのきゝあやまれるをや。殆（一本ほと）信用するにたらずといへとも。こと實ならは付佛法の外道歟。祖師の御惡名といひつへし。もともおと

改邪鈔　本

一本本末をみたす

一今案の自義をもて。名帳と稱して。祖師の一流をみたる事。

曾祖師黒谷の聖人の御製作選擇集にのへらるゝかごとく。大小乘の顯密の諸宗に。おの〳〵師資相承の血脈あるかことく。いままた淨土の一宗において。おなしく師資相承の血脈あるへしと云云。しかれは血脈をたつる肝要は。往生淨土の他力の心行を獲得する時節を治定せしめて。かつは師資の禮をしらしめ。かつは佛恩を報盡せんかためなり。かの心行を獲得せんこと。念佛往生の願成就の信心歡喜。乃至一念等の文をもて依憑とす。このほかいまたきかす。曾祖師(源空)。祖師(親鸞)。兩師御相傳の當敎において。名

改邪鈔

又一本
元弘第二暦壬申太簇下旬之候終淸書之微功訖凡於此書者去年仲冬於本願寺聖人御佛事中七箇日御法談御口決之肝要蒙免許以予禿筆令記之重染淸寫之右毫目悲喜交流感淚亘押者也

釋乘專

又一本
庚永貳歲癸未臘月仲旬第二之天終漸寫之功訖

執筆隱倫乘專

又一本上中下各卷終
庚永貳歲癸未仲冬中旬第二日以最初正本加書寫校合訖任奧書之旨可愼外人之披閱恐爲不令謗法之輩墮於泥梨也而已

執筆隱倫乘專

固本下卷終
此三帖鈔者於當流之安心者無雙之祕書也但於初心始學之族者更以不可許一見穴賢穴賢

時也康暦二載庚申六月廿五日記之

沙門綽如

時也文正貳歲二月十六日

釋蓮如 在御判

元(本云一本)弘第一之歷辛未仲冬下旬之候相當祖師聖人(本願寺親鸞)報恩謝德之七日七夜勤行中談話先師上人(釋如信)面授口決之專心專修別發願之次所奉傳持之祖師聖人之御己證所奉相承之他力眞宗之肝要以予口筆令記之是往生淨土之劵契濁世末代之目足也、故(又一本是)廣爲濕後昆遠利衆類也雖然於此書者守機可許之無左右不可令披閱者也非宿善開發之器者癡鈍之輩。(又一本定)翻誹謗之脣歟然者恐可令沈沒生死海之故也深納箱底輙莫出閫而已

釋宗昭

于時永亨第十天大呂仲旬第三日至午時奉書寫訖依而江州長澤福田寺之內琮俊坊爲所望之間不顧惡筆所令予書寫之也云云

右筆蓮如廿三歲判

なれは。過去の業因身にそなへたらは。あに自力の往生を障碍せさらんや。されは多念の功をもて。臨終を期し。來迎をたのむ。自力往生のくはたてには。加様の不可の難ともおほきなり。されは紀典のことはにも。千里は足のしたよりをこり。高山は微塵にはしまるといへり。一念は多念のはしめたり。多念は一念のつもりたり。ともにもてあひはなれすといへとも。おもてとしうらとなるところを。ひとみなまきらかすもの歟。いまのこゝろは。一念無上の佛智をもて。凡夫往生の極促とし。一形憶念の名願をもて。佛恩報盡の經營とすへしと。つたふるものなり。

口傳鈔 下

又一本

右此口傳鈔三帖者當流之肝要祕藏書也雖然河内國澁河郡久寶寺法圓依所望予初一丁之分染筆訖外見旁可有斟酌者而已

おほきに不定なり。されは第十九の願文にも。現其人前者のうへに。假令不與とらをかれたり。假令の二字をは。たとひとよむへきなり。たとひといふはあらましなり。非本願たる諸行を修して。往生を悕求する行人をも。佛の大慈大悲御覽しはなたすして。修諸功德のなかの稱名をよんところとして。現しつへくはそのひとのまへに現せんとなり。不定のあひた。假令の二字ををかる。もしさもありぬへくはといへるこゝろなり。まつ不定の失のなかに。大段自力のくはたて。本願にそむき佛智に違すへし。自力のくはたてといふは。われとはからふところをきらふなり。つきにはまたさきにいふところの。あまたの業因身にそなへんとかたかるへからす。他力の佛智をこそ。諸邪業繫。無能礙者とみえたれは。さまたくるものなけれ。われとはからふ往生をは。凡夫自力の迷心

り。これらの文證みな無常の根機を本とするゆへに。一念をもて往生治定の時剋とさためて。いのちのふれは自然と多念にをよふ道理をあかせり。されは平生のとき。一念往生治定のうへの佛恩報謝の多念の稱名とならふところ。文證道理顯然なり。もし多念をもて本願としたまはゝ。多念のきはまりいつれのときとさたむへきそや。いのちをはるときなるへくんは。凡夫に死の縁まちまちなり。火にやけても死し。水になかれても死し。乃至刀劍（かたなつるき又一本）にあたりても死し。ねふりのうちにも死せん。これみな先業の所感。さらにのかるへからす。しかるにもしかゝる業ありてをはらん機。多念のをはりそと期するところ。たちろかすして。そのときかさねて十念を成し。來迎引接にあつからんこと。機としてたとひかねて。あらますといふとも。願としてかならす迎接（らいかう又一本）あらんこと。

ほとは念佛すへし。これすなはち上盡一形の釋にかなへり。しかるに世のひとつねにおもへらく。上盡一形の多念も。宗の本意とおもひて。それにかなはさらん機のすてかてらの一念とこゝろうる歟。これすてに彌陀の本願に違し。釋尊の言說にそむけり。そのゆへは。如來の大悲短命の根機を本としたまへり。もし多念をもて本願とせは。いのち一刹那につゝまる。無常迅速の機。いかてか本願に乘すへきや。されは眞宗の肝要。一念往生をもて淵源とす。そのゆへは願成就の文には。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。願生彼國。即得往生。住不退轉とときおなしき經の流通には。其有得聞。彼佛名號。歡喜踊躍。乃至一念。當知此人。爲得大利。即是具足。無上功德とも彌勒に付屬したまへり。しかのみならす。光明寺の御釋には。爾時聞一念。皆當得生彼とらみえた

るものなれは。もとよりそのうつはものにあらす。もし改悔せはむまるへきものなり。しかれは謗法闡提廻心皆往と釋せらるゝこのゆへなり。

一念にてたりぬとしりて。多念をはけむへしといふ事。

このこと多念も一念も。ともに本願の文なり。いはゆる上盡一形下至一念とて釋せらるゝこれその文なり。しかれとも下至一念は。本願をたもつ往生決定の時剋なり。上盡一形は。往生即得のうへの佛恩報謝のつとめなり。そのこゝろ經釋顯然なるを。一念も多念も。ともに往生のための正因たるやうに。こゝろえみたす條。すこふる經釋に違せるもの歟。されはいくたひも先達よりうけたまはりつたへしかことくに。他力の信をは一念に即得往生ととりさためて。そのときいのちをはらさらん機は。いのちあらん

佛法の本意にあらす。しかれとも。悪業の凡夫。過去の業因にひかれて。これらの重罪ををかす。これとゞめかたく。伏しかたし。また小罪なりともをかすへからすといへは。凡夫こゝろにまかせてつみをはとゞめえつへしときこゆ。しかれとも。もとより罪體の凡夫大小を論せす。三業みなつみにあらすといふことなし。しかるに小罪もをかすへからすといへは。あやまてもをかさは。往生すへからさるなりと落居する歟。この條もとも思擇(おもひとるへし又一本)すへし。これもし抑止門のこゝろ歟。抑止(おさへとゞむる又一本)は釋尊の方便なり。眞宗の落居は彌陀の本願にきはまる。しかれは小罪も大罪も。つみの沙汰をしたく(た一本)はとゞめてこそその詮はあれ。とゞめえつへくもなき凡慮をもちなから。かくのことくいへは。彌陀の本願に歸託する機いかてかあらん。謗法罪は。また佛法を信することろのなきよりをこ

として。善凡夫をかたはらにかねたり。かるかゆへに。傍機たる善凡夫。なを往生せは。もはら正機たる悪凡夫。いかてか往生せさらん。しかれは善人なをもて往生す。いかにいはんや悪人をやといふへしと。おほせことありき。

一つみは五逆謗法。むまるとしりて。しかも小罪もつくるへからすといふ事。

おなしき聖人のおほせとて。先師信上人のおほせにいはく。世のひとつねにおもへらく。小罪なりともつみをそれおもひて。とゝめはやとおもはゝ。こゝろにまかせてとゝめられ。善根は修し行せんとおもはゝ。たくはへられて。これをもて大益をもえ。出離の方法ともなりぬへしと。この條眞宗の肝要にそむき。先哲の口授に違せり。まつ逆罪等をつくること。またく諸宗のをきて。

あらさる事。

本願寺の聖人。黒谷の先徳より御相承とて。如信上人おほせられていはく。世のひとつねにおもへらく。惡人なをもて。往生す。いはんや善人をやと。このこととをくは彌陀の本願にそむき。ちかくは釋尊出世の金言に違せり。そのゆへは。五劫思惟の劬勞。六度萬行の堪忍。しかしなから凡夫出要のためなり。またく聖人のためにあらす。しかれは凡夫本願に乘して。報土に往生すへき正機なり。凡夫もし往生かたかるへくは。願虚設なるへし。力徒然なるへし。しかるに力願あひ加して。十方衆生のために大饒益を成す。これによりて正覺をとなへていまに十劫なり。これを證する恒沙の諸佛の證誠。あに無虚妄の説にあらすや。しかれは御釋にも。一切善惡凡夫得生者とらのたまへり。これも惡凡夫を本

切なり。まつ生死界のすみはつへからさることはりをのへて。つきに安養界の常住なるありさまをときて。うれへなけくはかりにて。うれへなけかぬ淨土をねかはすんは。未來もまたかゝる悲歎にあふへし。しかし唯聞愁歎聲の六道をわかれて。入彼涅槃城の彌陀の淨土にまうてんにはとこしらへおもむけは。闇冥の悲歎やうやくにはれて。攝取の光益になとか歸せさらん。つきにかゝるやからには。かなしみにかなしみをそふるやうには。ゆめ／＼とふらふへからす。もししからは。とふらひたるにはあらて。いよ／＼わひしめたるにてあるへし。酒はこれ忘憂の名あり。これをすゝめてわらふほとに。なくさめてさるへし。さてこそとふらひたるにてあれと。おほせありき。しるへし。

一如來の本願は。もと凡夫のためにして。聖人のために

無間の業因を。をもしとしましまさゝれは。まして愛別離苦にたへさる悲歎にさへらるへからす。淨土往生の信心。成就したらんにつけても。このたひか輪廻生死のはてなれは。なけきも。かなしみも。もともふかゝるへきについて。あとまくらにならひゐて。悲歎嗚咽し。ひたりみきに群集して。戀慕涕泣すとも。さらにそれによるへからす。さなからんこそ凡夫けもなくて。殆と他力往生の機には不相應なるかやともきらはれつへけれ。されはみたからん境界をも。はゝかるへからす。なけきかなしまんをもいさむへかちすと。云云。

一別離等の苦にあふて。悲歎せんやからをは。佛法のくすりをすゝめてそのおもひを教誘すへき事。

人間の八苦のなかに。さきにいふところの愛別離苦。これもとも

しかたきによりて。これをはなるゝことあるへからされは。なか〱をろかにつたなけなる煩惱成就の凡夫にて。たゝありにかさるところなきすかたにてはんへらんこそ。浄土眞宗の本願の正機たるへけれと。まさしくおほせありき。されはつねのひとは。妻子眷屬の愛執ふかきをは。臨終のきはにはちかつけし。みせしと。ひきさくるならひなり。それといふは。著相にひかれて。惡道に墮せしめさらんかためなり。この條。自力聖道のつねのこゝろなり。他力の眞宗にはこの義あるへからす。そのゆへは。いかに境界を絶離すといふとも。たもつところの他力の佛法なくは。なにをもてか生死を出離せん。たとひ妄愛の迷心。深重なりといふとも。もとよりかゝる機をむねと攝持せんといてたちて。これかためにまうけられたる本願なるによりて。至極大罪の五逆謗法等の

かひなしと期すとも。おくれさきたつ一旦のかなしみ。まとへる凡夫として。なんそこれなからん。なかんつく。曠劫流轉の世々生々の芳契。今生をもて輪轉の結句とし。愛執愛著のかりのやと。この人界の火宅出離の舊里たるへきあひた。依正二報ともにいかてかなこりおしからさらん。これをおもはすんは。凡衆の攝にあらさるへし。けなけならんこそ。あやまて自力聖道の機たる歟。いまの淨土他力の機にあらさる歟ともうたかひつへけれ。おろかにつたなけにして。なけきかなしまんこと。他力往生の機に相應たるへし。うちまかせて。凡夫のありさまにかはりめあるへからす。往生の一大事をは。如來にまかせたてまつり。今生の身のふるまひ。こゝろのむけやう。くちにいふこと。貪瞋癡の三毒を根として。殺生等の十惡。穢身のあらんほとは。たちかたく伏

條文にありて顯然（—けん一本無）なり。これによりて。かの御弟子最後のきざに。御相承の眼目（—かん—はく又一本）。相違なきについて。御感涙をなかさるゝものなり。しるへし。

一凡夫として毎事勇猛（ことごとにいさみたけき又一本）のふるまひみな虚假たる事。

愛別離苦にあふて。父母妻子の別離（わかれはなるゝ又一本）をかなしむとき。佛法をたもち念佛する機。いふ甲斐なくなけきかなしむことしかるへからすとて。かれをはちしめいさむること。多分先達めきたるともから。みなかくのことし。この條。聖道の諸宗を行學する機のおもひならはしにて。淨土眞宗の機敎をしらさるものなり。まつ凡夫はことにをいてつたなくをろかなり。その奸詐（かたましくいつはる一本無）なる性の實（まこと又一本）なるをうつみて。賢善（かしこきよき一本無）なるよしをもてなすは。みな不實虚假なり。たとひ未來の生處（むまれところ又一本）を彌陀の報土とおもひさため。ともに淨土の再會（ふたゝひあはんこと又一本）をうた

たとひ本願の正機たりといふとも。これらの失。難治不可得なり。いはんやもとより自力の稱名は。臨終の所期おもひのごとくならん定。邊地の往生なり。いかにいはんや。過去の業縁のかれかたきによりて。これらの障難にあはん機。涯分の所存も達せんことかたきかなかにかたし。そのうへ。また懈慢邊地の往生たにもかなふへからす。これみな本願にそむくかゆへなり。こゝをもて御釋(淨土文類聚鈔)にのたまはく。憶念彌陀佛本願。自然即時入必定。唯能常稱如來號。應報大悲弘誓恩とみえたり。たゝよく如來のみなを稱して。大悲弘誓の恩をむくひたてまつるへしと。平生に善知識のをしへをうけて。信心開發するきさみ。正定聚のくらゐに住すとたのみなん機は。ふたゝひ臨終の時分に往益をまつへきにあらす。そののちの稱名は。佛恩報謝の他力催促の大行たるへき

はしめて蓮臺〔已下七行又一本に上て加〕にあなうらをむすはんと期するともから。前世の業因しりかたけれは。いかなる死の縁かあらん。火にやけ。みつにおほれ。刀劍〔かたなつるき一本無〕にあたり。乃至寢死まてもみなこれ過去の宿因にあらすといふことなし。もしかくのことくの死の縁、身にそなへたらは。さらにのかるゝことあるへからす。もし怨敵〔あたかたき〕のために害せられは。その一刹那に凡夫としておもふところ。怨結〔あたをむすふこゝろ一本〕のほかなんそ他念あらん。また寢死にをいては。本心いきのたゆるきはをしらさるうへは。臨終を期する先途。すてにむなしくなりぬへし。いかんしてか念佛せん。またさきの殺害の機。怨念〔あたのおもひ一本〕のほか他あるへからすさる〔一本無〕うへは。念佛するにいとまあるへからす。終焉を期する前途。またこれもむなし。假令〔たとひ一本〕かくのこときらの死の縁にあはん機。日ころの所存に違せは〔たかはゝ一本〕。往生すへからすとみなおもへり。

入御ありて。危急の體を御覽せらるゝところに。呼吸のいきあらくして。すでにたへなんとするに。稱名をこたらす。ひまなし。そのとき聖人たつねおほせられてのたまはく。そのくるしけさに。念佛強盛の條まつ神妙たり。たゞし所存不審いかんと。覺信房こたへまふされていはく。よろこひすでにちかつけり。存せんこと一瞬にせまる。刹那のあひたたりといふとも。いきのかよはんほとは。往生の大益をえたる佛恩を報謝せすんはあるへからすと存するについて。かくのことく報謝のために稱名つかまつるものなりと云云。このとき聖人(親鸞)年來常隨給仕のあひたの提撕。そのしるしありけりと御感のあまり。隨喜の御落涙千行萬行なり。しかれはわたくしにこれをもてこれを案するに。眞宗の肝要。安心の要須。これにあるもの歟。自力の稱名をはけんて。臨終のとき。

とする條文にありてみつべし。いまの三經をもて。末世造惡の凡機にときゝかせ。聖道の諸教をもては。その序分とする。光明寺の處々の御釋に歷然たり。こゝをもて諸佛出世の本意とし。衆生得脫の本源とする條あきらかなり。いかにいはんや。諸宗出世の本懷とゆるす法華にをいて。いまの淨土教は同味の教なり。法華の說時八箇年中に。王宮に五逆發現のあひた。このときにあたりて。靈鷲山の會座を沒して。王宮に降臨して。他力をとかれしゆへなり。これらみな。海德以來乃至釋迦一代の出世の元意。彌陀の一教をもて本とせらるゝ大都なり。

一信のうへの稱名の事。　又一本此條已下を下卷とす

聖人(親鸞)の御弟子に。高田の覺信房(太郎入道と號す)といふひとありき。重病をうけて。御坊中にして獲麟にのぞむとき。聖人(親鸞)

機法とゝのほらさるほと。しはらく在世の權機に對して。方便の教として。五時の教をときたまへりとしるへし。たとへは月まつほとの手すさみの風情なり。いはゆる三經の說時をいふに。大無量壽經は。法の眞實なるところをときあらはして。對機はみな權機なり。觀無量壽經の機の眞實なるところをあらはせり。これすなはち實機なり。いはゆる五障の女人。韋提をもて對機として。とをく末世の女人惡人にひとしむるなり。小阿彌陀經は。さきの機法の眞實をあらはす。二經を合說して。不可以少善根。福德因緣。得生彼國とらとける無上大利の名願を。一日七日の執持名號にむすひとゝめて。こゝを證誠する諸佛の實語を顯說せり。これによりて世尊說法時將了とら釋(光明寺)しまします。一代の說教。むしろをまきし肝要。いまの彌陀の名願をもて。付屬流通の本意

の彌陀をもて。報身如來の本體とさためて。これより應迹をたるヽ諸佛。通總の法報應等の三身はみな彌陀の化用たりといふことをしるへきものなり。しかれは報身といふ名言は。久遠實成の彌陀に屬して。常住法身の體たるへし。通總の三身は。かれよりひらきいたすところの淺近の機におもむくところの作用なり。されは聖道難行にたへさる機を。如來出世の本意にあらされとも。易行易修なるところをとりところとして。いまの淨土敎の念佛三昧をは。衆機にわたしてすヽむるそとみなひとおもへる歟。いまの黑谷の大勢至菩薩の化現の聖人より。代々血脈相承の正義にをいてはしかんはあらす。海德佛よりこのかた。釋尊までの說敎。出世の本意。久遠實成の彌陀のたちとより。法藏正覺の淨土敎のをこるをはしめとして。衆生濟度の方軌とさためて。この淨土の

より本師釋尊にいたるまで。番々出世の諸佛。彌陀の弘誓に乘して。自利々他したまへるむね顯然なり。覺運和尙の釋義。釋尊も久遠正覺の彌陀そとあらはさるゝうへは。いまの和尙の御釋にえあはすれは。最初海德以來の佛々も。みな久遠正覺の彌陀の化身たる條。道理文證必然なり。一字一言加減すへからす。ひとつ經法のことくすへしとのへまします。光明寺のいまの御釋はもはら佛經に準するうへは。自宗の正依經たるへし。傍依の經に。またあまたの證文(說一本)あり。楞伽經にのたまはく。十方諸刹土。衆生菩薩中。所有法報身。化身及變化。皆從無量壽。極樂界中出文ととけり。また般舟經にのたまはく。三世諸佛。念彌陀三昧。成等正覺ともとけり。諸佛自利利他の願行。彌陀をもてあるし(主又一本)として。分身遣化の利生方便をめくらすこと。「いちしるし」(掲焉一本)これによりて久遠實成

と。非本願諸行往生の機の體失往生と。殿最懸隔にあらすや。いつれも文釋ことはにさきたちて歴然なり。

口傳鈔 中 又一本

口傳鈔（下）

一眞宗所立の報身如來。諸宗通途の三身を開出する事。

彌陀如來を報身如來とさたむること。自他宗をいはす古來の義勢ことふりんたり。されは荊溪は。諸教所讃多在彌陀とものへ。檀那院の覺運和尙は。また久遠實成彌陀佛。永異諸經之所説と釋せらる。しかのみならす。わか朝の先哲は。しはらくさしをく。宗師(異朝の善導大師)の御釋にのたまはく。上從海德初最如來。乃至今時釋迦諸佛。皆乘弘誓悲智雙行とら釋せらる。しかれは海德佛

解する條。宿善の厚薄によるなり。念佛往生は佛の本願なり。諸行往生は本願にあらす。念佛往生には臨終の善惡を沙汰せす。至心信樂の。歸命の一心。他力よりさたまるとき。即得往生住不退轉の道理を。善智識にあふて聞持する平生のきさみに。治定するあひた。この穢體亡失せすといへとも。業事成辦すれは。體失せすして往生すといはるゝ歟。本願の文あきらかなり。かれをみるへしつきに諸行往生の機は。臨終を期し。來迎をまちえすしては。胎生邊地までもむまるへからす。このゆへにこの穢體亡失するときならては。その期するところなきによりて。そのむねをのふる歟。第十九の願にみえたり。勝劣の一段にをいては。念佛往生は本願なるについて。あまねく十方衆生にわたる。諸行往生は非本願なるによりて。定散の機にかきる。本願念佛の機の不體失往生

云く。この相論なり。こゝに同朋のなかに。勝劣を分別せんかために。あまた大師聖人(源空)の御前に參してまふされていはく。善信御房と。善惠御房と法門諍論のことはんへりとて。かみくたんのおもむきを一々にのへまふさるゝところに。大師聖人(源空)のおほせにのたまはく。善信房の體失せすして往生すとたてらるゝ條は。やかてさそと御證判あり。善信房の體失してこそ往生すれとたてらるゝも。またやかてさそとおほせあり。これによりて兩方の是非わきまへかたきあひた。そのむねを衆中よりかさねてたつねまふすところに。おほせにのたまはく。善惠房の體失して往生するよしのふるは。諸行往生の機なれはなり。善信房の體失せすして往生するよしまふさるゝは。念佛往生の機なれはなり。如來敎法元無二なれとも。正爲衆生機不同なれは。わか根機にまかせて領

なり。五濁惡時惡世界のなかにして。決定してすなはち無上覺をえしめたるなりといへり。蓮位ことに皇太子を恭敬し尊重し。たてまつるとをほえて。ゆめさめてすなはちこの文をかきをはりぬ。

わたくしにいはく。この夢想の記をひらくに。祖師聖人あるひは觀音の垂迹とあらはれ。あるひは本師彌陀の來現としめしますことあきらかなり。彌陀觀音一體異名ともに相違あるへからす。しかれはかの御相承。その述義を口決の末流。他にことなるへき條。傍若無人といひつへし。しるへし。

一體失不體失の往生の事。

聖人親鸞のたまはく。先師聖人(源空)の御とき。はかりなき法門諍論のことありき。善信は。念佛往生の機は體失せすして往生をとくといふ。小坂の善惠房(證空)は。體失してこそ往生はとくれと云

文を和國に弘興しまします。親鸞聖人觀世音菩薩の垂迹として。ともにおなしく無碍光如來の智炬を。本朝にかゝやかさんために。師弟となりて口决相承しましますことあきらかなり。あふくへし。たうとむへし。

一蓮位房（聖人常隨の御門弟眞宗稽古の學者俗姓源三位賴政卿の順孫）の夢想の記。

建長八歲(丙辰)二月九日の夜寅時。釋蓮位夢に聖德太子の勅命をかうふる。皇太子の尊容を示現して。釋の親鸞法師にむかはしめまし〳〵て。文を頌して親鸞聖人を敬禮しまします。その告命の文にのたまはく敬禮大慈阿彌陀佛。爲妙敎流通來生者。五濁惡時惡世界中。決定即得無上覺也といへり」。この文のこゝろは。大慈阿彌陀佛を敬禮したてまつるなり。妙敎流通のために來生せるもの

り。大勢至菩薩は智慧をつかさとりまします菩薩なり。すなはち智慧は光明とあらはるゝによりて。ひかりはかりにてその形體はましまささるなり。先師源空聖人。勢至菩薩の化身にましますといふこと。世もてひとのくちにありとおほせことありき。鸞聖人の御本地の樣は。御ぬしにまふさんこと。わか身としてははゝかりあれは。まふしいたすにをよはす。かの夢想ののちは心中に渇仰のおもひふかくして。年月をおくるはかりなり。すてに御歸京ありて御入滅のよしうけたまはるについて。わかち、はかゝる權者にてましまし〳〵けると。しりたてまつられんかために。しるしまふすなりとて。越後國國府より。とゝめをきまふさるゝ惠信の御房の御文。弘長三年春ころ。御むすめ覺信の御房へ進せらる。わたくしにいはく。源空聖人勢至菩薩の化現として。本師彌陀の敎

堂供養するとおほしきところあり。試樂ゆゝしく嚴重にとりをこなへるみきりなり。こゝに虚空に神社の鳥居のやうなるすかたにて。木をよこたへたり。それに繪像の本尊二鋪かゝりたり。一鋪は形體ましまさす。たゝ金色の光明のみなり。いま一鋪はたゝしくその尊形あらはれまします。その形體ましまさゝる本尊を。ひとありて。またひとに。あれはなに佛にてましますそやと問。ひとこたへていはく。これこそ大勢至菩薩にてましませ。すなはち源空聖人の御ことなりと云云。また問ていはく。いま一鋪の尊形あらはれたまふを。あれはまたなに佛そやと。ひとこたへていはく。あれは大悲觀世音菩薩にてましますなり。あれこそ善信の御房にてわたらせたまへとまふすと。おほゑてゆめさめをはんぬと云云。このことを聖人にかたりまふさるゝところに。そのことな

らす。おなしくは千部よまはやとおもひて。これをはしむるところに〔一本無〕またおもふやう。自信敎人信。難中轉更難とみえたれは。みつからも信し。ひとををしへても信せしむるほかは。なにのつとめかあらんに。この三部經の部數をつむこと。われなから。〔又一本〕こゝろえられすとおもひなりて。このことをよく〳〵案しさためん料に。そのあひたはひきかつきてふしぬ。つねのやまひにあらさるほとに。いまはさてあらんといひつるなりとおほせことありき。わたくしにいはく。つら〳〵このことを案するに。ひとの夢想のつけのことく。觀音の垂迹として。一向專念の一義を御弘通あること掲焉なり。

一 聖人本地觀音の事。

下野國さぬきといふところにて。惠信の御房の御夢想にいはく。

しに。浄土眞宗にをいて。(この一義相傳なしといへとも。この)料簡もとも同すへしと云云。

一助業をなをかたはらにしまします事。

鸞聖人東國に御經廻のとき。御風氣とて三日三夜ひきかつきて。水漿不通しましますことありき。つねのときのことく。御腰膝をうたせらるゝこともなし。御煎物なといふこともなし。御看病のひとをちかくよせらるゝこともなし。三箇日とまふすとき。噫いまはさてあらんとおほせことありて。御起居御平復もとのことし。そのとき惠信の御房(男女六人の君達の御母儀)たつねまふされていはく。御風氣とて兩三日御寢のところに。いまはさてあらんとおほせことあることなにことそやと。聖人しめしまし〳〵てのたまはく。われこの三箇年のあひた。浄土の三部經をよむことをこた

せり。器世間を建立するとき。この字をもちゐる條分明なり。世親菩薩の所造もともゆへあるへきをや勿論なり。しかるにわか眞宗にいたりては。善導和尚の御こゝろによるに。すてに報身報土の廢立をもて規模とす。しかれは觀彼世界相勝過三界道の論文をもておもふに。三界の道に勝過せる報土にして。正覺を成する彌陀如來のことをいふとき。世間淺近の事にもちゐるならひたる世の字をもて。いかてか義を成せらるへきをや。(一本無)この道理によりて。いまの一字を略せらるゝかとみえたり。されは彼佛今現在成佛とつゝけて。これを訓するに。かの佛いま現在して成佛したまへりと訓すれは。はるかにきゝよきなり。義理といひ文點といひ。この一字もともあまれる歟。この道義をもて。兩祖の御相傳を推驗して。八宗兼學の了然聖人に。(ことに三論宗)いまの料簡を談話せ

しかるに黒谷本願寺兩師ともに。この世の字を略してひかれたり。わたくしにそのゆへを案するに。略せらるゝ條もともそのゆへある歟。まつ大乘同性經にいはく。淨土中成佛。悉是報身。穢土中成佛。悉是化身(一といへり又一本)といへり)。この文を依憑として。大師報身報土の義を成せらるゝに。この世の字ををきてはすこぶる義理淺近なる(又一本無)へしとおほしめさるゝ歟。そのゆへは。淨土中成佛の彌陀如來に(あさくちかし一本)つきて。いま世にましますと(じて一本)この文を訓せは。いますこし義理いはれさる歟。極樂世界とも釋せらるゝうへは。世の字いかてか報身報土の義に。のくへきとおほゆる篇もあれとも。されはそれも自宗にをいて。淺近(あさくちかき又一本)のかたを釋せらるゝときの。一往の義なり。おほよす諸宗にをいて。おほくはこの字を淺近(あさきちかき又一本)のときもちゐつけたり。まつ倶舍論の性相(世間品)に。安立器世間。風輪最居下とら判

なり。これによりて檀越をのぞむこと所詮利養のためなり。このみつのもとゝりをそりすてすは。法師とはいひかたし。よてさまふしつるなりと云云。そのとき聖光房改悔のいろをあらはして。負のそこより。おさむるところの抄物ともをとりいてゝ。みなやきすてゝまたいとまをまふしていてぬ。しかれともその餘殘ありけるにや。つゐにおほせをさしをきて。口傳にそむきたる諸行往生の自義を骨張して。自障障他すること。祖師の遺訓をわすれ。諸天の冥慮をはゝからさるにやとおほゆ。かなしむへし。をそるへし。しかれはかの聖光房は最初に鸞聖人の御引導によりて。黒谷の門下にのそめるひとなり。末學これをしるへし。

一十八の願につきたる御釋の事。

彼佛今現在成佛等。この御釋に。世流布の本には。在世とあり。

西下向つかまつるへし。いとまたまはるへしとまふす。すなはち御前をまかりたちて出門す。聖人のたまはく。あたら修行者か。もとゝりをきらでゆくはとよと。その御こゝろはるかにみゝにいりけるにや。たちかへりてまふしていはく。聖光は出家得度してとしひさし。しかるにもとゝりをきらぬよしおほせをかうふる。もとも不審。このおほせ耳にとまるによりて。みちをゆくにあたはす。ことの次第をうけたまはりわきまへんかためにかへりまいれりと云云。そのとき聖人のたまはく。法師にはみつのもとゝりあり。いはゆる勝他。利養。名聞これなり。この三箇年のあひた。源空かのふるところの法門を。しるしあつめて随身す。本國にくたりて人を（かろんししたかへん）とす。これ勝他にあらすや。それにつけてよき學生といはれんとおもふ。これ名聞をねかふところ

と。そのとき修行者ふところより。つま硯をとりいたして。二字をかきてさゝく。鎮西の聖光房これなり。この聖光ひしり。鎮西にしておもへらく。みやこに世もて智慧第一と稱する聖人おはすなり。なにことかははんへるへき。われすみやかに上洛して。かの聖人と問答すへし。そのときもし智慧すくれて。われにかさまは。われまさに弟子となるへし。また問答にかたは。かれを弟子とすへしと。しかるにこの慢心を空聖人權者として。御覧せられけれは。いまのことくに御問答ありけるにや。かのひしり。わか弟子とすへきこと。橋をたてゝもをよひかたかりけりと。慢幢たちまちにくたけけれは。師資の禮をなして。たちところに二字をさゝけけり。兩三年ののち。あるときかこ負かきおひて。聖光房聖人の御前へまいりて。本國戀慕のこゝろさしあるによりて。鎮

聖人。こなたへ招請あるへしとおほせありて、よりて鸞聖人。かの修行者を御引導ありて御前へめさる。そのとき空聖人。はたとかの修行者をにらみましますに。修行者また聖人をにらみかへしたてまつる。かくてやゝひさしくたかひに言説なし。しはらくありて。空聖人おほせられてのたまはく。御坊はいつくのひとそ。またなにの用ありてきたれるそやと。修行者まふしていはく。われはこれ鎮西のものなり。求法のために華洛にのほる。よて推参つかまつるものなりと。そのとき聖人。求法とはいつれの法をもとむるそやと。修行者まふしていはく。念佛の法をもとむと。聖人のたまはく。念佛は唐土の念佛か日本の念佛かと。修行者しはらく停滞す。しかれともきと案して。唐土の念佛をもとむるなりと云云。聖人のたまはく。さては善導和尚の御弟子にこそあるなれ

れこそたゝいまかの御坊へ参する身にてはんへれ。いかん。修行者まふしていはく。そのことにさふらふ。源空聖人の御ことをたつねまふすなりと。鸞聖人のたまはく。さらは先達すへし。この車にのらるへしと。修行者をほきに辭しまふして。そのをそれあり。かなふへからすと云云。鸞聖人のたまはく。求法のためならは。あなかちに隔心あるへからす。釋門のむつひ。なにかくるしかるへき。たゝのらるへしと。再三辭退まふすといへとも。御とものものに修行者かくるところのかご負をかくへしと。御下知ありて御車にひきのせらる。しかうしてかの御坊に御参ありて。空聖人の御前にて。鸞聖人。鎮西のものとまふして。修行者一人求法のためとて。御坊をたつねまふしてはんへりつるを。路次よりあひともなひてまいりてさふらふ。めさるへきをやと云云。空

かつは無慚無愧のはなはたしきににたり。しかれとも。所存かくのことしと云〻。このとき開壽との。幼少の身として感氣おもてにあらはれ。隨喜もともふかし。一天四海をおさむへき棟梁。その器用はをさなきよりやうあるものなりとをほせことありき。

口傳鈔　上

口傳鈔《中》

一あるとき鸞聖人。黒谷の聖人の禪房へ御參ありけるに。修行者一人。御とものの下部に案内していはく。京中に八宗兼學の名譽まします智慧第一の聖人の貴坊やしらせたまへるといふ。この樣を御とものの下部御車のうちへまふす。鸞聖人のたまはく。智慧第一の聖人の御房とたつぬるは。もし源空聖人の御こと歟。しからはわ

れこそたゝいまかの御坊へ参する身にてはんへれ。いかん。修行者まふしていはく。そのことにさふらふ。源空聖人の御ことをたつねまふすなりと。鸞聖人のたまはく。さらは先達すへし。この車にのらるへしと。修行者をほきに辞しまふして。そのをそれあり。かなふへからすと云云。鸞聖人のたまはく。求法のためならは。あなかちに隔心あるへからす。釋門のむつひ。なにかくるしかるへき。たゝのらるへしと。再三辞退まふすといへとも。御とものものに修行者かくるところのかご負をかくへしと。御下知ありて御車にひきのせらる。しかうしてかの御坊に御参ありて。空聖人の御前にて。鸞聖人。鎮西のものとまふして。修行者一人求法のためとて。御坊をたつねまふしてはんへりつるを。路次よりあひともなひてまいりてさふらふ。めさるへきをやと云云。空

かつは無慚無愧のはなはたしきににたり。しかれとも。所存かくのことしと云云。このとき開壽との。幼少の身として感氣おもてにあらはれ。随喜もともふかし。一天四海をおさむへき棟梁。その器用はをさなきよりやうあるものなりとをほせことありき。

口傳鈔　上

口傳鈔《中》

一あるとき鸞聖人。黒谷の聖人の禪房へ御參ありけるに。修行者一人。御ともの下部に案内していはく。京中に八宗兼學の名譽まします智慧第一の聖人の貴坊やしらせたまへるといふ。この樣を御ともの下部御車のうちへまふす。鸞聖人のたまはく。智慧第一の聖人の御房とたつぬるは。もし源空聖人の御こと歟。しからはわ

味を貪すること。はなはたしかるへからさることなり。されは如來の制誡にも。このことことにさかんなり。しかれとも末法濁世の今時の衆生。無戒のときなれは。たもつものもなし。破するものもなし。これによりて剃髪染衣のそのすかた。たゝ世俗の群類にこゝろをなしきかゆへに。これらを食すとても。食するほとならは。かの生類をして解脱せしむるやうにこそありたくさふらへ。しかるにわれ名字を釋氏にかるといへとも。こゝろ俗塵にそみて。智もなく德もなし。なにゝよりてかかの有情をすくふへきや。これによりて。袈裟はこれ三世の諸佛。解脱幢相の靈服なり。これを著用しなから。かれを食せは。袈裟の德用をもて。濟生利物の願念をやはたすと存して。これを著しなから。かれを食するものなり。冥衆の照覽をあふきて。人倫の所見をはゝからさること。

覺悟のあひた。ぬきてこれを食する歟。善信はかくのときの食物邂逅なれは。おほ。けていそきたへんとするにつきて。忘却してこれをぬかすと云々。開壽殿またまふされていはく。この御答御僞言なり。さためてふかき御所存ある歟。開壽幼稚なれはとて。御蔑如にこそとてのきぬ。またあるとき。さきのことくに袈裟を御著服ありなから御魚食あり。また開壽殿。さきのことくにたつねまふさる。聖人また御忘却とこたへまします。そのとき開壽殿。さのみ御廢忘あるへからず。これしかしなから。幼少の愚意深義をわきまへしるへからさるによりて。御所存をのへられさるものなり。まけてたゝ實義を述成あるへしと。再三こさかしくのそみまふされけり。そのとき聖人のかれかたくして。幼童に對してしめしまし／＼ていはく。まれに人身をうけて生命をほろほし。肉

りき。その最中。副將軍連々昵近したてまつるに。あるとき盃酌のみぎりにして。種々の珍物をとゝのへて。諸大名面々數獻の沙汰にをよふ。聖人別して勇猛精進の僧の威儀をたゝしくしましますことなけれは。たゝ世俗の入道俗人等におなしき御振舞なり。よて魚鳥の肉味等をきこしめさるゝこと御はゝかりなし。ときに鱠を御前に進す。これをきこしめさるゝことつねのことし。袈裟を御著用ありなからまいるとき。西明寺の禪門。ときに開壽殿とて九歲。さしよりて聖人の御耳に密談せられていはく。あの入道とも面々魚食のときは。袈裟をぬきてこれを食す。善信御房。いかなれは袈裟を御著用ありなから食しましますそや。これ不審と云云。聖人おほせられていはく。あの入道達は。つねにこれをもちゐるについて。これを食するときは。袈裟をぬくへきことゝ

れはすなはち。五劫の思惟も兆載の修行も。たゝ親鸞一人かためなりとおほせことありき。わたくしにいはく。これをもてかれを案するに。この條祖師聖人の御ことにかきるへからす。末世のわれら。みな凡夫たらんうへは。またもて往生おなしかるへしとしるへし。

一　一切經御校合の事。

西明寺の禪門の「父修理亮時氏」（祖父武藏守泰時世をとりて又一本）。政德をもはらにせしころ。一切經を書寫せられき。これを校合のために。智者學生たらん僧を屈請あるへしとて。武藤左衛門入道（不知實名）。ならひにやとやの入道（不知實名）。兩大名におほせつけてたつねあなくられけるとき。ことの縁ありて聖人をたつねいたしたてまつりき。（もし常陸の國笠間の郡稲田鄕に御經迴のころ歟）聖人その請に應しましまして（したかひたまふなり一本）。一切經御校合あ

にして聖人のためにあらすと云云。しかれは貪欲もふかく。瞋恚もたけく。愚癡もさかりならんにつけても。今度の順次の往生は。佛語に虚妄なけれは。いよ〱必定とおもふへし。あやまてわかこゝろの三毒もいたく興盛ならす。善心しきりにをこらは。往生不定のおもひもあるへし。そのゆへは。凡夫のための願と佛説分明なり。しかるにわかこゝろ凡夫けもなくは。さてはわれ凡夫にあらねは。この願にもれやせんとおもふへきによりてなり。しかるにわれらかこゝろ。すてに貪瞋癡の三毒みなおなしく具足す。これかためとてをこさるゝ願なれは。往生その機として必定なるへしとなり。かくこゝろえつれは。こゝろのわろきにつけても。機の卑劣（いやしくつたなきこゝろなり一本）なるにつけても。往生せすはあるへからさる道理文證勿論なり。いつかたよりか凡夫の往生もれてむなしからんや。しか

佛報土とさため。いるところの機をはさかりに凡夫と談す。このこと性相のみゝをおところかすことなゝ。されは。かの性相に封せられて。ひとのこゝろおほくまよひて。この義勢にをきてうたかひをいたく。そのうたかひのきさすところは。かならすしも彌陀超世の悲願をさることあらしと。うたかひたてまつるまてはなけれとも。わか身の分の卑下して。そのことはりをわきまへしりて。聖道門よりは。凡夫報土にいるへからさる道理をうかへて。その比量をもて。いまの眞宗をうたかふまでのひとはまれなれとも。聖道の性相世に流布するを。なにとなく耳にふれならひたるゆへ歟。おほくこれにふせかれて。眞宗別途の他力をうたかふこと。かつは無明に癡惑せられたるゆへなり。かつは明師にあはさるかいたすところなり。そのゆへは。淨土宗のこゝろ。もと凡夫のため

生利益の方便なれは。親鸞かむつひをすて。他の門室にいるといふとも。わたくしに自専すへからす。如來の教法は總して流通物なれはなり。しかるに親鸞か名字のりたるを。法師にくけれは袈裟さへの風情に。いとひおもふによりて。たとひかの聖教を。山野にすつといふとも。そのところの有情群類。かの聖教にすくはれて。こと／＼くその益をうへし。しからは衆生利益の本懷。そのとき滿足すへし。凡夫の執するところの財寶のことくに。とりかへすといふ義あるへからさるなり。よく／＼こゝろうへしとおほせありき。

一凡夫往生の事。

おほよそ凡夫の報土にいることをは。諸宗ゆるさゝるところなり。しかるに淨土眞宗にをいて。善導家の御こゝろ。安養淨土をは報

の儀をはなれて下國のうへは。あつけわたさるゝところの本尊聖敎を。めしかへさるへくやさふらふらんと。なかんつくに。釋親鸞と外題のしたにあそはされたる聖敎おほし。御門下をはなれたてまつるうへは。さためて仰崇の儀なからん歟と云〻。聖人のおほせにいはく。本尊聖敎をとりかへすこと。はなはたしかるへからさることなり。そのゆへは。親鸞は弟子一人ももたす。なにことをしへて弟子といふへきそや。みな如來の御弟子なれは。みなともに同行なり。念佛往生の信心をうることは。釋迦彌陀二尊の御方便として發起すとみえたれは。またく親鸞かさつけたるにあらす。當世たかひに違逆のとき。本尊聖敎をとりかへし。つくるところの房號をとりかへし。信心をとりかへすなんといふこと。國中に繁昌と云〻。かへす〳〵しかるへからす。本尊聖敎は。衆

益をもてたくはへらるゝ事。

たとひ萬行諸善の法財を修したくはふといふとも。進道の資糧となるへからす。ゆへは六賊知聞して侵奪するかゆへに。念佛にをいてはすてに行者の善にあらす。行者の行にあらすとて釋せらるれは。凡夫自力の善にあらす。また彌陀の佛智なるかゆへに。諸佛護念の益によりて。六賊これををかすにあたはさるかゆへに。出離の資糧となり。報土の正因となるなり。しるへし。

一弟子同行をあらそひ。本尊聖教をうはひとること。しかるへからさるよしの事。

常陸國新堤の信樂房。聖人親鸞の御前にて。法文の義理ゆへに。おほせをもちゐまふさゝるによりて。突鼻にあつかりて。本國に下向のきさみ。御弟子蓮位房まふされていはく。信樂房の御門弟

いはく。某にをいては千人まてはおもひよらす。一人たりといふとも殺害しつへきこゝちせすと云云。上人かさねてのたまはく。なんちわかをしへを日比そむかさるうへは。いまをしふるところにをいてさためてうたかひをなさゝる歟。しかるに一人なりとも殺害しつへきこゝちせすといふは。過去にそのたねなさによりてなり。もし過去にそのたねあらは。たとひ殺生罪ををかすへからす。をかさはすなはち往生をとくへからすといましむといふとも。たねにもよほされて。かならす殺罪をつくるへきなり。善悪のふたつ。宿因のはからひとして。現果を感するところなり。しかれはまたく往生にをいては。善もたすけとならす。悪もさはりとならすといふこと。これをもて準知すへし。

一自力の修善はたくはへかたく。他力の佛智は護念の

弘願者。如大經說。一切善惡。凡夫得生者。莫不皆乘。阿彌陀佛。大願業力。爲增上緣也とのたまへり。文のこゝろは。弘願といふは大經の說のことし。一切善惡凡夫のむまるゝことをうるは。みな阿彌陀佛の大願業力にのりて。增上緣とせさるはなしとなり。されは宿善あつきひとは。今生に善をこのみ。惡ををそる。宿惡をもきものは。今生に惡をこのみ。善にうとし。たゝ善惡のふたつをは。過去の因にまかせ。往生の大益をは。如來の他力にまかせて。かつて機のよきあしきに目をかけて。往生の得否をさたむへからすとなり。これによりてあるときのおほせにのたまはく。なんたち念佛するより。なを往生にたやすきみちあり。これをさつくへしと。ひとを千人殺害したらは。やすく往生すへし。をの[一本]〳〵このをし[一本下同]へにしたかへ。いかんと。ときにある一人まふして

に失し。自身の惡機たることをしらさるになる。おほよそ凡夫引接の無縁の慈悲をもて。修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ。五乘ひとしくいることは。諸佛いまたをこさゝる超世不思議の願なれは。たとひ讀誦大乘解第一義の善機たりといふとも。をのれか生得の善はかりをもて。その土に往生することかなふへからす。また惡業はもとよりもろ〱の佛法にすてらるゝところなれは。惡機また惡をつのりとして。その土へのそむへきにあらす。しかれは機にむまれつきたる善惡のふたつ。報土往生の得ともならす。失ともならさる條勿論なり。されはこの善惡の機のうへに。たもつところの彌陀の佛智をつのりとせんよりほかは。凡夫いかてか往生の得分あるへきや。されはこそ。惡もをそろしからすともいひ。善もほしからすとはいへ。こゝをもて光明寺の大師。言

らく。善根を具足せすんは。たとひ念佛すといふとも。往生すへからすと。またたとひ念佛すといふとも。惡業深重ならは。往生すへからすと。このおもひともにはなはたしかるへからす。もし惡業をこゝろにまかせてとゝめ。善根をおもひのまゝにそなへて。生死を出離し。淨土に往生すへくは。あなかちに本願を信知せすとも。なにの不足かあらん。そのことといつれもこゝろにまかせさるによりて。惡業をはをそれなからすなはちをこし。善根をはあらませともうることあたはさる凡夫なり。かゝるあさましき三毒具足の惡機として。われと出離にみちたえたる機を。攝取したまはんための五劫思惟の本願なるかゆへに。たゝあふきて佛智を信受するにしかす。しかるに善機の念佛するをは。決定往生とおもひ。惡人の念佛するをは往生不定とうたかふ。本願の規模こゝ

りにおほふによりて。炎王清淨等の日光あらはれす。これによりて。煩惱障眼雖不能見とも釋し。已能雖破無明闇とらの（又一本）たまへり。日輪の他力いたらさるほとは。われと無明を破すといふことあるへからす。無明を破せすは。また出離その期あるへからす。他力をもて無明を破するかゆへに。日いてゝのち夜あくといふなり。これさきの光明名號の義に。こゝろおなしといへとも。自力他力を分別せられんために。法譬を合しておほせことありきと云云。

一善惡二業の事。

上人親鸞おほせにのたまはく。某はまたく善もほしからす。また惡もをそれなし。善のほしからさるゆへは。彌陀の本願を信受するにまされる善なきかゆへに。惡のをそれなきといふは。彌陀の本願をさまたくる惡なきかゆへに。しかるに世のひとみなおもへ

一无碍の光曜によりて无明の闇夜はるゝ事

本願寺の上人親鸞あるとき。門弟にしめしてのたまはく。つねにひとのしるところ。夜あけて日輪はいつや。日輪いてゝ夜あくや。兩篇なんたちいかんかしると云云。うちまかせてひとみなおもへらく。夜あけてのち日いつとこたへまふす。上人のたまはく。しからさるなりと。日いてゝまさに夜あくるものなり。そのゆへは日輪まさに須彌の半腹を行度するとき。他州のひかりちかつくについて。この南州あきらかになれは。日いてゝ夜はあくといふなり。これ。たとへなり。無碍光の日輪照觸せさるときは。永々昏闇の無明の夜あけす。しかるにいま宿善ときいたりて。不斷難思の日輪。貪瞋の半腹に行度するとき。無明やうやくやみはれて。信心たちまちにあきらかなり。しかりといへとも。貪瞋の雲霧か

かにしりぬへし。しかるに宿善開發する機のしるしには。善知識にあふて開悟せらるゝとき。一念疑惑を生せさるなり。その疑惑を生せさることは。光明の緣にあふゆへなり。もし光明の緣もよほさすは。報土往生の眞因たる名號の因をうへからす。いふこゝろは。十方世界を照曜する無碍光遍照の明朗なるにてらされて。無明沈沒の煩惑漸々にとらけて。涅槃の眞因たる信心の根芽。わつかにきさすとき。報土得生の定聚のくらゐに住す。すなはちこのくらゐを。光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨ととけり。また光明寺の御釋には。以光明名號。攝化十方。但使信心求念とものたまへり。しかれは往生の信心のさたまることは。われらか智分にあらす。光明の緣にもよほしそたてられて。名號信知の報土の因をうとしるへしとなり。これを他力といふなり。

三中務丞か遺孫次郎入道淨信。土木の大功ををへて。一宇の伽藍を造立して。供養のために。唱導におもむきましますへきよしを。屈請しまふすといへとも。上人善信つねにもて固辭しおほせられて。かみくたんのおもむきをかたりおほせらる。そのとき上人善信權者にましますといへとも。濁亂の凡夫に同して。不淨說法のとかをもきことをしめしましますものなり。

一光明名號の因緣といふ事。

十方衆生のなかに。淨土敎を信受する機あり。信受せさる機あり。いかんとならは。大經のなかにとくかことく。過去の宿善あつきものは。今生にこの敎にあふてまさに信樂す。宿福なきものはこの敎にあふといへとも。念持せされはまたあはさるかことし。欲知過去因の文のことく。今生のありさまにて。宿善の有無あきら

導として。法印重説のむねを。聖人源空の御前にて一言もおとしましまさす。分明にまた一座宣説しまふさる。そのときさしそへらるゝ善綽の御房に對して。もし紕繆ありやと聖人源空おほせらるゝところに。善綽御房まふされていはく。西意二座の説法聽聞つかふまつりをはりぬ。言語のをよふところにあらすと云云。三百八十餘人御門侶のなかに。その上足といひ。その器用といひ。すてに清撰にあたりて。使節をつとめましますところに。西意また證明の發言にをよふ。おそらくは多寶證明の往事にあひおなしきものをや。このこと太師聖人の御とき。隨分の面目たりき。説導も涯分いにしへにはつへからすといへとも。人師戒師停止すへきよし。聖人の御前にして誓言發願をはりき。これによりて檀越をへつらはす。その請におもむかすと云云。そのころ七條の源

坊にいたりて案内せらる。おりふし沐浴と云云。御つかひたれひとそやととはる。善信の御房入來ありと云云。そのときおほきにおとろきて。このひとの御使たること邂逅なり。おほろけのことにあらしとて。いそき溫室よりいてゝ對面。かみくたんの子細をつふさに聖人空源のおほせとて演說。法印まふされていはく。このこと年來の御宿念たり。聖覺いかてか疎簡を存せん。たとひ勅定たりといふとも。師範の命をやふるへからす。よりておほせをかうふらさるさきに。聖道淨土の二門を混亂せす。あまさへ淨土の宗義をまふしたてはんへりき。これしかしなから王命よりも師孝をおもくするかゆへなり。御こゝろやすかるへきよしまふさしめたまふへしと云云。このあひたの一座の委曲。つふさにするにいとまあらす。すなはち上人善信御歸參ありて。公廷一座の唱

聖道のほかに。淨土の一宗興して。凡夫直入の大益あるへきよしを。ついてをもてことにまふしたてられけり。こゝに公廷にしてその沙汰あるよし。聖人空源きこしめすについて。もしこのときまふしやふられなは。淨土の宗義なんそ立せんや。よりて安居院の坊へおほせつかはされんとす。たれひとたる。へき一本そやのよし。その仁を内々えらはる。ときに。善信の御房その仁たるへきよし。聖人さしまふさる。同朋のなかに。またもともしかるへきよし。同心に擧しまふされけり。そのとき上人善信かたく御辭退再三にをよふ。しかれとも貴命のかれかたきによりて。使節つかひ又一本ことして上人善信安居院の房へむかはしめたまはんとす。ときに。綽もとも重事なり。すへからくひとをあひそへらるへきよししまふさしめたまふ。もともしかるへしとて。西意善綽御房をさしそへらる。兩人安居院の

口傳鈔《上》

（一本上中下ヲ分タズ）

本願寺鸞聖人。如信上人に對しましまして。おり〳〵の御物語の條々。

一あるときのおほせにのたまはく黒谷聖人源空淨土眞宗御興行さかりなりしとき。かみ一人よりはじめて。偏執のやから一天にみてり。これによりてかの立宗の義を破せられんかために。禁中（時代不審もし土御門院の御宇歟）にして。七日の御逆修をはじめをこなはるゝついてに。安居院。（一本にはよ）法印聖覺を唱導として。聖道門の（一本無）諸宗のほかに。別して淨土宗あるへからさるよし。これをまふしみたらるへきよし勅請あり。しかりといへども。勅喚に應（ゐよう一本）しなから。師範空聖人の本懐さへ（一本）えきりて覺悟のあひた。まふしみたらるゝにを（お一本下同）よはす。あまさへ

口傳鈔

歎異鈔

被行死罪人々。
一番　西意善綽房
二番　性願房
三番　住蓮房
四番　安樂房
二位法印尊長之沙汰也。
親鸞改僧儀賜俗名。仍非僧非俗。然間以禿字為姓被經奏聞了。
彼御申狀于今外記廳に納と云云。流罪以後愚禿親鸞令書給也。
右斯聖敎者。為當流大事聖敎也。於無宿善機無左右不可許之者也。

釋蓮如御判

て歎異鈔といふへし。外見あるへからす。

已下四十紙左二行に至るまて一本によりて加

後鳥羽院之御宇。法然聖人他力本願念佛宗を興行す。于時興福寺僧侶敵奏之。御弟子中狼藉子細あるよし。無實風聞によりて罪科に處せらるゝ人數事。

一法然聖人並御弟子七人流罪。又御弟子四人死罪におこなはるゝなり。聖人は土佐國番多といふ所へ流罪。罪名藤井元彦男云云。生年七十六歳なり。親鸞は越後國罪名藤井善信云云。生年三十五歳なり。

淨房聞　備後國　澄西禪光房　伯耆國

好覺房　伊豆國　行空法本房　佐渡國

幸西成覺房善惠房二人同遠流にさたまる。しかるに無動寺之善題大僧正これを申あつかると云云。遠流之人々已上八人なりと云云。

きをもたしか(かひ一本)に問答し。ひとにもいひきかするとき。ひとのくちをふさき。相論〔のたゝかひ。かたんか〕(をたゝかへ一本)ために。またくおほせにてなきことを。(も一本)おほせとのみまうすこと。あさましく。(をのか自力につのり宗師聖人の)なけき存し(御名をよしなすこと又一本)さふらふなり。このむねを。よく〳〵おもひときこゝろえらるへきことにさふらふなり。(一本無)これさらにわたくしのことにはあらすといへとも。經釋のゆくちをもしらす。(一本無)法文の淺深をこゝろえわけたることもさふらはねは。さためておかしきことにて(こそ一本)さふらはめとも。故親鸞(聖人一本)のおほせことさふらひしおもむきを。百分か一かたはしはかりをおもひ。(いて一本)まいらせて。かきつけさふらふなり。かなしきかなや。さいはひ(い一本)に念佛しなから。直に報土にむまれすして邊地にやとをとらんこと。一室の行者のなかに信心ことなることなからんために。なく〳〵筆をそめてこれをしるす。なつけ

すして。まよへるをおもひしらさんかためにてさふらひけり。まことに如來の御恩といふことをは。さたなくしてわれもひともよしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには。善惡のふたつ總してもて存知せさるなり。そのゆへは。如來の御こゝろに。よしとおほしめすほとにしりとほしたらはこそ。よきをしりたるにてもあらめ。如來のあしとおほしめすほとにしりとほしたらはこそ。あしさをしりたるにてもあらめと。煩惱具足の凡夫。火宅無常の世界は。よろつのこと。みなもてそらこと。たはこと。まことあることなきに。たゝ念佛のみそまことにておはしますとこそ。おほせはさふらひしか。まことに。われもひとも。そらことをのみまうしあひさふらふなかに。ひとつのいたはしきことのさふらふなり。そのゆへは。念佛まうすについて。信心のおもむ

しをきて眞をもちゐるこそ。聖人の御本意にてはさふらへ。かまへて〳〵。聖教をみ。みたらせたまふましくさふらふ。大切の證文とも。少々ぬきいてまいらせさふらふて。目やすにして。この書にそへまいらせてさふらふなり。聖人のつねのおほせには。彌陀の五劫思惟の願を。よくよく案すれはひとへに親鸞一人かためなりけり。されはそくはくの業をもちける身にてありけるを。たすけんとおほしめしたちける本願のかたしけなさよと。御述懐さふらひしことを。いままた案するに。善導の自身は。罪惡生死の凡夫。曠劫よりこのかたつねにしつみつねに流轉して。出離の緣あることなき身としれといふ金言にすこしもたかはせおはしまさす。されはかたしけなくも。わか御身にひきかけてわれらか身の罪惡のふかきほとをもしらす。如來の御恩のたかきことをもしら

當時の一向專修のひとひとのなかにも。親鸞の御信心にひとつならぬ御ことも。さふらふらんとおほえさふらふ。いつれも〱くりことにてさふらへとも。かきつけさふらふなり。露命わつかに枯草の身にかゝりてさふらふほとにこそ。あひともなはしめたまふひと〱御不審をもうけたまはり。聖人のおほせのさふらひしおもむきをも。まうしきかせまいらせさふらへとも。閉眼ののちはさこそしとけなきことともにてさふらはんすらめと。なけき存しさふらひて。かくのことくの義ともおほせられあひさふらふひと〱にも。いひまよはされなんとせらるゝことのさふらはんとき。故聖人の御こゝろにあひかなひて。御もちゐさふらふ御聖教ともを。よく〱御覽さふらふへし。おほよそ聖教には眞實權假ともにあひましはりさふらふなり。權をすてゝ實をとり。假をさ

ふらひけれは。勢観房。念佛房なんとまうす御同朋達もてのほかにあらそひたまひて。いかてか上人の御信心に善信房の信心ひとつにはあるへきそとさふらひけれは。上人の御智慧才覺ひろくおはしますに。ひとつならんとまうさはこそ。ひかことならめ。往生の信心にをいては。またくことなることなし。たゝひとつなりと御返答ありけれとも。なをいかてかその義あらんといふ疑難ありけれは。詮するところ上人の御まへにて。自他の是非をさたむへきにて。この子細をまうしあけけれは。法然上人のおほせには。源空か信心も如來よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も。如來よりたまはらせたまひたる信心なり。されはたゝひとつなり。別の信心にておはしまさんひとは。源空かまいらんする淨土へは。よもまいらせたまひさふらはしとおほせさふらひしかは。

大念には大佛をみ。小念には小佛をみるといへるか。もしこのことはりなんとに。はしひきかけられさふらふやらん。かつはまた檀波羅密の行ともいひつへし。いかにたからものを佛前にもなけ。師匠にもほとこすとも。信心かけなはその詮なし。一紙半錢も佛法のかたにいれすとも。他力にこゝろをなけて。信心ふかくは。それこそ願の本意にてさふらふはめ。すへて佛法にことをよせて。世間の欲心もあるゆへに。同朋をいひをとさるゝにや。

右條々は。みなもて信心のことなるより。ことおこりさふらふか。故聖人の御ものかたりに。法然上人の御とき。御弟子そのかすおほかりけるなかに。おなしく御信心のひとも。すくなくおはしけるにこそ。親鸞御同朋の御なかにして御相論のことさふらひけり。そのゆへは善信か信心も上人の御信心もひとつなりとおほせ。さ

かけたる行者は。本願をうたかふによりて。邊地に生してうたかひのつみをつくのひてのち。報土のさとりをひらくとこそうけたまはりさふらへ。信心の行者すくなきゆへに。化土におほくすゝめいれられさふらふを。つゐにむなしくなるへしとさふらふなるこそ。如來に虚妄をまうしつけまいらせてさふらふなれ。

十八

一佛法の方に施入物の多少にしたかひて。大小佛になるへしといふこと。この條不可說なり云云。比興のことなり。まつ佛に太小の分量をさためんことあるへからすさふらふ。かの安養淨土の敎主の御身量をとかれてさふらふも。それは方便法身のかたちなり。法性のさとりをひらひて。長短方圓のかたちにもあらす。青黃赤白黑のいろをもはなれなは。なにをもてか大小をさたむへきや。念佛まうすに化佛をみたてまつるといふことのさふらふなるこそ。

ても。いよ〳〵願力をあをきまいらせは。自然のことはりにて。忍和忍辱のこゝろもいてくへし。すへてよろつのことにつけて。往生。はかしこきおもひを具せすして。たゝほれ〳〵と。彌陀の御恩の深重なることつねにおもひいたしまいらすへし。しかれは念佛もまうされさふらふ。これ自然なり。わかはからはさるを自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。しかるを自然といふことの。別にあるやうに。われものしりかほにいふひとのさふらふよしうけたまはる。あさましくさふらふなり。

十七

一邊地の往生をとくるひと。つゐには地獄におつへしといふこと。この條いつれの證文にみえさふらふそや。學生たつるひとのなかにいひいたさるゝことにてさふらふなるこそ。あさましくさふらふへ。經論聖敎をは。いかやうにみなされてさふらふやらん。信心

をひきかへて。本願をたのみまいらするをこそ。廻心とはまうしさふらへ。一切のことに。あしたゆふへに。廻心して往生をとけさふらふへくは。ひとのいのちは。いつるいき。いるいきをまたすして。をはることなれは。廻心もせす。柔和忍辱のおもひにも住せさらんさきに。いのちつきは摂取不捨の誓願はむなしくならせおはしますへきにや。くちには願力をたのみたてまつるといひてこゝろにはさこそ悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも。さすか。よからんものをこそ。たすけたまはんすれとおもふほとに。願力をうたかひ。他力をたのみまいらするこゝろかけて。邊地の生をうけんこと。もともなけきおもひたまふへきことなり。信心さたまりなは。往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれは。わかはからひなるへからす。わろからんにつけ

たてけるとはさふらへは。信心のさたまるときに。ひとたひ攝取してすてたまはされは。六道に輪廻すへからす。しかれはなかく生死をはへたてさふらふそかし。かくのことくしるをさとるとはいひまきらかすへきや。あはれにさふらふをや。淨土眞宗には。今生に本願を信して。かの上にしてさとりをはひらくと。ならひさふらふそとこそ。故聖人のおほせにはさふらひしか。

一十六 信心の行者。自然にはらをもたて。あしさまなることをもおかし。同朋同侶にもあひて。口論をもしては。かならす廻心すへしといふこと。この條斷惡修善のこゝちか。一向専修のひとにをいては廻心といふこと。たゝひとたひあるへし。その廻心は。日ころ本願他力眞宗をしらさるひと。彌陀の智慧をたまはりて。日ころのこゝろにては。往生かなふへからすとおもひて。もとのこゝろ

また易行下根のつとめ。不簡善悪の法なり。おほよそ今生にをいて。○煩悩悪障を断せんことはきはめてありかたきあひた。眞言法華を行する浄侶なをもて順次生のさとりをいのる。いかにいはんや。戒行慧解。ともになしといへとも。彌陀の願船に乗して生死の苦海をわたり。報土のきしにつきぬるものならは。煩悩の黒雲はやくはれ。法性の覺月すみやかにあらはれて。盡十方の無碍の光明に一味にして。一切の衆生を利益せんときにこそ。さとりにてはさふらへ。この身をもて。さとりをひらくとさふらふなるひとは。釋尊のことく種々の應化の身を。○現し。三十二相八十隨形好をも具足して。説法利益さふらふにや。これをこそ今生にさとりをひらく本とはまうしさふらへ。和讃に。○金剛堅固の信心のさたまるときをまちえてそ。彌陀の心光攝護して。なかく生死をへ

か。攝取不捨の願をたのみたてまつらは。いかなる不思議ありて罪業をおかし。念佛まうさすしてをはるとも。すみやかに往生をとくへし。また念佛のまうされんも。たゝいまさとりをひらかんする期のちかつくにしたかひて。いよ〳〵彌陀をたのみ御恩を報したてまつるにてこそさふらはめ。つみを滅せんとおもはんは自力のこゝろにして。臨終正念といのるひとの本意なれは。他力の信心なきにてさふらふなり。

一（十五）煩惱具足の身をもちすて（て一本）にさとりをひらくといふこと。この條もてのほかのことにさふらふ。即身成佛は。眞言秘敎の本意。三密行業の證果なり。六根清淨は。また法華一乘の所說四安樂行の感德なり。これみな難行上根のつとめ。觀念成就のさとりなり。來生の開覺は。他力淨土の宗旨信心決定の道（通故又一本）なるかゆへなり。これ

て。命終すれはもろ〳〵の煩惱惡障を轉して。無生忍をさとらしめたまふなり。この悲願ましまさすは。かゝるあさましき罪人いかてか生死を解脱すへきとおもひて。一生のあひたまうすところの念佛は。みなこと〳〵く如來大悲の恩を報し。德を謝すとおもふへきなり。念佛まうさんことに。つみをほろほさんと信せんは。すてにわれとつみをけして往生せんとはけむにてこそさふらふなれ。もししからは。一生のあひたおもひとおもふことみな生死のきつなにあらさることなけれは。いのちつきんまて念佛退轉せすして往生すへし。たゝし業報かきりあることなれは。いかなる不思議のことにもあひ。また病惱苦痛をせしめて。正念に住せすしてをはらん。念佛まうすことかたし。そのあひたのつみをは。いかゝして滅すへきや。つみきえされは往生はかなふへからさる

ましまさん。本願ほこりといましめらるゝひと〳〵も。煩惱不淨具足せられてこそさふらふけなれは。（一本無）それは願にほこらるゝにあらすや。いかなる惡を本願ほこりといふ。いかなる惡かほこらぬにてさふらふへき。（そ一本）や。かへりてこゝろをさなきことか。

十四　一念に八十億劫の重罪を滅すと信すへしといふこと。この條は十惡五逆の罪人。日ころ念佛をまうさすして。命終のときはしめて善知識の（を一本）おしへにて。一念まうせは八十億劫の罪を滅し。十念まうせは。十八十億劫の重罪を滅して往生すといへり。これは十惡五逆の輕重をしらせんかために。一念十念といへるか滅罪の利益なり。いまたわれらか信するところにおよはす。そのゆへは彌陀の光明にてらされまいらするゆへに。一念發起するとき。金剛の信心をたまはりぬれは。すてに定聚のくらゐにおさめしめたまひ

場にはりふみをして。なむ〳〵のこと。したらんものをは道場へいるへからすなんと〻いふこと。ひとへに賢善精進の相をほかにしめして。うちには虚假をいたけるものか。願にほこりて。つくらんつみも。宿業のもよほすゆへなり。されはよきこともあしきことも。業報にさしまかせて。ひとへに本願をたのみまいらすれはこそ。他力にてはさふらへ。唯信鈔にも。彌陀いかはかりのちからましますとしりてか。罪業の身なれは。すくはれかたしとおもふへきとさふらふそかし。本願にほこるこ〻ろのあらんにつけてこそ。他力をたのむ信心も決定しぬへきことにてさふらへ。おほよそ悪業煩惱を斷しつくしてのち。本願を信せんのみそ。願にほこるおもひ。なくてよかるへきに。煩惱を斷しなは。すなはち佛「になるとならは」。佛のためには。五劫思惟の願。その詮なくや

えさふらひしとき。御消息に。くすりあれはとて毒をこのむへからすとこそあそはされてさふらふは。かの邪執をやめんかためなり。またく悪は往生のさはりたるへしとにはあらす。持戒持律にてのみ本願を信すへくは。われらいかてか生死をはなるへきや。かゝるあさましき身も本願にあひたてまつりてこそ。けにほこられさふらへ。されはとて身にそなへさらん悪業は。よもつくられさふらはしものを。また。うみかはに。あみをひき。つりをして。世をわたるものも。野やまにしゝをかり。鳥をとりて。いのちをつくともからも。あきなひをもし。田畠をつくりてすくるひとも。たゝおなしことなりと。さるへき業縁のもよほせは。いかなるふるまひもすへしとこそ聖人はおほせさふらひしに。當時。後世者ふりして。よからんものはかり念佛まうすへきやうに。あるひは道

まうしてさふらひしかは。さては。親鸞かいふことを。たかふましきとはいふそと。これにてしるへし。なにことも。こゝろにまかせたることならは。往生のために千人ころせといはんに。すなはちころすへし。しかれとも一人にてもころすへき業縁なきによりて害せさるなり。わかこゝろのよくてころさぬにはあらす。また害せしとおもふとも。百人千人をころすこともあるへしと。おほせのさふらひしは。われらかこゝろのよきをはよしとおもひ。あしきことをはあしとおもひて。本願の不思議にてたすけたまふといふことを。しらさることをおほせのさふらひしなり。そのかみ邪見におちたるひとありて。悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませはとて。わさとこのみ。悪をつくりて。往生の業とすへきよしをいひて。やう／＼にあしさまなることのきこ

願ほこりとて。往生かなふへからずといふこと。この條本願をうたかふ善惡の宿業をこゝろえさるなり。よきこゝろのおこるも。宿業（善宿又一本宿善又一本）のもよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも。惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには。卯（兎一本）毛（うのけ）羊毛（ひつじのけ一本無）のさきにゐ（い一本）るちりはかりも。つくるつみの宿業にあらすといふことなしとしるへしとさふらひき。またあるとき唯圓坊は。わかいふことをは信するかとおほせのさふらひしあひた。さんさふらふと。まうしさふらひしかは。さらはわかいはんことたかふましきかと。かさねておほせのさふらひしあひた。つゝしんで領状（れうしやう）まうして（され一本）さふらひしかは。たとへはひとを（一本無）千人ころしてんや。しからは往生は一定すへしとおほせさふらひしとき。おほせにてはさふらへとも。一人も。この身の器量（きりやう）にては。ころしつへしともおほえすさふらふ。と

まの世には學文して。ひとのそしりをやめ。ひとへに論議問答をむねとせんと。かまへられさふらふにや。學問せはいよ〳〵如來の御本意をしり。悲願の廣大のむねをも存知して。いやしからん身にて往生はいかゝなんとゝあやふまんひとにも。本願には善惡淨穢なきおもむきをもときゝかせられさふらはゝこそ。學生の甲斐にてもさふらはめ。たま〳〵なにこゝろもなく。本願に相應して念佛するひとをも。學文してこそなんとゝいひおとさるゝこと。法の魔障なり。佛の怨敵なり。みつから他力の信心かくるのみならす。他をまよはさんとす。つゝしんておそるへし。先師の御こゝろにそむくことを。かねてあはれむへし。彌陀の本願にあらさることをと。云云。

十三
一　彌陀の本願不思議におはしませはとて。惡をおそれさるはまた本

すとて。にくひ氣せすは。たれのひとかありてあたを。すへきや
かつは諍論のところには。もろ〳〵の煩惱おこる。智者遠離すへ
きよしの證文さふらふにこそ。故聖人のおほせには。この法をは
信する衆生もあり。そしる衆生もあるへしと。佛ときをかせたま
ひたることなれは。われはすてに信したてまつる。またひとあり
て。そしるにて。佛說まことなりけりとしられさふらふ。しかれ
は往生はいよ〳〵一定とおもひたまふへきなり。あやまてそしる
ひとのさふらはさらんにこそ。いかに信するひとはあれとも。そ
しるひとのなきやらんともおほえさふらひぬへけれ。かくまうせ
はとて。かならすひとにそしられんとにはあらす。佛のかねて信
謗ともにあるへきむねをしろしめして。ひとのうたかひをあらせ
しとときをかせたまふことをまうすなりとこそさふらひしか。い

の往生いかゝあらんすらんといふ證文もさふらふへきや。當時專修念佛のひとゝ。聖道門のひとゝ。法論をくはたてゝ。わか宗こそすくれたれ。ひとの宗はおとりなりといふほとに。法敵もいてきたり。謗法もおこる。これしかしなから。みつからわか法を破謗するにあらすや。たとひ諸門こそりて。念佛は。かひなきひとのためなり。その宗あさしいやしといふとも。さらにあらそはすして。われらかことく。下根の凡夫。一文不通のものゝ。信すれはたすかるよし。うけたまはりて信しさふらへは。さらに上根のひとのためにはいやしくとも。われらかためには最上の法にてまします。たとひ自餘の敎法はすくれたりとも。みつからかためには器量およはされはつとめかたし。われもひとも生死をはなれんことこそ。諸佛の御本意にておはしませは。御さまたけあるへから

するは。名號不思議のちからなり。これすなはち誓願不思議のゆへなれは。たゝひとつなるへし。

[十二] 一經釋をよみ學せさるともから。往生不定のよしのこと。この條すこふる不足言の義といひつへし。他力眞實のむねをあかせるもろ〳〵の聖敎[正一本]は。本願を信し。念佛をまうさは佛になる。そのほかなにの學問かは往生の要なるへきや。まことにこのことはりにまよひ、、[一本無]はんへらんひとは。いかにも〳〵學問して。本願のむねをしるへきなり。經釋をよみ學すといへとも聖敎の本意をこゝろえさる條。もとも不便のことなり。一文不通にして。經釋のゆくちもしらさらんひとの。となへやすからんための名號にて、[一本無]おはしますゆへに。易行といふ。學問をむねとするは聖道門なり。難行となつく。あやまて學問して。名聞利養のおもひに住するひと。順次

へんものを。むかへとらんと御約束あることなれは。まつ彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて。生死をいつへしと信して。念佛○まうさるゝも。如來の御はからひなりとおもへは。すこしもみつからのはからひましはらさるかゆへに。本願に相應して○實報土に往生するなり。これは誓願の不思議を○信したてまつれは。名號の不思議も具足して。誓願名號の不思議。ひとつにしてさらにことなることなきなり。つきにみつからのはからひをさしはさみて。善惡のふたつにつきて。往生のたすけさはり。二樣におもふは誓願の不思議をはたのますして。わかこゝろに往生の業をはけみて。まうすところの念佛をも。自行になすなり。このひとは名號の不思議をもまた信せさるなり。信せされとも邊地懈慢疑城胎宮にも往生して。果遂の願のゆへにつゐに報土に生

ろさしにして。あゆみを遼遠の洛陽にはけまし。信をひとつにして。心を當來の報土にかけしともからは。同時に御意趣をうけたまはりしかとも。そのひと〳〵にともなひて。念佛まうさるゝ老若そのかすをしらすおはしますなかに。上人のおほせにあらさる異義ともを。近來はおほくおほせられあふてさふらふよし。つたへうけたまはる。いはれなき條々の子細のこと。

十一　一文不通のともからの念佛まうすにあふて。なんちは誓願不思議を信して念佛まうすか。また名號不思議を信するか。といひおどろかして。ふたつの不思議の子細をも。分明にいひひらかすして。ひとのこゝろをまとはすこと。この條かへす〳〵もこゝろをとゞめて。おもひわくへきことなり。誓願の不思議によりて。やすくたもちとなへやすき名號を案しいたしたまひて。この名字をとな

いさゝか所労のこともあれは。死なんするやらんとこゝろほそくおほゆることも。煩惱の所爲なり。久遠劫より。いままて流轉せる苦惱の舊里はすてかたく。いまたむまれさる安養の淨土はこひしからすさふらふこと。まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ。なこりおしくおもへとも。娑婆の縁つきて。ちからなくしてをはるときに。かの土へはまいるへきなり。いそきまいりたきこゝろなきものを。ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ。いよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存知さふらへ。踊躍歡喜のこゝろもあり。いそき淨土へ○(も一本)まいりたくさふらはんには。煩惱のなきやらんと。あやしくさふらひなましと。云云。

十

一念佛には無義をもて義とす。不可稱不可說不可思議のゆへにとおほせさふらひき。そもそも。かの御在生のむかし。おなし○(く又一本)こゝ

のためには非行非善なりと。云云。

一九 念佛まうしさふらへとも。踊躍歡喜のこゝろをろそかにさふらふこと。またいそき淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは。いかにとさふらふへきことにてさふらふやらんと。まうしいれてさふらひしかは。親鸞も。この不審ありつるに。唯圓坊をなしこゝろにてありけり。よく〳〵案しみれは。天におとり。地におとるほとに。よろこふへきことをよろこはぬにて。いよ〳〵往生は一定とおもひたまふへきなり。よろこふへきこゝろを。おさへてよろこはせさるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして。煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれは。他力の悲願は。かくのこときのわれらかためなりけりとしられて。いよ〳〵たのもしくおほゆるなり。また淨土へいそきまいりたきこゝろのなくて。

て。ひとにつれて念佛すれは。往生すへからさるものなりなんといふこと。不可說なり。如來よりたまはりたる信心を。わかものかほにとりかへさんとまうすにや。かへす〲もあるへからさることなり。自然のことはりにあひかなは〻。佛恩をもしり。また師の恩をもしるへきなりと。云云。

一[七]念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならは。信心の行者には。天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を[一本を]感ずることあたはす。諸善もおよふことなきゆへに無碍[六字一本無]の一道」なりと。云云。

一[八]念佛は行者のために非行非善[六字一本無]なり。わかはからひにて行するにあらされは非行といふ。わかはからひにてつくる善にも[一本無]あらされは非善といふ。ひとへに他力にして。自力をはなれたるゆへに行者

さふらふへきなり。わかちからにて。はけむ善にてもさふらはゝこそ。念佛を廻向して。父母をもたすけさふらはめ。たゝ自力をすてゝ。いそき淨土のさとりをひらきなは。六道四生のあひた。いつれの業苦にしつめりとも。神通方便をもて。まつ有緣を度すへきなりと。云云。

一 專修念佛のともからの。わか弟子。ひとの弟子といふ相論のさふらふらんこと。もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたすさふらふ。そのゆへは。わかはからひにて。ひとに念佛をまうさせさふらはゝこそ。弟子にてもさふらはめ。ひとへに彌陀の御もよほしにあつかりて。念佛まうしさふらふひとを。わか弟子とまうすこと。きはめたる荒涼のことなり。つくへき緣あれはともなひ。はなるへき緣あれは。はなるゝことのあるをも。師をそむき

とおほせさふらひき。[と云云一本]

一[四] 慈悲に聖道浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは。ものをあはれみ。かなしみ。はくゝむなり。しかれとも。おもふかことくたすけとくることきはめてありかたし。[また一本]。浄土の慈悲といふは。念佛して。いそき佛になりて。大慈大悲心をもて。おもふことく衆生を利益するをいふへきなり。今生に。いかにいとをし。不便とおもふとも。存知のことくたすけかたけれは。この慈悲始終なし。しかれは念佛まうすゑみそすゑとを[は一本]りたる大慈悲心にてさふらふへきと。云云。

一[五] 親鸞は父母の孝養のためとて。[一本無]、、念佛一返[遍一本]にても。[念佛一本]まうしたることいまたさふらはす。そのゆへは。一切の有情は。みなもて世々生々の父母兄弟なり。いつれも〱この順次生に佛になりてたすけ

をとりて信したてまつらんとも。またすてんとも。面々の御はからひなりと。云々。

一[三]善人なをもて往生をとく。いはんや惡人をや。しかるを世のひと。つねにいはく。惡人なを往生す。いかにいはんや善人をや[と一本]。この條一旦そのいはれあるににたれとも。本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは自力作善のひとは。ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひた。彌陀の本願にあらす。しかれとも。自力のこゝろをひるかへして。他力をたのみたてまつれは。眞實報土の往生をとくるなり。煩惱具足のわれらは。いつれの行にても生死をはなるゝことあるへからさるをあはれみたまひて。願をおこしたまふ。本意惡人成佛のためなれは。他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり。よて善人たにこそ[一本無]往生すれ[一本無]まして惡人は。

やはんへるらん[一本無]。また地獄におつる業[べき一本]にてやはんへるらん。總じてもて存知せさるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて。念佛して地獄におちたりとも。さらに後悔すへからすさふらふ。そのゆへは。自餘の行も[を一本]はけみて。[も一本]佛になるへかりける身か。念佛をまうして地獄に[も一本]。おちてさふらはゝこそ。すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いつれの行もおよひかたき身なれは。とても地獄は一定すみかそかし。彌陀の本願まことにおはしまさは。釋尊の説教。虚言なるへからす。佛説まことにおはしまさは。善導の御釋虚言したまふへからす。善導の御釋まことならは。法然のおほせそらことならんや。法然のおほせまことならは。親鸞かまうすむね。またもてむなしかるへからすさふらふ歟(か)。詮(せん)するところ愚身か[の一本]信心にをきてはかくのことし。このうへは。念佛

にまきるへき善なきゆへに。惡をもおそるへからす。彌陀の本願をさまたくるほとの惡なきかゆへにと。云云。

一　各々十餘箇國のさかひをこえて。身命をかへりみすして。たつねきたらしめたまふ御こゝろさし。ひとへに往生極樂のみちをとひきかんかためなり。しかるに念佛よりほかに往生のみちをも存知し。また法文等をもしりたる。らんと。こゝろにくゝおほしめしおはしましてはんへらんは。おほきなるあやまりなり。もししからは。南都北嶺にも。ゆゝしき學生たち。おほく座せられ。さふらふなれは。かのひと。にもあひたてまつりて。往生の要よく〳〵きかるへきなり。親鸞にをきては。たゝ念佛して彌陀にたすけられまいらすへしと。よきひとのおほせをかうふりて。信するほかに別の子細なきなり。念佛は。まことに淨土にむまるゝたねにて

歎異鈔

竊迴愚案。粗勘古今。歎異先師口傳之眞信。思有後學相續之疑惑。幸不依有緣知識者。爭得入易行一門哉。全以自見之覺悟。莫亂他力宗旨。仍○親鸞聖人御物語之趣所留耳底。聊註之。偏爲散同心行者之不審也。云云。

一 彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて。往生をはとくるなりと信して。念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき。すなはち攝取不捨の利益にあつけしめたまふなり。彌陀の本願には。老少善惡のひとをえらは○す。たゝ信心を要とすとしるへし。そのゆへは。罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんかための願にてまします。しかれは本願を信せんには。他の善も要にあらす。念佛

歎異鈔

選擇悲願をこゝろえたまふへしと。南無阿彌陀佛

愚禿親鸞八十四歳書之

康元元丙辰十一月廿九日

往還廻向文類

はに還相廻向といふは。淨土論曰。以本願力廻向故。是名出第五門といへり。又曰。生彼國已還。起大悲廻入生死。敎化衆生。亦名廻向也といへり。これは還相の廻向ときこへたり。このこゝろは一生補處の大願にあらはれたり。大慈大悲の誓願は。大經言。設我得佛他方佛土諸菩薩衆。來生我國。究竟必至一生補處。除其本願自在所化。爲衆生故。被弘誓鎧積累德本。度脫一切。遊諸佛國。修菩薩行。供養十方諸佛如來。開化恒沙無量衆生。使立無上正眞之道。超出常倫。諸地之行現前。修習普賢之德。若不爾者。不取正覺文。この悲願は如來の還相廻向の御ちかひなり。これらを如來の二種の廻向とまふすなり。他力の往相還相の廻向なれは。自利利他ともに行者の願樂にあらす。大願より自然にうるなり。しかれは他力には義なきをもて義とすと。大師聖人はおほせことありき。つく〳〵この

至滅度の悲願にあらはれたり。證果の悲願。大經言。設我得佛國中人天。不住定聚必至滅度者。不取正覺文。これらの本誓悲願を選擇本願とまふすなり。これを往相廻向とまふすなり。この必至滅度の大願をこしたまひて。この眞實信樂をえたらむ人は。すなはち正定聚のくらゐに住せしめむとちかひたまへり。同本異譯の無量壽如來會言。若我成佛。國中有情。若不決定。成等正覺。證大涅槃者。不取正覺文。この悲願はすなはち。決定して等正覺にならしめむとちかひたまへりとなり。等正覺といふは。すなはち正定聚のくらゐなり。等正覺とまふすは。補處の彌勒菩薩とおなしからしめむとちかひたまへるなり。しかれは眞實信樂の念佛者は。彌勒菩薩とおなしと。龍舒淨土文にはあらはせり。しかれは大經には次如彌勒とのへたまへり。これらの大願を往相廻向とまふすとみえたり。二

往相廻向還相廻向文類

往相廻向之文

無量壽經優婆提舍願生偈曰。云何廻向。不レ捨二一切苦惱衆生一。心常作レ願。廻向爲レ首。得二成就一大悲心一故文。この本願力の廻向をもて。如來の廻向に二種あり。一には往相廻向。二には還相廻向なり。往相廻向につきて眞實の行業あり。眞實の信心あり眞實の證果あり。眞實行業といふは。諸佛稱名の悲願にあらはれたり。稱名の悲願大經言、設我得レ佛十方世界無量諸佛、不下悉咨嗟稱中我名上者、不レ取二正覺一文。眞實信心といふは。念佛往生の悲願にあらはれたり。信樂の悲願。大經言。設我得レ佛十方衆生。至レ心信樂。欲レ生二我國一。乃至十念。若不レ生者。不レ取二正覺一。唯除二五逆誹謗正法一文。眞實證果といふは。必

往還廻向文類

眞佛御房御返事

親鸞聖人法息消集

一四月七日の御文。(至乃)いのち候はゝかならす〱のほらせたまふへし。已上末燈鈔二十六ノ右二行より。二十七右二行ニ至文同専信坊京ちかくなられてさふらふこそ。たのもしふをほえさふらへ。

五月二十八日　親鸞

覺信御房　御返事

一たつねをほせられてさふらふこと。(至乃)承信御房にとひまいらせたまふへし。あなかしこ〱。已上末燈鈔三十四左五行より。三十六の右二行に至文同。

他力のなかには。自力とまふすことはさふらふときゝさふらひき。(至乃)そのときまふしさふらふへし。あなかしこ〱已上末燈鈔三十九ノ右七行より。同左七行二至文同。

十一月廿五日

右四行より。四十六の右三行至文同。

一善知識をおろかにおもひ。(至乃)よく／＼御こゝろえられ候へし。已上末燈鈔四十七の右一行より。四十八の右一行至文同。なにごともまふしつくしかたくさふらふ。また／＼まふすへし。あなかしこ／＼。

親鸞

一なにごとよりは聖敎のをしへをもしらす。(至乃)その沙汰あるへくも候はす。已上末燈鈔三十七の右一行より。三十九の右五行至文同往生はなにごとも／＼凡夫のはからひならす。如來の御ちかひにまかせまいらせたれはこそ。他力にてはさふらへ。やう／＼にはからひあふてさふらふらんをかしくさふらふ。あなかしこ／＼。

十一月二十四日　　親鸞

二十六右　右性信御房への御消息の次に三通あり。末燈鈔と大同。

さふらふ。

二月九日　　親鸞

慶西御坊御返事

御消息集異本

初右初通の前に五通あり。末燈鈔と大同。

かたがたよりの御こゝろざしのもの。(乃至)よみきかせたまふへく候。あなかしこなかしこ。已上末燈鈔四十八の右一行より五十四の右二行に至文同。

建長四年(壬子)八月十九日　　親鸞

一この明教房のほられて候こと。(乃至)よくよく御こゝろえさふらふへし。已上末燈鈔四十六右三行より。四十七の右一行に至文同。

一御文度々まいらせ候ひき。(乃至)またまたまふしさふらふへし。已上末燈鈔四十二

とこそ。大師聖人のおほせにてさふらへ。かやうに義のさふらふらんかきりは。他力にはあらす。自力なりときこへてさふらふ。また「己下二十字一本により加」他力とまふすは。佛智不思議にてさふらふ」なるときに。煩惱具足の凡夫の。無上覺のさとりをえさふらふなることをは。佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらすさふらふ。しかれは義なきを義とすとさふらふなり。義とまふすことは。自力のひとのはからひをまふすなり。他力には。しかれは義なきを義とすとさふらふなり。このひと／＼のおほせのやうは。これにはつや／＼としらぬことにてそふらへは。とかくまふすへきにあらすさふらふ。また來の字は衆生利益のためにはきたるとまふす方便なり。さとりをひらきては。「己下二十字一本により加」かへるとまふすときにしたかひてきたるとも」かへるともまふすとみへてさふらふ。なにことも／＼。またまふすへく

ことには。さはりなくたすけさせたまはんれうに。無碍光佛とまふすとしらせたまふへくさふらふ。あなかしこ〱。

十月廿一日　　親鸞

唯信御坊御返事

一諸佛稱名の願とまふし。諸佛咨嗟の願とまふしさふらふなるは。十方衆生をすゝめんためときこへたり。また十方衆生の疑心をとゝめんれうときこへてさふらふ。彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにてきこえたり。詮するところは。方便の御誓願と信しまいらせさふらふ。念佛往生の願は。如來の往相迴向の正業正因なりとみへてさふらふ。まことの信心あるひとは。等正覺の彌勒とひとしければ。如來とひとしとも。諸佛のほめさせたまひたりとこそきこへてさふらへ。また彌陀の本願を信しさふらひぬるうへには。義なきを義とす

まふすことにてさふらへは。よく〱念佛そしらんひとをたすかれとおほしめして。念佛しあはせたまふへくさふらふ。またなにこともたひ〱の便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便。うれしうてまふしさふらふ。あなかしこ〱。

入西御坊のかたへもまふしたうさふらへとも。おなしことなれはこのやうをつたへたまふへくさふらふ。あなかしこ〱。

親鸞

性信御坊へ

一ひと〱のおほせられてさふらふ。十二光佛の御ことのやう。かきしるしてくたしまいらせさふらふ。くはしくかきまいらせさふらふへきやうもさふらはす。をろをろかきしるしてさふらふ。詮するところは。無碍光佛とまふしまいらせさふらふことを。本とせさせたまふへくさふらふ。無碍光佛は。よろつのものゝあさましきわるき

しさふらふ。そののちなにことかさふらふ。念佛のうたへのことしつまりてさふらふよし。かた〳〵よりうけたまはりさふらへは。うれしふこそさふらへ。いまはよく〳〵念佛もひろまりさふらはんずらんと。よろこひいりてさふらふ。これにつけても。御身のれうはいまさたまらせたまひたり。念佛を御こゝろにいれて。つねにまふして念佛そしらんひと〳〵。この世のちの世までのことをいのりあはせたまふへくさふらふ。御身とゝのれうは。御念佛はいまはなにかはせさせたまふへき。たゝひかふたる世のひと〳〵をいのり。彌陀の御ちかひにいれとおほしめしあはゝ。佛の御恩を報しまいらせたまふになりさふらふへし。よく〳〵御こゝろにいれてまふしあはせたまふへくさふらふ。聖人の廿五日の御念佛も。詮するところは。かやうの邪見のものをたすけんれうにこそ。まふしあはせたまへと

ほえさふらふ。よく〳〵かきもたせたまひてさふらふ。法門はみな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたかひて。めでたき御文ともは。すてさせたまひあふてさふらふときこへさふらふこそ。詮なくあはれにおほゆさふらへ。よく〳〵唯信鈔。後世物語なんとを御覧あるへくさふらふ。年ころ信ありとおほせられあふてさふらひけるひと〳〵は。みなそらことにてさふらひけりときこへさふらふ。あさましくさふらふ〳〵。なにこと〳〵。また〳〵まふしさふらふへし。

正月九日　親鸞

眞淨御坊

一くたらせたまひてのち。なにことかさふらふらん。この源藤四郎殿に。おもはさるにあひまいらせてさふらふ。便のうれしさにまふ

されて。信心みなうかれあふておはしましさふらふなること。かへす〳〵あはれにかなしふおほえさふらふ。これもひと〳〵をすかしまふしたるやうにきこへさふらふこと。かへす〳〵あさましくおほえさふらふ。それも日ころひと〳〵の信のさたまらすさふらひけることのあらはれてきこへさふらふ。かへす〳〵不便にさふらひけり。慈信坊かまふすことによりて。ひと〳〵の日ころの信のたちろきあふておはしましさふらふも。詮するところは。ひと〳〵の信心のまことならぬことのあらはれてさふらふよきことにてさふらふ。それをひと〳〵は。これよりまふしたるやうにおほしめしあふてさふらふこそ。あさましくさふらへ。日ころやう〳〵の御ふみともをかきもちておはしましあふてさふらふ。かひもなくおほえさふらふ。唯信鈔。やう〳〵の御文ともは。いまは詮なくなりてさふらふとお

ふらふことを。たのみをおほしめして。これよりは餘の人。強縁として。念佛ひろめよとまふすこと。ゆめ〳〵まふしたることさふらはす。きはまれるひかことにてさふらふ。この世のならひにて念佛をさまたけんことは。かねて佛のときをかせたまひてさふらへは。をどろきをほしめすへからす。やうやうに慈信坊かまふすことを。これよりまふしさふらふと御こゝろえさふらふ。ゆめ〳〵あるへからすさふらふ。法門のやうもあらぬさまにまふしなしてさふらふなり。御耳にきゝいれらるへからすさふらふ。きはまれるひかことゝものきこへさふらふ。あさましくさふらふ。入信坊なんとも不便におほえさふらふ。鎌倉にながゐしてさふらふらん。不便にさふらふ。當時それもわづらふへくてそさてもさふらふらん。ちからをよはすさふらふ。奥郡のひと〳〵の慈信坊にすか

ろ。そのところの縁そつきさせたまひさふらふらん。念佛をさへらるなんとまふさんことに。ともかくもなけきおほしめすへからすさふらふ。念佛とゝめんひとこそ。いかにもなりさふらはめとまふしたまふひとは。なにかくるしくさふらふへき。餘のひと〳〵を縁として。念佛をひろめんとはからひあはせたまふこと。ゆめ〳〵あるへからすさふらふ。そのところに念佛のひろまりさふらはんことも。佛天の御はからひにてさふらふへし。慈信坊かやう〳〵にまふしさふらふなるによりて。ひと〳〵も御こゝろとものやう〳〵にならせたまひさふらふよしうけたまはりさふらふ。かへす〳〵不便のことにさふらふともかくも。佛天の御はからひにまかせまいらせたまふへし。そのところの縁つきておはしましさふらはゝ。いつれのところにてもうつらせたまひてさふらふておはしますやうに。御はからひさ

十一月九日　　　　　　親鸞

慈信御坊

一、眞佛坊。性信坊。入信坊。このひと／＼のことうけたまはりさふらふ。かへす／＼なげきおほえさふらへとも。ちからをよはすさふらふ。また餘のひと／＼のおなしこゝろならすさふらふらんも。ちからをよはすさふらふ。ひと／＼のおなしこゝろならすさふらへは。とかくまふすにをよはす。いまはひとのうへもまふすへきにあらすさふらふ。よく／＼こゝろえたまふへし。

親鸞

慈信御坊

一、さては念佛のあひだのことによりて。ところせきやうにうけたまはりさふらふ。かへす／＼こゝろくるしくさふらふ。詮するとこ

かたのひとは九十なん人とかや。みな慈信坊のかたへとて。中太郎入道をすてたるとかやきゝさふらふ。いかなるやうにてさやうにはさふらふぞ。詮するところ。信心のさだまらざりけるとき、さふらふ。いかやうなることにて。さほとにおほくのひと／＼のたちろきさふらふらん。不便のやうとやきゝさふらふ。またかやうのきこへなんとさふらへは。そらこともおほくさふらふへし。また親鸞も偏頗あるものときゝさふらへは。ちからをつくして。唯信鈔。後世物語。自力他力の文のこゝろとも。二河の譬喩なんとかきてかたかたへひと／＼にくたしてさふらふも。みなそらことになりてさふらふときこへさふらふは。いかやうにすゝめられたるやらん。不可思議のことときゝさふらふこそ。不便にさふらへ。よく／＼きかせたまふへし。あなかしこ／＼。

（一本無）（ふたつのかはのたとへなり一本）

には。師子の身中のむしのしゝをくらふかことしとさふらへは。念佛者をは。佛法者のやふりさまたけさふらふなり。よく〳〵こゝろえたまふへし。なを〳〵御ふみにはまふしつくすへくもさふらはす。

九月廿七日の御文。くわしくみさふらひぬ。さては御こゝろさしの錢伍貫文。十一月九日にたまはりてさふらふ。さてはゐなかのひと〳〵。みな年來念佛せしは。いたつらことにてありけりとて。かた〳〵。やう〳〵にまふすなることこそ。かへす〳〵不便のことにてきこへさふらへ。やう〳〵。ふみともをかき。もてるを。いかにみなしてさふらふやらん。かへす〳〵おほつかなくさふらふ。慈信坊のくたりて。わかきゝたる法文こそ。まことにイはあれ。ひころの念佛はみないたつらことなりとさふらへはとて。おほふの中太郎の

かのひとをにくまずして念佛をひと〱まふしてたすけんとおもひあはせたまへとこそ。おほえさふらへ。あなかしこ〱。

九月二日　親鸞

慈信坊御返事

入信坊。眞淨坊。法信坊にも。このふみをよみきかせたまふへし。かへす〱不便のこと。さふらふ。性信坊には。春のほりてさふらひしに。よく〱まふしてさふらふ。くけとのにもよく〱よろこひまふしたまふへし。このひと〱のひかことをまふしあふてさふらへはとて。道理をはうしなはれさふらはんとこそおほえさふらへ。世間のことにも。さることのさふらふそかし。領家地頭名主のひかことすれはとて。百姓をまとはすことはさふらはぬそかし。佛法をはやふるひとなし。佛法者のやふるにたとへたる

かふすへきやうにまふされさふらふこそ。信願坊かまふしやうとは
こゝろえすさふらふ。往生にさはりなけれはとて。ひかことをこの
むへしとはまふしたることさふらはす。かへす〱こゝろえすおほ
えさふらふ。詮するところ。ひかことまふさんひとは。その身ひと
りこそともかくもなりさふらはめ。すへてよろつの念佛者のさまた
けとなるへしとはおほえすさふらふ。また念佛をとゝめんひとは。
そのひとはかりこそいかにもなりさふらはめ。よろつの念佛するひ
とを。（の一本）とかとなるへしとはおほえすさふらふ。五濁增時多疑謗。道
俗相嫌不用聞。見有修行起瞋毒。方便破壞競生怨と。まのあたり善
導の御（おんを一本）おしへさふらふそかし。釋迦如來は。名無眼人。名無耳人と。
とかせたまひてさふらふそかし。かやうなるひとにて念佛をもとゝ
め。念佛者をもにくみなんとすることにてもさふらふらん。それは

す〳〵不便のことなり。わるき身なれはとて。ことさらにひかことをこのみて。師のため。善知識のためにあしきことを沙汰し。念佛のひと〳〵のために。とかとなるへきことをしらすは。佛恩をしらす。よく〳〵はからひたまふへし。またものにくるふて死せんひと〳〵のことをもちて。信願坊かことをよしあしとまふすへきにはあらす。念佛するひとの死にやうも。身より病をするひとは。往生のやうをまふすへからす。こゝろより病をするひとは天魔ともなり。地獄にもおつることにてさふらふへし。こゝろよりおこる病と。身よりおこる病とはかはるへけれは。こゝろよりおこりて死ぬるひとのことを。よく〳〵御はからひさふらふへし。信願坊かまふすやうは。凡夫のならひなれは。わるきこそ本なれはとて。おもふましきことをこのみ。身にもすましきことをし。口にもいふましきことを

ぶらふゆへ。あるへくもなきことともきこへさふらふ。まふすはかりなくさふらふ。たゝし念佛のひと。ひかことをまふしさふらはゝその身ひとりこそ地獄にもおち。天魔ともなりさふらはめ。よろつの念佛者のとかになるへしと。おほゑすさふらふ。よく〳〵御はからひともさふらふへし。なを〳〵念佛せさせたまふひと〳〵よくよくこの文を御覧しとかせたまふへし。あなかしこ〳〵。

九月二日　　親鸞

念佛之人々御中

一文かきてまいらせさふらふ。このふみをひと〳〵にもよみてきかせたまふへし。遠江の尼御前の御こゝろにいれて。沙汰さふらふらん。かへす〳〵めてたくあはれにおほえさふらふ。よく〳〵京よりよろこひまふすよしをまふしたまふへし。信願坊かまふすやうかへ

しわるきものゝためなりとて。ことさらにひかことをこゝろにもおもひ。身にも口にもまふすへしとは。浄土宗にまふすことならねは。ひと〱にもかたることさふらはす。おほかたは。煩悩具足の身にてこゝろをもとゝめかたくさふらひなから。往生をうたかはすせんとおほしめすへしとこそ。師も善知識もまふすことにてさふらふに。かゝるわるき身なれは。ひかことをことさらにこのみて。念佛のひと〱のさはりとなり。師のためにも。善知識のためにも。とかとなさせたまふへしとまふすことはゆめ〱なきことなり。彌陀の御ちかひにまうあひかたくして。あひまいらせて。佛恩を報しまいらせんとこそおほしめすへきに。念佛をとゝめらるゝことに。沙汰しなされてさふらふらんこそ。かへす〱こゝろえすさふらふ。あさましきことにさふらふ。ひと〱のひかさまに。御こゝろえとものさ

く〱やうあるへきことなり。そのゆへは。釋迦如來のみことには。念佛するひとをそしるものをは。名無眼人とゝき。名無耳人とおほせをかれたることにさふらふ。善導和尙は。五濁增時多疑謗。道俗相嫌不用聞。見有修行起瞋毒。方便破壞競生怨とたしかに釋しをかせたまひたり。この世のならひにて。念佛をさまたけん人は。そのところの領家地頭名主(ぬし一本)のやうあることにてこそさふらはめ。とかくまふすへきにあらす。念佛せんひと〱は。かのさまたけをなさんひとをはあはれみをなし。不便におもふて。念佛をもねんころにまふして。さまたけなさんをたすけさせたまふへしとこそ。ふるきひとはまふされさふらひしか。よく〱御たつねあるへきことなり。つきに念佛せさせたまふひと〱の(こと一本)。彌陀の御ちかひは。煩惱具足の〔已下五行一本によりて加〕ひとのためなりと信せられさふらふはめてたきやうなり。たゝ

あひだ。諸佛菩薩の御すゝめによりて。いままうあひかたき彌陀の御ちかひにあひまいらせてさふらふ御恩をしらすして。よろつの佛菩薩をあたにまふさんは。ふかき御恩をしらすさふらふへし。佛法をふかく信するひとをは。天地におはしますよろつの神は。かけのかたちにそへるかことくして。まもらせたまふことにてさふらへは。念佛を信したる身にて。天地の神をすてまふさんとおもふこと。ゆめ〳〵なきことなり。神祇等たにもすてられたまはす。いかにいはんや。よろつの佛菩薩をあたにもまふし。をろかにおもひまいらせさふらふへしや。よろつの佛をゝろかにまふさは。念佛信せす。彌陀の御名をとなへぬ身にてこそさふらはんすれ。詮するところは。そらことをまふし。ひかことをことにそれ〔上一本〕て。。念佛〔念佛のひと〳〵におほせられつけて一本〕をとゝめんとするところの領家地頭名主の。御はからひとも。〔の一本〕さふらふらんこと。よ

なをく一念のほかにあまるところの御念佛ぞ。法界衆生に廻向すとさぶらふは。釋迦彌陀如來の御恩を報じまいらせんとて。十方衆生に廻向せられさぶらふらんは。さあるべくさふらへとも。二念三念まふして往生せんひとを。ひかことゝはさふらふへからす。よく〳〵唯信鈔を御覽さふらふべし。念佛往生の御ちかひなれは。一念十念も往生はひかことにあらすとおほしめすべきなり。あなかしこ〳〵

十二月廿六日　親鸞

敎忍御坊御返事

一まつよろつの佛菩薩をかろしめまいらせ。よろつの神祇冥道をあなつりすてたてまつるとまふす。このことゆめ〳〵なきことなり。世々生々に。無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて。よろつの善を修行せしかども。自力にては生死をいてすありしゆへに。曠劫多生の

ゆめ〳〵もちゐさせたまふへからすさふらふ。聖道にまふすことを。あしさまにきゝなして。浄土宗にまふすにてそさふらふらん。さら〳〵ゆめ〳〵もちゐさせたまふまじくさふらふ。また慶喜とまふしさふらふことは。他力の信心をえて。往生を一定してむすとよろこふこゝろをまふすなり。常陸國中の念佛者のなかに。有念無念の佛念沙汰のきこへさふらふは。ひかことにさふらふとまふしさふらひにき。たゞ詮するところは。他力のやうは。行者のはからひにてはあらすさふらへは。有念にあらす。無念にあらすとまふすことを。あしうきゝなして。有念無念なんとまふしさふらひけるとおほえさふらふ。彌陀の選擇本願は。行者のはからひのさふらはねはこそ。ひとへに他力とはまふすことにてさふらへ。一念こそよけれ。多念こそよけれなんとまふすことも。ゆめ〳〵あるへからすさふらふ。

さふらふへし。一念のほかに。あまるところの念佛は。十方の衆生に廻向すへしとさふらふも。さ〔一本無〕あるへきことにてさふらふへし。十方の衆生に廻向すれはとて。二念三念せんは往生にあしきことゝおほしめされさふらはゝ。ひかことにてさふらふへし。念佛往生の本願とこそおほせられてさふらへは。おほくまふさんも。一念一稱も往生すへしとこそうけたまはりてさふらへ。かならす一念はかりにて往生すといひて。多念をせんは往生すましきとまふすことは。ゆめ〳〵あるましきことなり。唯信鈔をよく〳〵御覽さふらふへし。また有念無念とまふすことは。他力の法門にはあらぬことにてさふらふ。聖道門にまふすことにてさふらふなり。みな自力聖道の法文なり。阿彌陀如來の選擇本願〔念佛一本〕。は。有念の義にもあらす。無念の義にもあらすとまふしさふらふなり。いかなる人まふしさふらふとも。

おほえさふらふ。あなかしこ〳〵。

七月九日　　親鸞

性信御坊

一　護念坊のたよりに教忍御坊より。銭二百文御こゝろさしのものたまはりてさふらふ。さきに念佛のすゝめのもの。かた〳〵の御なかまりとて。たしかにたまはりてさふらひき。人々によろこひまふさせたまふへくさふらふ。この御返事にて。おなし御こゝろにまふさせたまふへくさふらふ。さてはこの御たつねさふらふことは。まことによき御うたかひともにてさふらふへし。まつ一念にて往生の業因はたれりとまふしさふらふは。まことにさるへきことにてさふらふへし。されはとて。一念のほかに念佛をまふすましきことにはさふらはす。そのやうは。唯信鈔にくはしくさふらふ。よく〳〵御覧

ところは。御身にかきらす。念佛まふさん人々は。わか御身の料は。おほしめさすとも。朝家の御ため。國民のために。念佛をまふしあはせたまひさふらはゝ。めてたふさふらふへし。往生を不定におほしめさん人〔一本無〕は。まつわか身の往生をおほしめして。御念佛さふらふへし。わか御身の往生一定とおほしめさん人は。佛の御恩をおほしめさんに。御報恩のために。御念佛こゝろにいれてまふして。世のなか安穏なれ。佛法ひろまれと。おほしめすへしとそおほえさふらふ。〔已下六十一字一本によりて加〕よく〳〵御案さふらふへし。このほかは別の御はからひあるへしとはおほえすさふらふ。なを〳〵。とく御くたりのさふらふこそうれしふさふらへ。」よく〳〵御こゝろにいれて。往生一定とおもひさためられさふらひなは。佛の御恩をおほしめさんには。こと事はさふらふへからす。御念佛をこゝろにいれて。まふさせたまふへしと

ものやう／＼にまふされさふらひしことなり。こともあたらしきうたへにてさふらふなり。性信坊ひとりの沙汰のあるへきことにはあらす。念佛まふさんひとは。みなおなしこゝろ。御沙汰あるへきことなり。御身をわらひまふすへきことにはあらすさふらふへし。念佛者のものにこゝろえぬは。性信坊のとかにまふしなさ。んはっさはまれるひかことにさふらふへし。念佛まふさん人は性信坊のかたことにこそなりあはせたまふへけれ。母姉妹なんと。やうにまふさるゝことは。ふることにてさふらふ。されはとて念佛をとゝめられさふらひしか。よにくせことのをこりさふらひしかは。それにつけても念佛をふかくたのみて。よくいのりにこゝろにいれてまふしあはせたまふへしとそおほえさふらふ。御文のやう。おほかたの陳狀。よく御はからひともさふらひけり。うれしくさふらふ。詮しさふらふ

ろをよく〳〵をおせらるへし。一念多念のあらそひなんとのやうに。詮なきことと論しことをのみまふしあはれてさふらふそかし。よく〳〵つゝしむへきことなり。あなかしこ〳〵。かやうのことをこゝろえぬ人々は。そのことゝなきことをまふしあはれてさふらふ。。よく〳〵つゝしみたまふへし。かへす〳〵。

二月三日　　親鸞

一六月一日の御文。くわしくみさふらひぬ。さては鎌倉にての御うたへのやうは。をろ〳〵うけたまはりてさふらふ。この御文にたかはす。うけたまはりてさふらひしに。別のことはよもさふらはしとおもひさふらひしに。御くたりうれしくさふらふ。をほかたは。このうたへのやうは。御身ひとりのことにはあらすさふらふ。すへて浄土の念佛者のことなり。このやうは。故聖人の御とき。この身と

親鸞聖人御消息集

一なにごとよりは。如來の御本願のひろまらせたまひてさふらふこと。かへす〲めでたくうれしくさふらふ。そのことにをの〲ところ〲に。われはといふことをおもふて。あらそふことゆめ〲あるへからすさふらふ。京にも。一念多念なんとまふすあらそふことのおほくさふらふやうにあること。さら〲さふらふへからす。たゝ詮するところは。唯信鈔。後世物語。自力他力。この御文ともをよく〲つねにみて。その御こゝろにたかへすおはしますへし。いつかたの人々にも。このこゝろをおほせられさふらふへし。なをおぼつかなきことあらは。今日まで（また便にもおほせたまふへし一本）いきてさふらへは。わさともこれへたつねたまふへし。。鹿島行方そのならひの人々にも。このこゝ

御消息集

袷云恰不測不期爾者兩師定垂納受者小質宜協知見歟而已時也晦日右
毫粗述卑懷耳

釋從覺

今建武五歲戊寅夷則三日於西山草扃馳筆畢先年書寫安置之本宿坊炎上
之時忽成灰燼之間借渡二轉之本重奉書寫之者也矣

沙門慈俊 四十四

本云凡斯御消息者。念佛成佛之咽喉。愚癡愚迷之眼目也。可祕々々而已。　慈俊春秋四十四

于時文安四年丁卯二月晦日　奉書寫訖

右筆蓮如

本云正慶第二歳（已下又一本によりて加）癸酉卯月廿五日鴨河之西鳳闕之畔暫時旅所之間敬終書功寫本者撰取日來安置之三四本聚得當時拜見之一二帖訖而於年號前後不同至日付錯亂參差仍糺歳月日時之相違守鈎索鑠鈴次第勘之編之部類章廿二通筆跡限六八丁短慮尙多所貽皺有恐々々有憚々々抑斯御消息者念佛成佛之咽喉也專開諸門超勝之直路愚癡愚迷之眼目也非指餘流難思之要津乎弟子染彼佛意於心底倍懼自力修行之嶮難焉挑此聖應於掌中特歸他力往生之威德矣悲喜相交侵感涙最叵抑者也爰又當黑谷祖師之御緣日忽遂筆硯之漸寫迎當所聖人之御佛事聊致講讃之儀則云

迴向の願を信し。ふたこゝろなきを眞實の信心とまふす。この眞實の信心のおこることは。釋迦彌陀の二尊の御はからひより。おこりたりとしらせたまふへし。穴賢々々。

寳號經にのたまはく。彌陀の本願は。行にあらす善にあらす。たゝ佛名をたもつなり。名號はこれ善なり。行なり。行といふは。善をするについていふことはなり。本願はもとより。佛の御約束とこゝろえぬるには。善にあらす。行にあらさるなり。かるかゆへに他力と。（は一本）まふすなり。本願の名號は。能生する因なり。能生の因といふは。すなはちこれ父なり。大悲の光明は。これ所生の縁なり。所生の縁といふは。すなはちこれ（又一本無）母なり。

末燈鈔（三字一本無）

しり。善知識をあなつりなんとすることは候はしとこそおほえ候へ。この文をも。て。かしまなめかたの南の莊。いつかた。もこれにてころさしおはしまさん人には。おなし御こゝろによみきかせたまふへく候。穴賢々々。

建長四年〔壬子八月十九日親鸞集 又一本無〕二月廿四日

安樂淨土にいりはつれは。すなはち大涅槃をさとるとも。また無上覺をさとるとも。滅度にいたるともまふせは。御名こそかはりたるやうなれとも。これみな法身と申佛のさとりをひらくへき正因に。彌陀佛の御ちかひを。法藏菩薩われらに迴向したまへるを。往相の迴向とまふすなり。この迴向せさせたまへる願を。念佛往生の願とは申なり。この念佛往生の願を。一向に信してふたこゝろなきを。一向專修とは申なり。如來二種の迴向とまふすことは。この二種の

ひとなり。なれむつふへからす。「淨土論と中文には。かやうの人は。」

佛法信するこゝろのなきより。このこゝろはおこるなりと候めり。

また至誠心のなかには。かやうに惡をこのまん。には。つゝしみてとをさかれ。ちかつく「へからすとこそと」かれて候へ。善知識同行には。したしみちかつけとこそときをかれて候へ。惡をこのむ人にも。ちかつきなんとすることは。淨土にまいりてのち。衆生利益にかへりてこそ。さやうの罪人にもしたしみちかつくことは候へ。それもわかはからひにはあらす。彌陀のちかひによりて。御たすけに。てこそ。おもふさまのふるまひも候はんすれ。當時はこの身とものやうにては。いかゝ候へかるらんとおほえ候。よく／＼案せさせたまふへくさふらふ。往生の金剛心のおこることは。佛の御はからひ。よりおこりて候へは。金剛心をとりて候はん人は。よも師をそ

ふ人にてそ。煩惱具足したる身なれは。わかこゝろの善惡をはさたせすむかへたまふそとは申候へ。かくきゝてのち佛を信せんとおもふこゝろふかくなりぬるには。まことにこの身をもいとひ。流轉せんことをもかなしみて。ふかくちかひをも信し。阿彌陀佛をもこのみまふしなんとする人は。もともこゝろのまゝにて。惡事をもふるまひなんとせんと。おほしめしあはせたまはゝこそ。世をいとふしるしにても候はめ。また往生の信心は。釋迦彌陀の御すゝめによりて。おこるとこそみえて候へは。さりともまことのこゝろおこらせたまひなんには。いかゝむかしの御こゝろのまゝにては候へき。この御中の人々も。少々はあしきさまなることのきこえ候めり。師をそしり善知識をかろしめ。同行をもあなつりなんとしあはせたまふよし。きゝ候こそあさましく候へ。すてに謗法のひとなり。五逆の

になを。毒をすゝめられ候らんこそ。あさましく。候へ。煩惱具足の身なればとて。こゝろに。まかせてみにもすましきことをもゆるし。くちにもいふましきことをもゆるし。こゝろにもおもふましきことをもゆるして。いかにもこゝろのまゝにてあるへしと。まふしあふて候らんこそ。返々不便におほえ候へ。ゑひもさめぬさきになを酒をすゝめ。毒もきゑやらぬにいよ／＼毒をすゝめんかことし。くすりあり毒をこのめと。候らんことは。あるへくもさふらはすとこそおほえ候。佛の御名をもきゝ。念佛を申してひさしくなりておはしまさん人々は。後世のあしきことを「いとふしるし。この身のあしきことを」はいとひすてんとおほしめすしるしも候へしとこそおほえ候へ。はしめて佛のちかひをきゝはしむる人々の。わか身のわろくこゝろのわろきをおもひしりて。この身のやうにてはなんそ往生せんするとい

はしますひと〳〵は。往生にさはりなしとはかりいふをきゝて。あしさまに御こゝろえあることおほく候き。いまもさこそ候らめとおほえ候。淨土の敎もしらぬ信見房なとか申ことによりて。ひかさまにいよ〳〵なりあはせたまひ候らんをきゝ候こそあさましく候へ。まつをの〳〵の昔は。彌陀のちかひをもしらす。阿彌陀佛をもまふさすおはしまし候しか。釋迦彌陀の御方便にもよほされて。いま彌陀のちかひを。きゝはしめておはします身にて候なり。もとは無明の酒にゑひ。て。貪欲瞋恚愚癡の三毒をのみこのみめしあふて候つるに。佛の。ちかひをききはしめしより。無明の醉もやう〳〵すこしつゝさめ。三毒をもすこしつゝこのますして。阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候そかし。しかるになを。ゑひもさめやらぬに。かさねて醉をすゝめ。毒もきえやらぬ

し申しつくしかたく候。明法御房の往生のこと。おどろきまふすへきにはあらねとも。返々うれしく候。鹿島なめかたの奥郡。。かやうの往生。ねかはせたまふ人々の。みなの御よろこひにて候。又ひらつかの入道殿の。御往生のことき〻候こそ。返々申にかきりなくおほへ候へ。めてたさ申つくすへくも候はす。をの〳〵みな往生は一定とおほしめすへし。さりなからも。往生をねかはせたまふ人々の御中にも。御こゝろえぬこと。も候き。いまもさ。こそ候ら。めとおほえ候。京にもこゝろえすして。やう〳〵にまとひあふて候めり。國々にもおほくきこえ候。法然聖人の御弟子のなかにも。われはゆゝしき學生な。とゝおもひあひたる人々も。この世にはみなやう〳〵に法文をいひかへて。身もまとひ人をもまとはして。わつらひあふて候めり。聖教のをしへをも。みすしらぬをの〳〵のやうにお

ものをは謗法のものと申なり。親をそしるものをは五逆のものと申なり。同座。せされと候なり。されは北の郡に候し善乗房は。親をのり善信をやう〱にそしり候しかは。ちかつきむつましくおもひ候はて。ちかつけす候き。明法御房の往生のことをきゝながら。。あとをおろかに。せん人々は。その同朋にあらす候へし。無明の酒に酔たる人に。いよ〱ゑひをすゝめ。三毒をひさしくこのみくらふ人に。いよ〱毒をゆるして。このめと申しあふて候らん。不便のことに候。無明の酒に酔たることをかなしみ。三毒をこのみくふていまた毒もうせはてす。無明のゑひもいまたさめやらぬにおはしましあふて候そかし。よく〱御こゝろゑ。候へし。。「方々よりの御こゝろさしの物とも。かすのまゝにたしかにたまはり。候明教房ののほられて候こと。。ありかたきことに候かた〱の御こゝろさ

さましきこゝにて候なり。京にもおほくまとひあふて候めり。○田舎はさこそ候らめとこゝろにくゝも候はす。なにごとも申しつくしかたく候。又々申候へし。」この明教房ののほられて候。ことまことにありかたきことゝおほえ候。明法御房の御往生のことを。まのあたり○きゝ候もうれしく候。○人々の御こゝろさしもありかたくおほえ候。かた〳〵この人々ののほり不○思議のことに候。この文をたれ〳〵にもおなし○こゝろによみきかせたまふへく候。このふみは奥郡におはします同朋の御中に〔みなおなしく」御覧候へし。穴賢々々。年比念佛して。往生をねかふしるしには。もとあしかりしわかこゝろをもおもひかへして。とも同朋にもねんころにこゝろのおはしましあはゝこそ。世をいとふしるしにても候はめとこそおほえ候へ。よく〳〵御こゝろえ候へし」。善知識ををろかにおもひ。師をそしる

しもなく。佛の御ちかひにもこゝろさしのおはしまさぬにて候へは。念佛せさせたまふ。ともその御こゝろさしにては。順次の往生もかたくや候へからん。よく／＼このよしを人々にきかせまいらせさせたまふへく候。かやうにも申へくも候はねとも。なにとなくこの邊のことを。御こゝろにかけあはせたまふ人々にておはしましあひて候へは。かく。も申し候なり。この世の念佛の義は。やう／＼にかはりあふて候ひぬれは。とかく申に。およはす候へとも。故聖人の御をしへをよく／＼うけたまはりておはします人々は。いまももとのやうに。はからせたまふこと候はす。世かくれなきことなれは。きかせたまひあふて候らん。浄土宗の義みなかはりておはしましあふて候人々も。。聖人の御弟子にて候へとも。やう／＼に義をもいひかへな。として。身もまとひ人をもまとはかしあふて候めり。あ

かゝるふさまなることをのみ申あはれて候。人々もさふらひき。いまもさ。そ候らんとおほえ候。明法房な。との往生しておはしますも。もとは不可思議のひかことをおもひなんとしたるこゝろをも。ひるかへしなんとしてこそ候しか。われ往生すへけれはとて。すましきことをもし。おもふましきことをもおもひ。いふましきことをも」いひなとすることはあるへくも候はす。貪欲の煩惱にくるはされて欲もおこり。瞋恚の煩惱にくるはされて。ねたむへくもなき因果を。。やふるこゝろもおこり。愚癡の煩惱にまとはされて。おもふましきことな。ともおこることにてこそ候へ。めてたき佛の御ちかひのあれはとて。わさとすましきことともをもし。おもふましきことともをもおもひなんとせんは。よく〳〵この世のいとはしからす。身のわろきことを。おもひしらぬにて候へは。念佛にこゝろさ

智者もはからふへきことにも候はす。大小の聖人たにも。ともかくもはからはて。たゝ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ。ましてをの〳〵のやうにおはします人々は。たゝこのちかひありときゝ。南無阿彌陀佛にあひまいらせたまふこそ。ありかたくめてたくさふらふ。御果報にては候なれ。とかくはからはせたまふこと。ゆめ〳〵候へからす。さきに下しまいらせ候ひし。唯信鈔。自力他力なんとの文。にて御覽候へし。それこそこの世にとりては。よき人々にて。おはします。すてに往生をもしておはします人々にて候へは。その文ともにかゝれて候には。なにことも〳〵すく〳〵も候はす。法然聖人の御をしへを。よく〳〵御こゝろえたる人々にておはしますに候き。されはこそ。往生もめてたくしておはし。候へ。おほかたは。年比念佛まふしあひたまふ人々のなかにも。ひとへにわ

願の利益にて候うへに。攝取してすてすと候へは。來迎臨終を期せさせたまふへからすとこそおほえ候へ。いまた信心さたまらぬ人は。臨終をも期し。來迎をもまたせたまふへし。この御文主の御名は。隨信房とおほせられ候はゝ。めてたくさふらふへし。この御ふみのかきやうめてたく候。御同行のおほせられやうは。こゝろえす候。それをはちからおよはす候。あなかしこ〳〵。

十一月廿六日　親鸞

隨信御房

御文度々まいらせ候き。御覽せすや候ひけん。何事よりも明法の御房の往生の本意。とけておはしまし候こそ。常陸國うちの。〔已下十六字某無〕これにこゝろさしおはします人々の御ためにめてたきことにて候へ。往生はともかくも凡夫のはからひにてすへきことにても候はす。めてたき

られまいらせさるゆへに。金剛心になるときを。正定聚のくらゐに住すともまふす。彌勒菩薩とおなしくらゐになるともとかれて候めり。彌勒とひとつくらゐになるゆへに。信心まことなる人をは。佛とひとしともまふす。また諸佛の眞實信心をえてよろこふをは。まことによろこひて。われとひとしきものなりとゝかせたまひて候なり。大經には。釋尊のみことには。○見敬得大慶。則我善親友とよろこはせたまひ候へは。信心をえたる人は。諸佛とひとしとゝかれて候めり。また彌勒をはすてに佛にならせたまはんと。あるへきにならせたまひて候へはとて。彌勒佛とまふすなり。しかれはすてに他力の信をえたるひとをも。佛とひとしとまふすへしとみえたり。御うたかひあるへからす候。御同行の臨終を期してとおほせられ候らんは。ちからおよはぬことなり。信心まことにならせたまひて候人は。誓

あなかしこ〱。

十一月廿四日　親鸞

他力のなかには。自力とまふすことはさふらふとき〱候ひき。他力のなかに。また他力とまふすことはき〱候はす。他力のなかに。自力とまふすことは。雑行雑修定心念佛。をこゝろ。かけられて候人々は。他力のなかの自力のひと〱なり。他力のなかにまた他力とまふすことはうけたまはり候はす。なにごとも専信房のしはらくもゐたらんと候へは。そのとき申候へし。穴賢々々。

銭貳拾貫文慥給候。穴賢々々。

十一月廿五日　親鸞

御たつね候ことは。彌陀他力の廻向の誓願にあひたてまつりて。眞實の信心をたまはりて。よろこふ心のさたまるとき。攝取してすて

さとすましきことをもせは。返々あるましきことなり。鹿島なめかたの人々の。あしからんことをもいひ。とゝめ。その邊の人々のことにひかみたることをは制したまはゝこそ。この邊より出來しるしにては候はめ。ふるまひはなに。ともこゝろにまかせよといひつると候らん。あさましきことに候。この世のわろきをもすて。あさましきことをもせさらんこそ。世をいとひ念佛まふすことにては候へ。としころ念佛○する人なんとの。人のためにあしきことをもし。またいひもせ○は。世をいとふしるしもなし。されは善導の御をしへには。惡をこのむ人をはつゝしんてとをさかれとこそ。至誠心のなかにはをしへおかせおはしまして候へ。いつか○わかこゝろのわろきにまかせて。ふるまへとは候。おほかた○經釋○をもしらす。如來の御ことをもしらぬ身に。○ゆめ／＼その沙汰あるへくも候はす。

ふさまにふるまふへしと。おほせられ候なるこそ。かへす〳〵あるへくも候はす。北の郡にありし善乗房といひしものに。つゐにあひむつるゝこともなくてやみにしをはみさりけるにや。凡夫なれはとてなにこともおもふさまならは。ぬすみをもし。人をもころしなんとすへきかは。もとぬすみこゝろあらん人も。極楽をねかひ念佛をまふすほとのことになりなは。もとひかうたるこゝろをも。おもひなをしてこそあるへきに。そのしるしもなからん人々に。悪くるしからすといふことゝ。ゆめ〳〵あるへからす候。煩悩にくるはされて。おもはさるほかに。すましき「ことをも」ふるまひ。いふましきことをもいひ。おもふましきことをもおもふにてこそあれ。さはらぬことなれはとて。ひとのためにもはらわろく。すましきことをもし。いふましきことをもいはゝ。煩悩にくるはされたる儀にはあらて。わ

信御房にとひまいらさせたまふへ「くさふらふ」。穴賢々々。

十月廿七日　親鸞

南無阿彌陀佛をとなへてのうへに。無碍光如來をまふすはあしきことなりと候なることそ。きはまれるひかことゝきこえ候へ。歸命は南無なり。無碍光佛は光明なり。智慧なり。この智慧はすなはち阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の御かたちをしらせたまはねは。その御かたちをたしかに／＼しらせまいらせんとて。世親菩薩御ちからをつくしてあらはしたまへるなり。このほかのことは。少々文字をなをしてまいらせさふらふなり。

慶信御房御返事　親鸞

なによりも聖教のをしへをもしらす。また淨土宗のまことのそこをもしらすして。不可思議の放逸無慚のものとものなかに。惡はおも

えたるひとは。すてに佛になりたまふへき御身となりておはします
ゆへに。如來とひとしき人と經にとかれて候なり。彌勒はいまた佛
になりたまはねとも。このたひかならす佛になりたまふへきにより
て。彌勒をはすてに彌勒佛と申候なり。その定に眞實信心をえたる
ひとをは如來とひとしとおほせられて候なり。又乘信房の彌勒とひ
としと候も。ひかことにては候はねとも。他力によりて信をえてよ
ろこふ心は。如來とひとしと候を。自力なりと候らんは。いますこ
し乘信房の御こゝろのそこの。ゆきつかぬやうにきゝ候こそ。よく
。御案あるへくや候らん。自力のこゝろにて。わか身は如來とひと
しと候はんは。まことにあしく候へし。他力の信心のゆへに。淨信
房のよろこはせたまひ候らんは。なにかは自力にて候へき。よくよ
く御はからひ候へし。このやうは。この人々にくはしく申。候。乘

てもまかりのほりて。こゝろしつかに。せめては五日御所にさふらはゞやと。ねかひ候なり。噫かうまて申候も御恩のちからなり。

進上聖人の御所へ蓮位の御房申せ給へ。

十月十日　　慶信　上（在判）

又一本　私云慶信高田仁云

追申上候

念佛申候人々のなかに。南無阿彌陀佛ととなへ候ひまには。無碍光如來ととなへまいらせさふらふ人も候。これをきゝてあるひとの申し候ふなる。南無阿彌陀佛ととなへてのうへに。歸命盡十方無碍光如來ととなへまいらせ候ことは。おそれあることにてこそあれ。いまめかはしくと申しさふらふなる。このやういかゝさふらふへき。

たつねおぼせられて候事。かへす〳〵めてたく候。まことの信心を

願意をさとり。直道をもとめえて。まさしき眞實報土にいたり候はんこと。このたひ一念聞名にいたるまて。うれしさ御恩のいたりに候。そのうへ。彌陀經義集に。おろ〳〵あきらかにおほせられ候。しかるに世間の忩々にまきれて。一時もしは二時三時おこたるといへとも。晝夜にわすれす。御あはれみをよろこふ業力はかりにて。行住座臥に。時處の不淨をもきらはす。一向に金剛の信心はかりにて。佛恩のふかさ。師主の恩德のうれしさ。報謝のために。たゝ御名をとなふるはかりにて。日の所作とす。このやうひかさまにや候らん。一期の大事たゝこれにすきたるはなし。しかるへくはよくよくこまかにおほせをかうふり候はんとて。わつかにおもふはかりを記して申上候。さては京にひさしく候しに。そう〳〵にのみ候ひて。こゝろしつかにおほえす候しことのなけかれ候ひて。わさといかにも

なはち如來なりとおほせられて候やらん。これは十一二三の御ちかひとこゝろえられ候。罪惡のわれらかためにおこしたまへる大悲の御ちかひの。めてたくあはれみましますうれしさ。こゝろもおよはれす。ことはもたえて。申しつくしかたきことかきりなく候。無始曠劫よりこのかた。過去遠々に恒沙の諸佛の出世のみもとにて。大菩提心をおこすといへとも。自力かなはて二尊の御方便にもよほされまいらせて。雜行雜修自力疑心のおもひなし。無碍光如來の攝取不捨の御あはれみのゆへに。疑心なくよろこひまいらせて。一念にて往生さたまりて。誓願不思議とこゝろえ候ひなんには。きゝみ候にあかぬ淨土の聖教も。知識にあひまいらせんとおもはんことも。攝取不捨も信も念佛も。人のためとおほえられす候。いま師主の御をしへのゆへ。こゝろをぬきて。御こゝろむきをうかゝひ候によりて。

畏申候

大無量壽經に信心歡喜と候。華嚴經をひきて。淨土和讃にも。信心よろこふそのひとを。如來とひとしとときたまふ。大信心は佛性なり。佛性すなはち如來なりとおほせられて候に。專修の人のなかにあるひとのこゝろえちかへて候やらん。信心よろこふ人を如來とひとしと。同行達のゝたまふは自力なり。眞言にかたよりたりと申候なるは。人のうへをしるへきに候はねとも申候。また眞實信心うるひとは。すなはち定聚のかすにいる。不退のくらゐにいりぬれは。かならす滅度をさとらしむと候。滅度をさとらしむと候は。このたひこの身のおはり候はんとき。眞實信心の行者の心。報土にいたり候ひなは。壽命無量の體として。光明無量の德用はなれたまはされは。如來の心光に一味なり。このゆへに大信心は佛性なり。佛性す

とは。釋迦彌陀の御はからひとみえて候は。往生の心にうたかひなくなり候は。攝取せられまいらせたるゆへとみえて候。攝取のうへには。ともかくも行者のはからひあるへからす候。淨土へ往生するまては。不退のくらゐにておはしまし候へは。正定聚のくらゐとなつけておはしますことにて候なり。まことの信心をは釋迦如來彌陀如來二尊の御はからひにて。發起せしめたまひ候とみえて候へは。信心のさたまるとまふすは。攝取にあつかるときにて候なり。そののちは。正定聚のくらゐにて。まことに淨土へむまるゝまては候へしとみえ候なり。ともかくも行者のはからひ。ちりはかりもあるへからず候へはこそ。他力とまふす事にて候へ。あなかしこ〳〵。

十月六日　　親鸞御判

眞佛御房　御返事

他力本願を信せさらんは。邊地にむまるへし。本願他力をふかく信せんともからは。なにことにかは邊地の往生にて候へき。このやうをよく／＼御こゝろえ候て。御念佛候へし。この身はいまはとしきはまりて候へは。さためてさきたちて。往生し候はんすれは。淨土にてかならす／＼まちまいらせ候へし。あなかしこ／＼。

七月十三日　親鸞

有阿彌陀佛　御返事

攝取不捨事　五字又一本無

たつねおほせられて候攝取不捨のことは。般舟三昧行道往生讃と申と。おほせられてさふらふをみまいらせ候へは。釋迦如來彌陀佛。われらか慈悲の父母にて。さま／＼の方便にて。われらか無上の信心をは。ひらきおこさせたまふと候へは。まことの信心のさたまるこ

なしとおほしめすへし。これみな彌陀の御ちかひと申ことをこゝろうへし。行と信とは御ちかひを申なり。穴賢々々。〈一本下別行〉いのち候はゝかならす。〈集〉のほらせたまふへし。〈集〉

五月廿六日　　親鸞

尋仰られ候〈又一本無さふらふ〉念佛の不審の事。念佛往生と信する人は。邊地の往生とてきらはれ候らんこと。おほかたこゝろえかたく候。そのゆへは彌陀の本願とまふすは。名號をとなへんものをは。極樂へむかへんとちかはせたまひたるを。ふかく信してとなふるかめでたきことにて候なり。信心ありとも名號をとなへさらんは詮なく候。〈又一本〉一向名號〈又一本無〉をとなふとも。信心あさくは往生しかたく候。されは念佛往生とふかく信して。しかも名號をとなへんするは。うたかひなき報土の往生にてあるへく候なり。詮するところ。名號をとなふといふとも。

浄信御房へ

他力と申しさふらふは。とかくのはからひなきをまふしさふらふなり

袖書云

四月七日の御ふみ。五月廿六日。たしかに○見さふらひぬ。さてはおほせられたること。信の一念行の一念ふたつなれとも。信をはなれたる行もなし。行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆへは行と申は。本願の名號を一聲となへて。往生すと申ことをきゝて。ひとこゑをもとなへ。もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをきゝて。うたかふこゝろのすこしもなきを。信の一念とまふすなり。信と行と二ときけとも。行をひとこゑするそときゝてうたかはねは。行をはなれたる信はなしときゝて候。また信をはなれたる行

はおほせ候へとも。これみなわたくしの御はからひになりぬとおほえ候。たゝ不思議と信せさせたまひ候ぬるうへは。わつらはしきはからひあるへからす候。

またある人の候なること

出世のこゝろおほく。淨土の業因すくなしと候なるは。こゝろえかたく候。出世と候も。淨土の業因と候も。みなひとつにて候なり。すへてこれなましゐなる御はからひと存候。佛智不思議と信せさせたまひ候なは。別にわつらはしく。とかくの御はからひあるへからす候。たゝ人のとかく申し候はんことをは。御不審あるへからす候。たゝ如來の誓願にまかせまいらせたまふへく候。とかくの御はからひあるへからすさふらふなり。あなかしこ〳〵。

五月五日　親鸞御判

の業には。わたくしのはからひはあるましく候なり。あなかしこ〱。たゞ如來にまかせまいらせおはしますへくさふらふ。あなかしこあなかしこ。

五月五日　　親鸞

敎名御房

端書云一本

このふみをもて。ひと〱にもみせまいらせさせたまふへく候。

他力には義なきを義と。まふしさうらふなり。

佛智不思議と可信事

御ふみくはしくうけたまはり候ぬ。さては御法門の御不審に。一念發起信心のとき。無碍の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに。つねに淨土の業因決定すとおほせられ候。これめてたく候。かくめてたく

なわすれて候うへに。人なとにあきらかに申へき身にてもあらすさふらふ。よく〳〵淨土の學生にとひ申給へし。穴賢〳〵。

閏三月二日　親鸞

誓願名號同一事

御ふみくはしくうけたまはりさふらひぬ。またさてはこの御不審しかるへしともおほえす候。そのゆへは。誓願名號と申てかはりたること候はす。○誓願をはなれたる名號も候はす。名號をはなれたる誓願も候はす候。かく申候もはからひにて候なり。たゝ誓願を不思議と信し。また名號を不思議と一念信しとなへつるうへは。何條わかはからひをいたすへき。きゝわけしりわくるなと。わつらはしくはおほせられさふらふやらん。これみなひかことにて候なり。たゝ不思議と信しつるうへは。とかく御はからひあるへからす候。往生

いふは。一には難行道。二には易行道なり。いまこの淨土宗は易行道なり。二行といふは。一には正行。二には雜行なり。いまこの淨土宗は正行を本とするなり。二超といふは。一には竪超。二には横超なり。いまこの淨土宗は横超なり。竪超は聖道自力なり。二緣といふは。一には無緣。二には有緣なり。いまこの淨土は有緣の敎なり。二住といふは。一には止住。二には不住なり。いまこの淨土の敎は。法滅百歲まで住したまひて。有情を利益したまふとなり。不住は聖道諸善なり。諸善はみな龍宮へかくれいりたまひぬるなり。思不思といふは。思不思議の法は。聖道八萬四千の諸善なり。不思といふは。淨土の敎は不可思議の敎法なり。これらは加樣にしるしまふしたり。よくし。らん人にたつね申たまふへし。またくはしくは。この文にてまふすへくも候はす。目もみえす候。なにこともみ

り。一には佛說。二には聖弟子の說。三には天仙の說。四には鬼神の說。五には變化の說といへり。この五のなかに。佛說をもちゐてかみの四種をたのむへからす候。この三部の經は。釋迦如來の自說にてましますとしるへしとなり。四土といふは。一には法身の土。二には報身の土。三には應身の土。四には化土なり。いまこの安樂淨土は報土なり。三身といふは。一には法身。二には報身。三には應身なり。いまこの彌陀如來は報身如來なり。三寶といふは。一には佛寶。二には法寶。三には僧寶なり。いまこの淨土宗は佛寶なり。四乘といふは。一には佛乘。二には菩薩乘。三には緣覺乘。四には聲聞乘なり。いまこの淨土宗は菩薩乘なり。二敎といふは。一には頓敎。二には漸敎なり。いまこの敎は頓敎なり。二藏といふは。一には菩薩藏。二には聲聞藏なり。いまこの敎は菩薩藏なり。二道と

となる人のこゝろを。十方恒沙の如來のほめたまへは。佛とひとしと。まふすことなり。また他力と申ことは義なきを義とすとまふすなり。義とすとまふすことは。行者のをの〳〵のはからふことを義とは申すなり。如來の誓願は。不可思議にましますゆへに。佛と佛との御はからひなり。凡夫のはからひにあらす。補處の彌勒菩薩をはしめとして。佛智の不思議をはからふへき人は候はす。しかれは如來の誓願には。義なきを義とすとは。大師聖人のおほせに候き。このこゝろのほかに。往生にいるへきことは候はすと。こゝろえてまかりすき候へは。人のおほせことにはいらぬものにてさふらふなり。

二月廿五日　　親鸞

淨信御房御返事　　私云淨信は高田門人云云

また五說といふは。よろつの經をとかれ候にこ五種にはすきす候な

すは。攝取不捨の利益にあつかるゆへに。不退の位にさたまると御こゝろえさふらふへし。眞實信心のさたまると申も。金剛の信心のさたまるとまふすも。攝取不捨のゆへにまふすなり。されはこそ。無上覺にいたるへき心のおこるとまふすなり。これを不退の位ともまふし。正定聚の位にい（た一本）るともまふし。等正覺にいたるともまふすなり。このこゝろのさたまるを。十方諸佛のよろこひて。諸佛の御こゝろにひとしとほめたまふなり。このゆへに。まことの信心の人をは。諸佛とひとしとまふすなり。また補處の彌勒とおなしともまふすなり。この世にて。眞實信心の人をまもらせたまへは（又一本無）こそ。阿彌陀經には。十方恒沙の諸佛護念すとはまふすことにては候へ。安樂淨土へ往生してのちに。まもりたまふとまふすことにては候はす。娑婆世界にい（ゐ又一本）たるほと。護念すとは（又一本無）まふすことなり。信心まこ

信心のさたまらぬ人は。正定聚に住したまはずして。うかれたまひたる人なり。乗信房にかやうに申し候やうを。人々にもまふされ候へし。あなかしこ〳〵。

十字又一本無

文應元年十一月十三日

善信 八十八歳

乗信御房

この御消息の正本は。坂東下野國。おほうちの御荘高田にこれあるなりと云云〳〵。

諸佛等同と云事

往生は。なにことも〳〵凡夫のはからひならす。如來の御ちかひにまかせまいらせたれはこそ。他力にては候らへ。様々にはからひあふて候らん。おかしく候。如來の誓願を信ずる心のさたまるとまふ

こそ。愚癡無智の人もおはりもめてたく候へ。如來の御はからひにて往生するよし。ひと〴〵申され候ける。すこしもたかはす候なり。としころ。をの〳〵に申しさふらひしこと。たかはすこそ候へ。かまへて學匠沙汰せさせたまひさふらはて。往生をとけさせたまひ候へし。故法然聖人は。淨土宗の人は。愚者になりて往生すと候しことを。たしかにうけたまはり候しうへに。ものもおほえぬあさましき人々のまいりたるを御覽しては。往生必定すへしとて。えませたまひしをみまいらせさふらひき。文沙汰して。さか〳〵しきひとのまいりたるをは。往生いかんかあらんすらんと。たしかにうけたまはりき。いまにいたるまて。おもひあはせられ候なり。ひと〴〵にすかされさせたまはて。御信心たちろかせたまはすして。をの〳〵御往生候へきなり。たゝしひとにすかされさせたまひ候はすとも。

ゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには。この自然のことは。つねにさたすへきにはあらさるなり。つねに自然をさたせは。義なきを義とすといふことは。なを義のあるになるへし。これは佛智の不思議にてあるなり。

正嘉二年十二月十四日

愚禿親鸞八十六歳

なによりもこそことし。老少男女おほくの人々。。死にあひて候らんことこそあはれに候へ。たゝし生死無常のことはり。くはしく如來のときをかせおはしまして候へは。おとろきおほしめすへからす候なり。まつ善信か身には。臨終の善惡をはまふさす。信心決定の人はうたかひ。なけれは。正定聚に住することにて候なり。されは

るを法爾といふなり。法爾は。この御ちかひなりけるゆへに。おほよす行者のはからひのなきをもて。この法の徳のゆへに。しからしむといふなり。すべて人のはしめてはからはさるなり。このゆへに義なきを義とすとしるへしとなり。自然といふは。もとよりしからしむ。といふことはなり。彌陀佛の御ちかひの。もとより行者のはからひにあらすして。南無阿彌陀佛とたのませたまひて。むかへんとはからはせたまひたるによりて。行者のよからんともあしからんともおもはぬを。自然とは申そときいてさふらふ。ちかひのやうは。無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすは。かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに。自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには。無上涅槃とは申さす。かたちもましまさぬやうをしらせんとて。はしめて彌陀佛とまふすとそ。き

釋尊のみことには。見敬得大慶。則我善親友とときたまへり。また彌陀の第十七の願には。十方世界。無量諸佛。不悉咨嗟。稱我名者。不取正覺とちかひたまへり。願成就の文には。よろつの佛にほめられよろこひたまふとみえたり。すこしもうたかふへきにあらす。これは如來とひとしといふ文ともあらはししるすなり。

正嘉元年丁巳十月十日　親鸞

眞佛御房

自然法爾事

自然といふは。自はをのつからといふ。行者のはからひにあらす。然といふは。しからしむといふことはなり。しからしむといふは。行者のはからひにあらす。如來のちかひにてあるかゆへに法爾といふ。法爾といふは。この如來の御ちかひなるかゆへに。しからしむ

その心さだまりてあるべきに。ならせたまふによりて。三會のあかつきとまふすなり。淨土眞實のひとも。このこゝろをこゝろうべきなり。光明寺の和尚の般舟讃には。信心のひとは。その心すでにつねに淨土に居すと釋したまへり。居すといふは。淨土に信心のひとのこゝろつねにゐたりといふこゝろなり。これは彌勒とおなじといふことをまふすなり。これは等正覺を彌勒とおなしとまふすによりて。信心のひとは如來とひとしとまふすこゝろなり。

正嘉元年丁巳十月十日　親鸞

性信御房

これは經の文なり。華嚴經に言。信心歡喜者。與諸如來等といふは。信心をよろこふひとは。もろ〳〵の如來とひとしといふなり。もろ〳〵の如來とひとしといふは。信心をえてことによろこふひとを

信心をえたる人は。かならす正定聚のくらゐに住するかゆへに。等正覺の位と申なり。大無量壽經には。攝取不捨の利益にさたまる。を正定聚となつけ。無量壽如來會には。等正覺とときたまへり。その名こそかはりたれとも。正定聚等正覺はひとつこゝろひとつくらゐなり。等正覺とまふすくらゐは。補處の彌勒とおなしくらゐなり。彌勒とおなしく。このたひ無上覺にいたるへきゆへに。彌勒とおなしとときたまへり。さて大經には。次如彌勒とはまふすなり。彌勒はすてに佛にちかくましませは。彌勒佛と諸宗のならひ。はまふすなり。しかれは彌勒におなしくらゐなれは。正定聚の人は如來とひとしとも申なり。淨土の眞實信心の人は。この身こそあさましき不淨造惡の身なれとも。心はすてに如來とひとしけれは。如來とひとしとまふすこともあるへしとしらせたまへ。彌勒。すてに無上覺に

なし。かなしむこゝろをもつへしとこそ。聖人はおほせことありしか。穴かしこ〳〵。佛恩のふかきことは。懈慢邊地に往生し。疑城胎宮に往生するたにも。彌陀の御ちかひのなかに。第十九。第二十の願の御あはれみにてこそ。不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。佛恩のふかきことそのきはもなし。いかにいはんや眞實の報土へ往生して。大涅槃のさとりをひらかんこと。佛恩よく〳〵御案ともさふらふへし。これさらに性信房親鸞かはからひ。まふすにあらす候。ゆめ〳〵。

建長七歳乙卯十月三日

愚禿親鸞八十三歳書之

此御書者。自性信聖之遺跡。以聖人御自筆之本。寫與彼門弟中云云。

のかたちにそへるかことくして。はなれたまはすとあかせり。しかれはこの信心の人を。釋迦如來はわかしたしきともなりとよろこひましまます。この信心の人を眞の佛弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は攝取してすてたまはされは。金剛心をえたる人とまふすなり。この人を上々人とも。好人とも。妙好人とも。最勝人とも。希有人ともまふすなり。この人は正定聚のくらゐにさたまれるなりとしるへし。しかれは彌勒佛とひとしき人とのたまへり。これは眞實信心をえたるゆへに。かならす眞實の報土に往生するなりとしるへし。この信心をうることは。釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるへし。しかれは諸佛の御をしへをそしることなし。餘の善根を行する人をそしることなし。この念佛する人をにくみそしる人をもにくみそしることあるへからす。あはれみを

議の利益きはまりましまさぬ御かたちを。天親菩薩は。盡十方無碍光如來とあらはしたまへり。このゆへによきあしき人をきらはす。煩惱のこゝろをえらはすへたてすして。往生はかならすするなりとしるへしとなり。しかれは惠心院の和尚の往生要集には。本願の念佛を信樂するありさまをあらはせるには。行住座臥をえらはす。時處諸緣をきらはすとおほせられたり。眞實の信心をえたるひとは。攝取のひかりにおさめとられまいらせたりと。たしかにあらはせり。しかれは無明煩惱を具して。安養淨土に往生すれは。すなはち無上佛果にいたると。釋迦如來ときたまへり。しかるに五濁惡世のわれら。釋迦一佛のみことを信受せんことありかたかるへしとて。十方恒沙の諸佛證人とならせたまふと。善導和尚は釋したまへり。釋迦彌陀十方の諸佛。みなおなし御こゝろにて。本願念佛の衆生には。かけ

ひのなかに。選擇攝取したまへる第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力とまふすなり。如來の御ちかひなれは。他力には義なきを義とすと聖人のおほせことにてありき。義といふことははからふことはなり。行者のはからひは自力なれは義といふなり。他力は本願を信樂して。往生必定なるゆへに。さらに義なしとなり。しかれはわかみのわるけれは。いかてか如來むかへたまはんとおもふへからす。凡夫はもとより煩惱具足したる。ゆへに。わるきものとおもふへし。またわかこゝろ。よけれは。往生すへしとおもふへからす。自力の御はからひにては。眞實の報土へむまるへからさるなり。行者のをの〱の自力の「はからひ」にては。懈慢邊地の往生。胎生疑城の淨土まてそ。往生せらるゝことにてあるへきとそ。うけたまはりたりし。第十八の本願成就のゆへに。阿彌陀如來とならせたまひて。不可思

乘の中の至極なり。方便假門の中にまた大小權實の敎あり。釋迦如來の御知善識は一百一十人なり。華嚴經にみえたり。

南無阿彌陀佛

建長三歲辛亥閏九月廿日　辛一本

愚禿親鸞七十九歲

かさまの念佛者のうかゝひとはれたること。それ淨土眞宗のこゝろは。往生の根機に他力あり自力あり。このことすでに天竺の論家。淨土の祖師のおほせられたることなり。まつ自力とまふすことは。行者のをの〳〵の緣にしたかひて。餘の佛號を稱念し。餘の善根を修行して。わか身をたのみ。わかはからひのこゝろをもて。身口意のみたれこゝろをつくろひめてたうしなして。淨土へ往生せんとおもふを自力とまふすなり。また他力とまふすことは。彌陀如來の御ちか

におもはすして。念もなきをいふなり。これみな聖道のをしへなり。聖道といふは。すでに佛になりたまへる人の。われらがこゝろをすゝめんがために。佛心宗。眞言宗。法華宗。華嚴宗。三論宗等の大乘至極の敎なり。佛心宗といふは。この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗。成實宗。俱舍宗等の權敎小乘等の敎なり。これみな聖道門なり。權敎といふは。すなはちすでに佛になりたまへる佛菩薩の。かりにさまざまの形をあらはして。すゝめたまふがゆへに權といふなり。淨土宗にまた有念あり無念あり。有念は散善の義。無念は定善の義なり。淨土の無念は聖道の無念にはにす。またこの聖道の無念のなかにまた有念あり。よくよくとふべし。淨土宗のなかに眞あり假あり。眞といふは選擇本願なり。假といふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり。定散二善は方便假門なり。淨土眞宗は大

心を一心といふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。又正念といふにつきて二あり。一には定心の行人の正念。二には散心の行人の正念あるへし。この二の正念は。他力のなかの自力の正念なり。定散の善は。諸行往生のことはにおさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は。來迎をまたすしては。邊地胎生懈慢界までもむまるへからす。このゆへに第十九の誓願に。もろ〳〵の善をして淨土に廻向して。往生せんとねかふ人の臨終には。われ現してむかへんとちかひたまへり。臨終をまつことと來迎往生をたのむといふことは。この定心散心の行者のいふことなり。選擇本願は。有念にあらす。無念にあらす。有念はすなはち色形をおもふにつきていふことなり。無念といふは。形をこゝろにかけす。色をこゝろ

末燈鈔

本願寺親鸞大師御己證幷邊州所々御消息等類聚鈔

有念无念事

來迎は諸行往生にあり。自力の行者なるかゆへに。臨終といふことは。諸行往生のひとにいふへし。いまた眞實の信心をえさるがゆへなり。また十惡五逆の罪人をはしめて善知識にあふて。すゝめらるゝにとりていふこと。なり。眞實信心の行人は。攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終をまつことなし。來迎をたのむことなし。信心のさたまるとき。往生またさたまるなり。來迎の儀式をまたす。正念といふは。本弘誓願の信樂さたまるをいふなり。此信心をうるゆへに。かならす無上涅槃にいたるなり。この信

末燈鈔

をかへりみず。ひとすぢにおろかなるものを。こゝろえさせんとてしるせるなり。

正嘉元歳丁巳八月十九日

愚禿親鸞八十五歳書之

曇鸞和尚碑文法師常修淨土亦每有世俗君子來呵法師曰十方佛國皆爲淨土法師何乃獨意注西豈非偏見生也法師對曰吾既凡夫智慧淺短未入地位念力須均如似置草引牛恒須繫心槽櫪豈得縱放全無所歸雖復難者紛紜而法師獨決是以無問一切道俗但與法師一面相遇者若未生正信勸令生信若已生正信者皆勸歸淨國是故法師臨命終時寺傍左右道俗皆見幡花映院盡聞異音樂迎接遂往生也

ふへしとなり。しかれは選擇本願には。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺とまふすは。彌陀の本願には下至といへるは。下は上に對して。とこえまての衆生。かならす往生す（へし一本）としらせたまへるなり。念と聲とはひとつこゝろなり。念をはなれたる聲なし。聲をはなれたる念なしとしるへし。この文とものこゝろは。おもふほとはまふさず。よからんひとにたつぬへし。ふかきことはこれにてもはから（をしはかり一本）はせたまふへし。

南無阿彌陀佛

ゐなかのひと〳〵の文字のこゝろもしらね（す一本）。あさましき愚癡きは（をろかにをろかなり一本）まりなきゆへに。やすくこゝろえさせんとて。おなしことをたひ〳〵とりかへし〳〵かきつけたり。こゝろあらんひとはおかしくおもふへし。あさけりをなすへし。しかれともおほかたのそしり

しへなり。淨土眞宗のこゝろにあらす。聖道家のこゝろなり。易行道のこゝろにあらす。かの宗のひとにたつぬへし。汝若不能念。といふは。五逆十惡の罪人不淨說法のもの。やまひのくるしみにとちられて。こゝろに彌陀を稱念したてまつらすは。たゝ口に南無阿彌陀佛と。となへよとすゝめたまへるみのりなり。これは口稱を本願とちかひたまへるをあらはさんとなり。應稱無量壽佛とのたまへるはこのこゝろなり。應稱はとなふへしとなり。具足十念。稱南無阿彌陀佛。稱佛名故。於念念中。除八十億劫生死之罪といふは。五逆の罪人はその身につみをもてること。十八十億劫のつみをもてるゆへに。十念南無阿彌陀佛ととなふへしとすゝめたまへるなり。一念に十八十億劫のつみをけすましきにはあらねとも。五逆のつみのおもきほとをしらせんかためなり。十念といふは。たゝ口に十返をとな

く。いつはりへつろふこゝろのみつねにして。まことなるこゝろなき身としるへし。斟酌すへしといふは。ことのありさまにしたかひて。はからふへしといふこゝろなり。不簡破戒罪根深といふは。もろ〳〵の戒をやふり。つみふかきひとをきらはすとなり。このやうはかみにくはしくあかせり。よくみるへし。乃至十念。若不生者。不取正覺といふは。選擇本願の文なり。この文のこゝろは。乃至十念のちかひの名號をとなへんひと。もしわかくにゝうまれすは佛にならしとちかひたまへるなり。乃至はかみしも。おほき。すくなき。ちかき。とおき。ひさしき。。みなおさむることはなり。多念にこゝろをとゝめ。一念にとゝまるこゝろをやめんかために。未來の衆生をあはれみて。法藏菩薩かねて願しましますちかひなり。よくよくこゝろうへし。慶樂すへきなり。非權非實といふは。法華宗のお

こゝろのうちに煩惱を具せるゆへに。虚なり。假なり。虚はむなしく。實ならす。假はかりにして眞ならす。しかれはいまこの世を。如來のみのりに末法惡世とさためたまへるゆへは。一切有情まことのこゝろなくして。師長を輕慢し。父母に孝せす。朋友に信なくして。惡をのみこのむゆへに。世間出世みな心口各異言念無實なりとおしへたまへり。心口各異といふは。こゝろとくちにいふことみなおの〳〵ことなり。言念無實といふは。ことはとこゝろのうちと實なしといふなり。實はまことゝいふことはなり。この世のひとは無實のこゝろのみにして。淨土をねかふひとはいつはりへつらひのこゝろのみなりときこへたり。世をすつるも名のこゝろ。利のこゝろをさきとするゆへなり。しかれは善人にもあらす。賢人にもあらす。精進のこゝろもなし。懈怠のこゝろのみにして。うちはむなし

機の自力の心なり。定散の二善を廻して。大經の三信をえんとねかふ。方便の深心と至誠心としるへし。眞實の三信心をえされは。實の報土にむまれす。眞の報土に」むまれされは即不得生といふなり。即はすなはちといふ。不得生はむまるゝことをえすといふなり。定機散機のひと。雜修して三信心かけたるゆへに。多生曠劫をへて。。三信心をえてのちに。むまるへきゆへに。すなはちむまれすといふなり。もし胎生邊地にむまれても五百歳をへ。あるひは億千萬衆のなかにときにまれに一人。まことの報土にはすゝむとみへたり。三信心えんことを。よく／＼こゝろえ。ねかふへきなり。不得外現賢善精進之相といふは。淨土をねかふひとは。あらはにかしこきかた。善人のかたちをふるまはされ。精進なるすかたをしめすことなかれとなり。そのゆへは内懷虛假なれはなり。。内はうちといふ。

は。ゆめ〳〵餘の善をそしり。餘の佛聖をいやしふすることなかれとなり。具三心者必生彼國といふは。三心を具すれはかならすかのくにゝむまるとなり。しかれは。具此三心。必得往生也。若少一心。即不得生とのたまへり。具此三心といふは。みつのこゝろを具すへしとなり。必得往生といふは。必はかならすといふ。得はうるといふ。うるといふは往生をうるとなり。若少一心といふは。若はもしといふ。ことしといふ。少はかへるといふ。すくなしといふ。一心かけぬれはむまるゝものなしとなり。一心かくるといふは。信心のかくるなり。信心かくるといふは。本願眞實の三信心のかくるなり。觀經の三心をえてのちに。大經の三信心をうるを。一心。うるとはいふなり。このゆへに大經の三信をえさるを。一心かくるといふなり。この一心かけぬれは實報土にむまれすとなり。觀經の三心は定機散

信心をえたるひと。は芬陀利華にたとへたまへり。この信心をえかたきことを。大經には若聞斯經。信樂受持。難中之難。無過此難とおしへたまへり。小經には極難信法とみへたり。この文のこゝろはこの經をきゝて信することかたきかなかにかたし。これにすきてかたきことなしとなり。釋迦牟尼如來。五濁惡世にいてゝ。この難信の法を行して。無上涅槃にいたれりとときたまふ。さてこの智慧の名號を。濁惡の衆生にあたへたまへり。十方諸佛の證誠。恒沙如來の護念。ひとへに眞實信心のひとのためなり。釋迦は慈父。彌陀は悲母。われらかちゝはゝとして。信心をおしへたまへりとしるへきなり。過去久遠に三恒河沙の諸佛の世にいてたまひしみもとにして。自力の大菩提心をおこしき。恒沙の善根を修せしめしによりて。いま大願業力にまふあふことをえたり。他力の三信心をえたらんひと

取のゆへに金剛。となる。これは念佛往生の本願の三信心なり。觀經の三心にはあらす。この眞實信心を。世親菩薩は願作佛心とのたまへり。これ淨土の大菩提心なり。しかれはこの願作佛心はすなはち度衆生心なり。この度衆生心とまふすは。すなはち衆生をして生死の大海をわたすこゝろなり。この信樂は。衆生をして無上大涅槃にいたらしむるこゝろなり。すなはち大慈大悲。心なり。この信心。佛性なり。。すなはち如來なり。この信心をうるを慶喜といふ。慶喜するひとは諸佛とひとしきひととなつく。慶はうへきことをえてのちによろこふこゝろなり。信心をえてのちによろこふこゝろなり。喜はこゝろのうちにつねによろこふこゝろたえすして。憶念つねなるなり。踊躍するなり。踊は天におとるといふ。躍は地におとるといふ。よろこふこゝろのきはまりなきかたちをあらはすなり。

念彌陀專復專といふは。敎はおしふといふ。のりといふ。釋尊の敎勅なり。念は心におもひさだめて。ともかくもはたらかぬこゝろなり。すなはち選擇本願の名號を。一向專修なれとおしへたまふみことなり。專復專といふは。はしめの專は一行を修すへしとなり。復はまたといふ。かさぬといふ。しかれはまた專といふは一心なれとなり。一行一心をもはらなれとなり。專は一といふことはなり。ともかくもうつるこゝろなきを專といふなり。この一行一心なるひとを。彌陀攝取してすてたまはされは。阿彌陀となつけたてまつると。光明寺の和尙はのたまへり。この一心は横超の信心なり。横はよこさまといふ。超はこえてといふ。よろつの法にすくれて。すみやかにとく生死の大海をこえて。無上覺にいたるゆへに超とまうすなり。。すなはち如來大悲の誓願力なるかゆへなり。この信心は攝

みをはらひ。惡業にさへられす。このゆへに無碍光とまふすなり。無碍は有情の惡業煩惱にさへられすとなり。しかれは阿彌陀佛は光明なり。光明は智慧のかたちなりとしるへし。隨緣雜善恐難生といふは。隨緣は衆生のおの〳〵の緣にしたかひて。もろ〳〵の善を修するを極樂に廻向するなり。すなはち八萬四千の法門なり。これは（又一本無）みな自力の善根なる。（か一本）ゆへに。實報土に。（は一本）むまれすときらはるゝゆへに。恐難生といへり。恐はをそるといふ。實報土に雜善自力の善むまるといふことをおそるゝなり。難生はむまれかたしとなり。故使如來選要法といふは。釋迦如來よろつの善のなかより名號をえらひとりて。五濁惡時惡世界惡衆生邪見無信のものにあたへたまへるなりとしるへし。これを選といふ。ひろくえらふといふこゝろなり。要はもはらといふ。（もとゝいふ一本）ちきるといふなり。法といふは名號なり。教

身とまふす。法性法身とまふすは。いろもなし。かたちもましまさす。しかれはこゝろもおよはすことはもたえたり。この一如よりかたちをあらはして。方便法身とまふす。その御すかたに法藏比丘とな。りたまひて。不可思議の四十八。願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに光明無量の本願。壽命無量の弘誓を、、、あらはしたまへる御かたちを。世親菩薩は盡十方無礙光如來となつけたてまつりたまへり。この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて。報身如來とまふす。。すなはち阿彌陀如來とまふす。。報といふはたねにむくひたるゆへなり。この報身より應化等の無量無數の身をあらはして。微塵世界に無礙の智慧光をはなたしめたまふゆへに。盡十方無礙光佛とまふす。ひかりの御かたちにて。いろもましまさす。かたちもましまさす。すなはち法性法身におなしくして。無明のや

まへり。また論には。蓮華藏世界と。いへり。無爲ともいへり。涅槃界といふは無明のまとひをひるかへして。無上覺をさとるなり。界はさかひといふ。さとりをひらくさかひなりとしるへし。涅槃とまふすにその名無量なり。くはしくまふすにあたはす。おろおろその名をあらはすへし。涅槃をは滅度といふ。無爲といふ。安樂といふ。常樂といふ。實相といふ。法身といふ。法性。といふ。眞如といふ。一如といふ。佛性といふ。佛性すなはち如來なり。この如來微塵世界にみち〱たまへり。すなはち一切群生海のこゝろなり。草木國土こと〱く。成佛すととけり。この一切有情の心に。方便法身の誓願を信樂するかゆへに。この信心すなはち佛性なり。この佛性すなはち法性なり。法性すなはち法身なり。しかれは佛について二種の法身まします。ひとつには法性法身とまふす。ふたつには方便法

あさひと獵師なとは。いしかはらつふてのことくなるを。如來。攝取のひかりにおさめとりたまひてすてたまはす。これひとへにまことの信心のゆへなれはなりとしるへし。攝取のひかりとまうすは。無碍光佛の御こゝろのうちにおさめとりたまふゆへに。金剛の信心とまうすなり。」文のこゝろはおもふほとはまふしあらはしさふらはねとも。あら〳〵まふすなり。ふかきことはよからんひとにもとはせたまふへし。この文は慈愍三藏とまふす天竺の聖人の釋なり。震旦には慧日三藏とまふすなり。

極樂無爲涅槃界。隨緣雜善恐難生。故使如來選要法。敎念彌陀專復專。

極樂無爲涅槃界といふは。極樂とまふすはかの安樂淨土なり。よろつのたのしみつねにして。くるしみましはらさるなり。かのくにをは安養といへり。曇鸞和尚はほめたてまつりて。安養とまふすとのた

こゝろをすてゝ。ひとすちに具縛の凡夫。屠沽の下類。無碍光佛の不可思議の誓願。廣大智慧の名號を信樂すれは。煩惱を具足しなから。無上大涅槃にいたるなり。具縛といふは。よろつの煩惱にしはられたるわれらなり。煩は身をわつらはす。惱はこゝろをなやますといふ。屠はよろつのいきたるものをころしほふるもの。これは獵師といふものなり。沽はよろつのものをうりかふものなり。これはあきひとなり。これらを下類といふなり。かやうのあしきひと獵師さま〳〵のものは。みないしかはらつふてのことくなるわれらなり。能令瓦礫變成金といふは。能はよくといふ。令はせしむといふ。瓦はかはらといふ。礫はつふてといふ。變成金。。變成はかへなすといふ。金はこかねといふ。如來の本願を信すれは。かはらつふてのことくなるわれらを。こかねにかへなさしむとたとへたまへるなり。

は。實報土にむまるとおし（を一本下同）へたまへるを。淨土眞宗とすとしるへし。總迎來といふは。すへてみな眞實信樂あるものを。淨土へむかへゐてかへらしむとなり。但使廻心多念佛といふは。但使廻心はひとへに廻心せしめよといふこと（こゝろ一本）はなり。廻心といふは。自力の心をひるかへしすつるをいふなり。實報土にむまるゝひとは。かならす無碍光佛の心中におさめとりたまふゆへに。金剛の信心となるなり。このゆへに多念佛とまふすなり。多は大のこゝろなり。勝のこゝろな（よろつの善に）り。増上のこゝろなり。大はおほきなり。勝はすくれたり。○よろ（まされりとしるへし増上は一本）つの善にすくれたるなり。これすなはち他力本願（無上一本）。○のゆへなり。自力のこゝろをすつといふは。やう〳〵さま〳〵。（の一本）大小の聖人。善惡の凡夫のみつからか。身をよしとおもふこゝろをすて。身をたのます。あしきこゝろをさかしくかへりみす。またひとをおしよし（よしあし一本）とおもふ

戒品をやふるを破といふなり。かやうのさま〳〵の大小の戒品をたもてるいみしきひと〳〵も。他力眞實の信心をえてのちに。眞實の報土には往生をとくるなり。みつからのおの〳〵の戒善。おの〳〵の自力の信。自力の善にては。實の報の淨土にはむまれすとしるへし。不簡破戒罪根深といふは。破戒はかみにあらはすところの。よろつの道俗の戒品をうけて。やふりすてたるもの。これらをきらはすとなり。罪根深といふは。十惡五逆の惡人。謗法闡提の罪人。おほよそ善根すくなきもの。惡業おほきもの。善心あさきもの。惡心ふかきもの。かやうのあさましき。さま〳〵のつみふかきひとを深といふ。ふかしといふことはなり。すへてよきひと。あしきひと。たふときひと。いやしきひと。無碍光佛の御ちかひにはえらはす。これらをみちひきたまふを。さきとしむねとするなり。眞實信心をうれ

眞如よりとまふす。來生といふは。きたり生すといふなり。不簡貧窮將富貴といふは。不簡はえらはすといふ。きらはぬこゝろなり。貧窮はまつしくたしなきなり。將はまさにといふ。もてといふ。ゐてゆくといふ。富貴はとめるといふ。よきひとといふ。これらをまさにもてえらはす。淨土へゐてゆくとなり。不簡下智與高才といふは。下智は智慧あさく。せはく。すくなきものなり。高才は才學ひろきもの。これらをえらはすとなり。不簡多聞持淨戒と云は。多聞は聖教をひろくおほくきゝ信するなり。持はたもつといふ。たもつといふは。ならひまなふこゝろをうしなはすちらさぬなり。淨戒は大乘小乘のもろ〳〵の戒品。五戒。十善戒。小乘の具足戒。三千の威儀。六萬の齊行。大乘の一心。金剛法戒。三聚淨戒。梵網の五十八戒等。すへて道俗の戒品。これらをたもつを持といふ。これらの

り。超世は餘の佛の御ちかひにすぐれたまへりとなり。超はこえたりといふ。うへなしといふ。如來。弘誓をおこしたまへるやうは。この唯信鈔にくはしくあらはせり。聞名念我といふは。聞はきくといふ。信心をあらはすみのりなり。名は如來のちかひの名號なり。念我とまふすは。このみなを憶念せよとなり。諸佛稱名の悲願にあらはせり。憶念といふは。信心まことなるひとは。本願をつねにおもひいづるこゝろのたえずつねなるなり。總迎來といふは。總はふさねてといふ。すへてみなといふこゝろなり。迎はむかふるといふまつといふ。他力をあらはすこゝろなり。來はかへるといふ。きたるといふ。法性のみやこへむかへ。てかへらしむとなり。法性のみやこより。衆生利益のために娑婆界にきたりたまふゆへに。來をきたるといふなり。經には。從如來生とのたまへり。從如といふは。

願は。選擇の正因たること。悲願にあらはれたり。この文のこゝろは。おもふほとはまふさす。これにてをしはからせたまふへし。この文は。後善導法照禪師とまふす聖人の御釋なり。この和尚をは法道和尚と慈覺大師はのたまへり。またつたへて盧山の彌陀和尚ともまふす。淨業和尚ともまふす。唐朝の光明寺の善導和尚の化身なりこのゆへに後善導とまふすなり。

彼佛因中立弘誓　聞名念我總迎來　不簡貧窮將富貴　不簡下智與高才
不簡多聞持淨戒　不簡破戒罪根深　但使廻心多念佛　能令瓦礫變成金

彼佛因中立弘誓。このこゝろは。彼はかのといふ。佛は阿彌陀佛なり。因中は法藏菩薩とまふしゝときなり。立弘誓は。立はたつといふ。なるといふ。弘はひろしといふ。ひろまるといふ。誓はちかひといふ。法藏比丘超世無上のちかひをおこして。ひろめたまふとな

たれぬこと金剛のことくなり。しかれは金剛の信心といふなり。大經には。願生彼國即得往生住不退轉とのたまへり。願生彼國は。かのくにゝむまれんとねかふへきなり。即得往生は。信心をうれはすなはち往生すといふ。すなはち往生すといふは。不退轉に住するをいふ。不退轉に住すといふは。すなはち正定聚のくらゐにさたまるなり。成等正覺ともいへり。これを即得往生といふなり。即はすなはちといふ。すなはちといふはときをへたてす。ひをへたてぬをいふなり。おほよそ十方世界にあまねくひろまることは。法藏菩薩の四十八の大願のなかに。第十七の願に。十方無量の諸佛に。わかなをほめられ。んとちかひたまへる。一乘大。海の誓願を成就したまへるによりてなり。阿彌陀經の證誠護念のありさまにてあきらかなり。證誠護念の御こゝろは大經にもあらはれたり。すてに稱名の本

まふすは。法身といふ。如來のさとりを自然にひらくなり。さとりひらくときを法性のみやこへかへるとまふすなり。これを眞如實相を證すともいふ。無爲法身ともいふ。滅度にいたるともいふ。法性の常樂を證すともいふ。無上覺にいたるともまふすなり。このさとりをうれは。すなはち大慈大悲きはまりて生死海にかへりいりて。よろつの有情をたすくるを。普賢の德に歸せしむといふなり。この利益におもむくを來といふ。これを法性のみやこへかへるといふなり。迎といふはむかへ。といふ。まつと云こゝろなり。撰擇。本願の尊號。無上智慧の信心をきゝて。一念もうたかふこゝろなければ眞實信心といふ。この信心をうれは。等正覺にいたりて。補處の彌勒におなしく。て。無上覺をなるへしといへり。すなはち正定聚のくらゐにさたまるなり。このゆへに信心やふれす。かたふかす。み

しむるか故に。しからしむといふ。はしめて功徳をえんとはからはされは自然といふなり。誓願眞實の信心をえたるひとは。攝取不捨の御ちかひにおさめとりて。まほらせたまふによりて。行人のはからひにあらす。金剛の信心となるゆへに。正定聚のくらゐに住すといふ。このこゝろなれは憶念の心自然におこるなり。この信心のおこることも。釋迦の慈父。彌陀の悲母の方便によりて。無上の信心を發起せしめたまふとみへたり。これ自然の利益なりとしるへし。來迎といふは。來は淨土にきたらしむといふ。これすなはち若不生者のちかひをあらはすみのりなり。穢土をすてゝ眞實の報土にきたらしむとなり。すなはち他力をあらはすみことなり。また來はかへるといふ。かへるといふは。願海にいりぬるによりて。かならす大涅槃にいたるを法性のみやこへかへるとまふすなり。法性のみやこと

子としめす。これはよろづの衆生の無明黑闇をはらはしむ。勢至を寳吉祥菩薩となつけて。月天子とあらはれ。生死の長夜をてらして智慧をひからしむるなり。自來迎といふは。自はみつからといふ。彌陀無數の化佛。無數の化觀世音。化大勢至等の無量無數の聖衆。みつからつねにときをきらはす。ところをへたてす。眞實信心をえたるひとにそひたまひて。まほりたまふゆへにみつからとまふすなり。また自はおのつからといふ。おのつからといふは自然といふ。自然といふはしからしむといふ。しからしむといふは。行者。はしめてともかくもはからはさるに。過去今生未來の一切のつみを。善に轉しかへなすといふなり。轉すといふは。つみをけしうしなはすして善になすなり。よろつのみつ大海にいりぬれは。すなはちうしほとなるかことし。彌陀の願力を信する。ゆへに。如來の功德をえ

は。普はあまねくひろくきはなしといふ。流行は十方微塵世界にあまねくひろまりて。佛教をすゝめ行せしめたまふなり。しかれは大乘の聖人。小乘の聖人善人惡人（如來又一本）一切の凡夫。みなともに自力の智慧をもては。大涅槃にいたることなけれは。無碍光佛の御かたちは。智慧のひかりにてましますゆへに。この如來の智願海にすゝめいれたまふなり。一切諸佛の智慧をあつめたまへる御かたちなり。光明は智慧なりとしるへし。但有稱名皆得往といふは。但有はひとへにみなをとなふるひとのみ。みな極樂淨土に往生すとなり。かるかゆへに稱名皆得往とのたまへるなり。觀音勢至自來迎といふは。この（南無阿彌陀佛は智慧の名號なれは一本）不可思議の智慧光佛のみなを信受して憶念すれは。觀音勢至はかならすかけのかたちにそへることくなり。この無碍光佛は。觀音とあらはれ勢至としめす。ある經には。觀音を寶應聲菩薩となつけて日天

但有稱名皆得往　觀音勢至自來迎

如來尊號甚分明。このこゝろは。如來とまふす（う一本下同）は無碍光如來なり。尊號といふは南無阿彌陀佛なり。尊はたふとくすくれたりとなり。號は佛になりたまふてのちの御名をまふす。名はいまだ佛になりたまはぬときの御名をまふすなり。この如來の尊號は不可稱不可説不可思議にましますゆへに。一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ。大慈大悲のちかひの御名なり。この佛の御名は。よろつの如來の名號にすくれたまへり。これすなはち誓願なるかゆへなり。甚分明といふは。甚ははなはだといふ。すくれたりといふこゝろなり。分はわかつといふ。よろづの衆生とわかつこゝろなり。明はあきらかなりといふ。十方一切衆生をこと〳〵くわかちたすけみちびきたまふこと。（あきらかなりあはれみたまふこと一本）すくれたまへりとなり。十方世界普流行といふ

唯信鈔文意

唯信鈔といふは。唯はたゞこのことひとつといふ。ふたつならふことをきらふことはなり。また唯はひとりといふこゝろなり。信はうたかふこゝろなきなり。すなはちこれ眞實の信心なり。虚假はなれたるこゝろなり。虚はむなしといふ。假はかりなりといふ。虚は實ならぬをいふ。假は眞ならぬをいふなり。本願他力をたのみて。自力をすつるをいふなり。これを唯信といふ。鈔はすくれたることをぬきいたしあつむることはなり。このゆへに唯信鈔といふなり。また唯信は。これ他力の信心のほかに餘のことならはすとなり。すなはち本弘誓願なるかゆへなれはなり。

如來尊號甚分明　十方世界普流行

唯信鈔文意

おもふやうにはまうしあらはさねとも。これにて一念多念のあらそひあるましきことは。をしはからせたまふへし。淨土眞宗のならひには念佛往生とまうすなり。またく一念往生。多念往生とまうすことなし。これにてしらせたまふへし。

南無阿彌陀佛

ゐなかのひと〳〵の文字のこゝろもしらす。あさましき愚癡きはまりなきゆへに。やすくこゝろえさせむとて。おなしことをとりかへし〳〵かきつけたり。こゝろあらむひとはおかしくおもふへし。あさけりをなすへし。しかれともひとのそしりをかへりみす。ひとすちにおろかなるひと〳〵を。こゝろえやすからんと。しるせるなり。

正嘉元歳丁巳八月六日書寫之

愚禿親鸞 八十五歳

ゆくにたとへたるなり。諸佛出世の直說。如來成道の素懷は。凡夫は彌陀の本願を念せしめて。即生するをむねとすへしとなり。今信知彌陀本弘誓願及稱名號といふは。如來のちかひを信知すとまうすこゝろなり。信といふは金剛心なり。知といふはしるといふ。煩惱惡業の衆生をみちひきたまふとしるなり。また知といふは觀なり。こゝろにうかへおもふを觀といふ。こゝろにうかへしるを知といふなり。及稱名號といふは。及はをよふといふ。をよふといふはかねたるこゝろなり。稱は御なをとなふるとなり。また稱ははかりといふこゝろなり。はかりといふは。ものゝほとをさたむることなり。名號を稱することゝこゑひとこゑきくひと。うたかふこゝろ一念もなけれは。實報土へむまるとまうすこゝろなり。また阿彌陀經の七日。もしは一日名號をとなふへしとなり。これは多念の證文なり。

なはち無上大涅槃にいたるをまうすなり。信心のひとは。正定聚にいたりて。かならす滅度にいたるとちかひたまへるなり。これを致とすといふ。むねとすとまうすは。涅槃のさとりをひらくをむねとすとなり。凡夫といふは。無明煩惱われらかみにみち〳〵て。欲もおほく。いかりはらたち。そねみねたむこゝろおほくひまなくして臨終の一念にいたるまてとゞまらす。きえすたえすと。水火二河のたとへにあらはれたり。かゝるあさましきわれら。願力の白道を一分二分やう〳〵つゝあゆみゆけは。無碍光佛のひかりの御こゝろにおさめとりたまふかゆへに。かならす安樂淨土へいたれは。彌陀如來とおなしく　かの正覺のはなに化生して。大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむへしとなり。これを致使凡夫念即生とまうすなり。二河のたとへに。一分二分ゆくといふは。一年二年すき

とたとへたるなり。致使凡夫念即生といふは。致はむねとすと云。むねとすといふは。これを本とすといふことはなり。いたるといふ。いたるといふは。實報土にいたるとなり。使はせしむといふ。凡夫はすなはちわれらなり。本願力を信樂するをむねとすへしとなり。念は如來の御ちかひをふたこゝろなく信するをいふなり。即はすなはちといふ。ときをへす。日をへたてす。正定聚のくらゐにさたまるを即生といふなり。生はむまるといふ。これを念即生とまうすなり。また即はつくといふ。つくといふはくらゐにかならすのほるへきみといふなり。世俗のならひにも。くにの王のくらゐにのほるをは即位といふ。位といふはくらゐといふこれを東宮のくらゐにいるひとは。かならす王のくらゐにつくかことく。正定聚のくらゐにつくは。東宮のくらゐのことし。王にのほるは即位といふ。これはす

過るひとなし。よくすみやかに功德の大寶海を滿足せしむとのたまへり。觀は願力をこゝろにうかへみるとまうす。またしるといふこゝろなり。遇はまうあふといふ。まうあふといふは本願力を信するなり。無はなしといふ。空はむなしくといふ。過はすくるといふ。者はひと〳〵といふ。むなしくすくるひとなしといふは。信心あらんひと。むなしく生死にとゝまることなしとなり。能はよくといふ。令はせしむといふ。よしといふ。速はすみやかにといふ。ときことといふなり。滿はみつといふ。足はたりぬといふ。功德とまうすは名號なり。大寶海はよろつの善根功德みちきはまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信するひとのこゝろのうちに。すみやかにとくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれは金剛心のひとは。しらすもとめさるに功德の大寶。そのみにみちみつ。かゆへに。大寶海

たちをあらはして。法藏菩薩となのりたまひて。無碍のちかひをを（お一本）こしたまふをたねとして。阿彌陀佛となりたまふかゆへに。報身如來とまうすなり。これを盡十方無碍光佛となつけたてまつれるなり。この如來を南無不可思議光佛ともまうすなり。この如來を方便法身とはまうすなり。方便とまうすはかたちをあらはし。御なをしめして衆生にしらしめたまふをまうすなり。すなはち阿彌陀佛なり。この如來は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ不可思議光佛とまうすなり。この如來十方微塵世界にみち〱たまへるかゆへに。無邊光佛とまうす。しかれは世親菩薩は。盡十方無碍光如來となつけたてまつりたまへり。淨土論曰。觀佛本願力。遇無空過者。能令速滿足功德大寶海とのたまへり。この文のこゝろは。佛の本願力を觀する（みるなりしるこゝろなり　みるこゝろなりしるなり一本）にまうあふてむなしく

これなり。定善は十三觀なり。散善は三福九品の諸善なり。これみな淨土方便の要門なり。これを假門ともいふ。この要門假門よりもろ〳〵の衆生をすゝめこしらへて。本願一乘圓融無碍眞實功德大寶海にをしへすゝめいれたまふかゆへに。よろつの自力の善業をは方便の門とまうすなり。いま一乘とまうすは本願なり。圓融とまうすは。よろつの功德善根みち〳〵てかくることなし。自在なることろなり。無碍とまうすは。煩惱惡業にさへられすやふれぬをいふなり。眞實功德とまうすは名號なり。一實眞如の妙理圓滿せるか故に大寶海にたとへたまふなり。一實眞如とまうすは無上涅槃なり。涅槃すなはち法性なり。法性すなはち如來なり。寶海とまうすは。よろつの衆生をきらはすさはりなくへたてすみちひきたまふを。大海のみつのへたてなきにたとへたまへるなり。この一如寶海よりか

きことをしらせんとなり。しかれは大經には。如來所以與出於世欲拯群萠惠以眞實之利とのたまへり。この文のこゝろは。如來とまうすは諸佛をまうすなり。所以はゆへといふことはなり。與出於世といふは。佛のよにいでたまふとまうすなり。欲はおほしめすとまうすなり。拯はすくふといふ。群萠はよろつの衆生といふ。惠はめくむとまうす。眞實之利とまうすは彌陀の誓願をまうすなり。しかれは諸佛のよゝにいでたまふゆへは。彌陀の願力をときて。よろつの衆生をめくみすくはんとおほしめすを。本懷とせんとしたまふかゆへに眞實之利とはまうすなり。しかれはこれを諸佛出世の直說とまうすなり。おほよそ八萬四千の法門は。みなこれ淨土の方便の善なり。これを要門といふ。これを假門となつけたり。この要門假門といふは。すなはち無量壽佛觀經一部にときたまへる定善散善

自力といふは。わかみをたのみ。わかこゝろをたのむ。わかちからをはけみ。わかさま〳〵の善根をたのむひとなり。上盡一形といふは。上はかみといふ。すゝむといふ。のほるといふ。いのちをはらんまてといふ。盡はつくるますといふ。形はかたちといふ。あらはすといふ。念佛せんこといのちをはらんまてとなり。十念三念五念のものもむかへたまふといふは。念佛の徧數によらさることをあらはすなり。直爲彌陀弘誓重といふは。直はたゝしきなり。如來の直說といふなり。諸佛のよにいてたまふ本意とまうすを直說といふなり。爲はなすといふ。もちゐるといふ。さたまるといふ。かれといふ。これといふ。あふといふ。あふといふは。かたちといふこゝろなり。重はかさなるといふ。をもしといふ。あつしといふ。誓願の名號。これをもちゐさためなしたまふこと。かさなれりとおもふへ

近はちかしとなり。ときをえらはされは不淨のときをへたてす。よろつのことをきらはされは不問といふなり。是名正定之業順彼佛願故といふは。弘誓を信するを報土の業因とさたまるを。正定の業となつくといふ。佛の願にしたかふかゆへにとまうす文なり。一念多念のあらそひをなすひとをは。異學別解のひと〻まうすなり。異學といふは。聖道外道にをもむきて。餘行を修し餘佛を念す。吉日良辰をえらひ。占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。これらはひとへに自力をたのむものなり。別解は念佛をしなから他力をたのまぬなり。別といふはひとつなることを。ふたつにわかちなすことはなり。解はさとるといふ。とくといふことはなり。念佛をしなから自力にさとりなすなり。かるかゆへに別解といふなり。また助業をこのむもの。これすなはち自力をはけむひとなり。

世界法量諸佛。不悉咨嗟稱我名者。不取正覺と願したまへり。この悲願のこゝろは。たとひわれ佛をえたらんに。十方世界無量の諸佛こと〳〵く咨嗟してわか名を稱せすは。佛にならしとちかひたまへるなり。咨嗟とまうすは。よろつの佛にほめられたてまつるとまふす御ことなり。一心專念。は。一心は金剛の信心なり。專念といふは一向專修なり。一向は餘の善にうつらす。餘の佛を念せす。專修は本願のみなをふたこゝろなくもはら修するなり。修はこゝろのさたまらぬを。つくろひなをしをこなふなり。專はもはらといふ。一といふなり。もはらといふは餘善他佛にうつるこゝろなきをいふなり。行住坐臥不問時節久近といふは。行はあるくなり。住はとゝまるなり。坐はゐるなり。臥はふすなり。不問はとはすといふ。時はときなり。十二時なり。節はときなり。十二月四季なり。久はひさしき。

多念をひかことゝおもふましき事。本願の文に。乃至十念とちかひたまへり。すてに十念とちかひたまへるにてしるへし。一念にかきらすといふことをいはんや乃至とちかひたまへり。稱名の徧數さたまらすといふことを。この誓願はすなはち易往易行のみちをあらはし。大慈大悲のきはまりなきことをしめしたまふなり。阿彌陀經に一日乃至七日名號をとなふへしと。釋迦如來ときをきたまへる御のりなり。この經は無問自說經とまうす。この經をときたまひしに。如來にとひたてまつる人もなし。これすなはち釋尊出世の本懐をあらはさんとおほしめすゆへに。無問自說とまうすなり。彌陀選擇の本願。十方諸佛の證誠。諸佛出世の素懐。恒沙如來の護念は。諸佛咨嗟の御ちかひをあらはさんとなり。諸佛稱名の誓願。大經にのたまはく。設我得佛。十方

かならすもとめさるに無上の功徳をえしめ。しらさるに廣大の利益をうるなり。自然にさま〳〵のさとりをすなはちひらく、法則なり。法則といふは。はしめて行者のはからひにあらす。もとより不可思議の利益にあつかること。自然のありさまとまうすことを。しらしむるを法則とはいふなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらはすを法則とはまうすなり。經に無諸邪聚及不定聚といふは。無はなしといふ。諸はよろつのことゝいふことはなり。邪聚といふは雜行雜修萬善諸行のひと。報土にはなけれはなりといふなり。及はをよふといふ。不定聚は自力の念佛。疑惑の念佛の人は報土にはなしといふなり。正定聚の人のみ眞實報土にむまるれはなり。この文ともはこれ一念の證文なり。おもふほとはあらはしまうさす。これにてをしはからせたまふへきなり。

は。本願の名號を信すへしと。釋尊ときたまへる御のりなり。歡喜踊躍乃至一念といふは。歡喜はうへきことをえてむすと。さきたちてかねてよろこふこゝろなり。踊は天にをとるといふ。躍は地にをとるといふ。よろこふこゝろのきはまりなきかたちなり。慶樂するありさまをあらはすなり。慶はうへきことをえて。のちによろこふこゝろなり。樂はたのしむこゝろなり。これは正定聚のくらゐをうるかたちをあらわすなり。乃至は稱名の徧數のさたまりなきことをあらはす。一念は功德のきはまり。一念に萬德こと〱くそなはる。よろつの善みなおさまるなり。當知此人といふは。信心のひとをあらす。御のりなり。爲得大利といふは。無上涅槃をさとるゆへに。則是具足無上功德とものたまへるなり。則といふはすなはちといふ。のりとまうすことはなり。如來の本願を信して一念するに。

しおさむと。餘の雜業といふは。もろ〱の善業なり。雜行を修し雜修をこのむものをは。總てみなてらしおさむといはす。○まもらすとのたまへるなり。是すなはち本願の行者にあらさるゆへに。攝取の利益にあつからさるなりとしるへしとなり。このよにてまもらすとなり。此亦是現生護念といふは。このよにてまもらせたまふとなり。本願業力は信心のひとの強緣なるかゆゑに。增上緣とまうすなり。信心をうるをよろこふ人をは。經には諸佛とひとしきひとゝときたまへり。首楞嚴院の源信和尙の曰はく。我亦在彼攝取之中。煩惱障眼雖不能見。大悲無倦常照我身と。この文のこゝろは。われまたかの攝取のなかにあれとも。煩惱まなこをさへて。みたてまつるにあたはすといへとも。大悲ものうきことなくして。つねにわかみをてらしたまふとのたまへるなり。其有得聞彼佛名號といふ

なくまもりたまへは彌陀佛をは。不斷光佛とまうすなり。是人といふは。是は非に對することはなり。眞實信樂のひとをは是人とまうす。虛假疑惑のものをは非人といふ。非人といふはひとにあらすときらひ。わるきものといふなり。是人はよきひとゝまうす。攝護不捨とまうすは。攝はおさめとるといふ。護はところをへたてす。ときをわかす。ひとをきらはす。信心ある人をはひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは。異學異見のともからにやふられす。別解別行のものにさえられす。天魔波句におかされす。惡鬼惡神なやますことなしとなり。不捨といふは。信心のひとを。智慧光佛の御こゝろにおさめまもりて。心光のうちにときとしてすてたまはすとしらしめんとまうす御のりなり。總不論照攝餘雜業行者といふは。總はみなといふなり。不論はいはすといふこゝろなり。照攝はてら

たとへたまへるなり。このはなは人中の上上華なり。好華なり。妙好華なり。希有華なり。最勝華なりとほめたまへり。光明寺の和尚の御釋には。念佛のひとをは。上上人。好人。妙好人。希有人。最勝人とほめたまへり。また現生護念の利益をしへたまふには。但有專念阿彌陀佛衆生彼佛心光常照是人攝護不捨總不論照攝餘雜業行者此亦是現生護念增上緣とのたまへり。この文のこゝろは。但有專念阿彌陀佛衆生といふは。ひとすちに彌陀佛を信したてまつるとまうす御ことなり。彼佛心光とまうすは。彼はかれとまうす。佛心光とまうすは無碍光佛の御こゝろとまうすなり。常照是人といふは。常はつねなることひまなくたえすといふなり。照はてらすといふ。ときをきらはす。ところをへたてす。ひまなく眞實信心のひとをはつねにてらしまもりたまふなり。かの佛心につねにひま

定聚にいるなり。これはこれかのくにの名字をきくにさためて佛事をなす。いつくんそ思議すへきやとのたまへるなり。安樂淨土の不可稱不可說不可思議の德を。もとめすしらさるに。信する人にえしむとしるへしとなり。（をよはすとなりときつくすへからすとなり又一本）また王日休（したんこくのひとなり一本無）のいはく。念佛衆生便同彌勒といへり。念佛衆生は金剛の信心をえたる人なり。便はすなはちといふ。たよりといふ。信心の方便によりて。すなはち正定聚のくらゐに住せしめたまふかゆへにとなり。同はおなしきなり（一本無）といふ。念佛の人は無上涅槃にいたること。（いふなり又一本）彌勒におなしきひとゝまうすなり。また經にのたまはく。若念佛者當知此人是人中分陀利華とのたまへり。若念佛者とまうすは。もし念佛せんひとゝまうすなり。當知此人是人中分陀利華といふは。まさにこのひとはこれ人中の分陀利華なりとしるへしとなり。これは如來のみことに分陀利華を念佛のひとに

死の大海（ろくたうにふとふたいかいとたとふるたいかいはうみなり又一本）をよこさまにこえて。眞實報土のきしにつくなり。次如彌勒とまうすは。次はちかしといふ。つきにといふ。ちかしといふは。彌勒は大涅槃にいたりたまふへきひとなり。このゆへに彌勒のことしとのたまへり。念佛信心の人も。大涅槃にちかつくとなり。つきにといふは。釋迦佛のつきに。五十六億七千萬歳をへて。妙覺（まことのほとけなり）のくらゐにいたりたまふへしとなり。如はことしといふ。ことしといふは。他力信樂のひとは。このよのうちにて（一本無）不退のくらゐにのほりて。かならす大般（ひろしかさねかさぬなり一本無）涅槃のさとりをひらかんこと。彌勒の如しとなり。淨土論曰。經言。若人但聞彼國土清淨安樂剋念願生亦得往生即入正定聚此是國土名字爲佛事安可思議とのたまへり。この文のこゝろは。もしひとひとへにかのくにの清淨安樂なるをきゝて。剋念してむまれんとねかふひとゝ。またすてに往生をえたるひとも。すなはち正

聚に住す。ゆへはいかんとなれは。かの佛國のうちには。もろ〳〵の邪聚をよひ不定聚はなけれはなりとのたまへり。この二尊の御のりをみたてまつるに。すなはち往生すとのたまへるは。正定聚のくらゐにさたまるを。不退轉に住すとはのたまへるなり。このくらゐにさたまりぬれは。必らす無上大涅槃にいたるへき身となるかゆへに。等正覺をなるともとき、阿毘跋致にいたるとも。阿惟越致にいたるともときたまふ。即時入必定ともまうすなり。この眞實信樂は。他力横超の金剛心なり。しかれは念佛のひとをは。大經には次如彌勒とときたまへり。彌勒は竪の金剛心の菩薩なり。竪とまうすはたてさまとまうすことはなり。これは聖道自力の難行道の人なり。横はよこさまにといふなり。超はこゑてといふなり。これは佛の大願業力のふねに乘しぬれは。生

大經にときたまはく。設我得佛國中人天不住定聚必至滅度者不取正覺と願したまへり。また經にのたまはく。若我成佛國中有情若不決定成等正覺證大涅槃者不取菩提と誓たまへり。この願成就を釋迦如來ときたまはく。其有衆生生彼國者皆悉住於正定之聚所以者何彼佛國中無諸邪聚及不定聚とのたまへり。これらの文のこゝろは。たとひわれ佛をえたらんに。くにのうちの人天定聚にも住して。かならす滅度にいたらすは佛にならしと。ちかひたまへるこゝろなり。またのたまはく。もしわれ佛にならんに。くにのうちの有情。もし決定して等正覺（まことのほとけになるへきみとなれるなり一本）をなりて。大涅槃（まことのほとけなり一本無さとるなり又一本）を證せすは佛にならしと。ちかひたまへるなり。かくのことく法藏菩薩ちかひたまへるを。釋迦如來五濁のわれらかためにときたまへる文のこゝろは。それ衆生ありてかのくにゝむまれんとするものは。みなこと〲く正定（かならすほとけとなるへき）の

きのきはまりをあらはすことはなり。至心廻向といふは。至心は眞實といふことはなり。眞實は阿彌陀如來の御こゝろなり。廻向は本願の名號をもて。十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。願生彼國といふは。願生はよろつの衆生。本願の報土へむまれんとねかへとなり。彼國はかのくにといふ。安樂國をゝしへたまへるなり。即得往生といふは。即はすなはちといふ。ときをへす日をもへたてぬなり。また即はつくといふ。そのくらゐにさたまりつくといふことはなり。得はうへきことをえたりといふ。眞實信心をうれは。すなはち無碍光佛の御こゝろのうちに攝取（おさめむかへとりたまふとなり）してすてたまはさるなり。攝はおさめたまふ。取はむかへとるとまふすなり。おさめとりたまふとき。すなはちとき日をもへたてす。正定（わうしやうすへき［にさたまるなり一本無 みと又一本］）聚のくらゐにつきさたまるを。往生をうとはのたまへるなり。しかれは必至滅度の誓願を。

そのめてたきことゝも。めのまへにあらはれたまへとねかへとなり。無量壽經の中に。あるひは諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉とときたまへり。諸有衆生といふは。十方のよろつの衆生とまうすこゝろなり。聞其名號といふは。本願の名號をきくとのたまへるなり。きくといふは。本願をきゝてうたかふこゝろなきを聞といふなり。またきくといふは。信心をあらはす御のりなり。信心歡喜乃至一念といふは。信心は如來の御ちかひをきゝて。うたかふこゝろのなきなり。歡喜といふは。歡はみをよろこはしむるなり。喜はこゝろによろこはしむるなり。うへきことをえてむすとかねてさきよりよろこふこゝろなり。乃至は。をほきをも。すくなきをも。ひさしきをも。ちかきをも。さきをも。のちをも。みなかねをさむることはなり。一念といふは。信心をうると

一念多念證文

又一本外題に一念多念文意と云

一念をひかことゝおもふましき事。

恒願一切臨終時勝縁勝境悉現前といふは。恒はつねにといふ。願はねかふといふなり。いまつねにといふはたえぬこゝろなり。おりにしたかふてとき〳〵もねかへといふなり。いまつねにといふは。常の義にはあらす。常といふはつねなることひまなかれといふこゝろなり。ときとしてたえす。ところとしてへたてすきらはぬを常といふなり。一切臨終時といふは。極楽をねかふよろつの衆生。いのちをはらんときまてといふことはなり。勝縁勝境といふは。佛をもみたてまつり。ひかりをもみ。異香をもかき。善知識のすゝめにもあはとむおもへとなり。悉現前といふは。さまさ

一念多念證文

一念多念證文

よろこひうやまふひとといふなり。即横超截五惡趣といふは。信心をうれはすなはち横に五惡趣をきるなりとしるへしとなり。横超といふは。横は如來の願力他力をまふすなり。超は生死の大海をやすくこえて。無上大涅槃のみやこにいるなりと。信心を淨土宗の正意としるなり。このこゝろをえつれは。他力は義なきを義とすとなり。義といふは行者のはからふこゝろなり。このゆゑに自力といふなり。よく／＼こゝろうへしと。

建長七歳乙卯六月二日

愚禿親鸞八十三歳書ニ寫之

（一本無）尊號眞像銘文末

尊號眞像銘文末

凡夫五逆謗法無戒闡提みな廻心して。眞實信心海に歸入しぬれは。衆水海にいりてひとつあぢわいとなるかことしとなり。これを如衆水入海一味といふなり。攝取心光常照護といふは。無碍光佛の心光つねにてらしまもりたまふゆへに。無明のやみはれ。生死のなかき夜すてにあかつきになりぬとしるへし。已能雖破無明闇といふはこのこゝろなり。信心をうれはあかつきになりぬとしるへし。貪愛瞋憎之雲霧常覆眞實信心天といふは。われらか貪愛瞋憎をくもきりにたとへたり。貪愛のくも瞋憎のきり。つねに信心の天をおほへるなりとしるへし。譬如日光覆雲霧雲霧之下明無闇といふは。日月のくもきりにおほはるれとも。やみはれてくもきりのしたあかきか如く。貪愛瞋憎のくもきりに信心はおほはるれとも。往生にさはりあるへからすとなり。獲信見敬得大慶。といふは。この信心をえておほきに

らゐを龍樹菩薩は即時入必定とのたまへり。曇鸞和尚は入正定聚之數とおしへたまへり。これはすなはち彌勒のくらゐとひとしとなり。證大涅槃とまふすは。必至滅度の願成就のゆへに。かならす大般涅槃をさとるとしるへし。如來所以興出世といふは。諸佛のよにいてたまふゆへとまふすみことなり。唯說彌陀本願海といふは。諸佛のよにいてたまふ御本懷は。ひとへに願海一乘の法をとかむとなり。しかれは大經には如來所以興出於世欲拯群萠惠以眞實之利とときたまへり。五濁惡時群生海應信如來如實言といふは。よろつの衆生如來のこのみことをふかく信受すへしとなり。能發一念喜愛心といふは。一念慶喜の眞實信。よく發すれはかならす本願の實報土にむまるとしるへし。不斷煩惱得涅槃といふは。煩惱具足せるわれら。無上大涅槃にいたるなりとしるへし。凡聖逆謗齊廻入といふは。小聖

尊號眞像銘文末

重といふは。彌陀の願力は生死大海のおほきなるふねいかたなり。極惡深重のみなりともなけくへからすさのたまへるなり。倩思敎授恩德實等彌陀悲願者。といふは。師主のおしへをおもふに。彌陀の悲願にひとしとなり。大師聖人のおしへの恩。おもくふかきことをおもひしるへしとなり。粉骨可報之摧身可謝之といふは。大師聖人の御おしへの恩德のおもきことをしりて。ほねをこにしても報すへしとなり。身をくたきても恩をむくふへしとなり。よく〱この和尙のこのおしへを御覽すへしと。

愚禿親鸞正信偈にいはく。

本願名號正定業といふは。選擇本願の行なり。至心信樂願爲因といふは。彌陀如來廻向の眞實心を阿耨菩提の因とすへしとなり。成等覺證大涅槃といふは。成等覺といふは。正定聚のくらゐなり。このく

大師聖人とあお（を一本）きたのみたまふ御ことはなり。爲釋尊之使者弘念佛之一門といふは。源空聖人は釋迦如來の御つかひとして。念佛一門をひろめたまふとしるへしとなり。爲善導之再誕勸稱名之一行といふは。聖人は善導和尚の後身として。稱名の一行をすゝめたまふなりとしるへしとなり。專修專念之行自此漸弘無間無餘之勤（在今始知一本）。といふは。一向專修とまふすことは。これよりひろまるとしるへしとなり。然則破戒罪根之輩加肩入往生之道といふは。破戒無戒の人罪業ふかきもの。みな往生すとしるへしとなり。下智淺才之類振臂赴淨土之門といふは。無智無才のものは淨土門におもむくへしとなり。誠智無明長夜之大燈炬也何悲智眼闇といふは。まことにしりぬ。彌陀の誓願は無明長夜のおほきなるともしひなり。なむそ智慧のまなこくらしとかなしまむやとおもへとなり。生死大海之大船筏也豈煩業障

密教なり。止觀は法華なり。獼猴情難覺（―こう一本學一本）といふは。われらかこゝろをさるのこゝろにたとへたるなり。さるのこゝろのことくさたまらすとなり。このゆへに眞言法華の行は修しかたく行しかたしとなり。三論法相之教牛羊眼易迷といふは。われらかまなこをうしひつしのまなこにたとへて。三論法相宗等の聖道自力の教にはまとふへしとのたまへるなり。然至我宗者といふは。聖覺和尙ののたまはく。わか淨土宗は。彌陀の本願の實報土の正因として。十聲稱念すれは無上菩提にいたるとおしへ（を一本下同）たまふ。善導和尙の御おしへには。三心を具すれはかならす安樂にむまるとのたまへるなりと。聖覺和尙ののたまへるなり。雖非利知精進といふは。智慧もなく精進のみにもあらす。鈍根懈怠のもののも。專修專念の信心をえつれは。往生すとこゝろうへしとなり。然我大師聖人といふは。聖覺和尙は聖人をわか

夫根有利鈍者といふは。それ衆生の根性に利鈍ありとなり。利といふはこゝろのときひとなり。鈍といふはこゝろのにふきひとなり。教有漸頓といふは。衆生の根性にしたかふて佛教に漸頓ありとなり。漸はやうやく佛道を修して。三祇百大劫をへて佛になるなり。頓はこの娑婆世界にして。このみにてたちまちに佛になるとまふすなり。これすなはち佛心眞言法華華嚴等のさとりをひらくなり。機有奢促者といふは。機に奢促あり。奢はおそきこゝろなるものあり。促はときこゝろなるものあり。このゆへに行有難易といへり。行につきて難あり。易ありとなり。難は聖道門自力の行なり。易は淨土門他力の行なり。當知聖道諸門漸教也といふは。すなはち難行なり。また漸教なりとしるへしとなり。淨土一宗者といふは。頓教なり。また易行なりとしるへしとなり。所謂眞言止觀之行といふは。眞言は

者即是稱佛名といふは。正定の業因はすなはちこれ佛名を稱するなり。正定の因といふはかならす無上涅槃のさとりをひらくたねとまふすなり。稱名必得生依佛本願故といふは。佛のみなを稱するはかならす安養淨土に徃生をうるなり。佛の本願によるかゆへなりとのたまへり。

又曰當知生死之家といふは。まさにしるへし。生死のいゑといふなり。以疑爲所止といふは。大願の不思議力をうたかふこゝろをもて。六道四生二十五有にとゝまるなり。いまにまよふとしるへしとなり。涅槃之城といふは。安養淨刹をまふすなり。これを涅槃のみやことはまふすなり。以信爲能入といふは。眞實の信心をえたる人のみ本願の實報土によくいるとしるへしとなり。法印聖覺和尚のゝたまはく。

又曰。夫速欲離生死といふは。それすみやかにとく生死をはなれんとおもへといふなり。二種勝法中且閣聖道門といふは。「（」下二十字一本によりて加）二種勝法は聖道浄土の二門なり。且閣聖道門は。且閣はしはらくさし（を一本下同）おけとなり。しはらく聖道門をさしおくへしとなり。選入浄土門といふは。選入はえらひていれとなり。よろつの善法の中に。えらひて浄土門にいるへしとなり。欲入浄土門といふは。浄土門にいらむとおもはゝといふなり。正雑二行中且抛諸雑行といふは。正雑二行ふたつのなかに。しはらくもろ〳〵の雑行をなけすてさしおくへしとなり。選応帰正行といふは。えらひて正行に帰すへしとなり。欲修於正行正助二業中猶傍於助業といふは。正行を修せむとおもはゝ。正業助業ふたつのなかに。助業をさしおくへしとなり　選応専正定といふは。えらひて正定の業をふたつゝろなく修すへしとなり。正定之業

り。雖不能見といふは。煩惱のまなこにて。佛をみたてまつることあたはすといへともといふなり。大悲無倦といふは。大慈大悲の御めくみ。ものうきことましまさすとまふすなり。常照我身といふは。常はつねにといふ。照は無碍の光明信心の人をつねにてらしたまふとなり。つねにてらすといふは。つねにまもりたまふとなり。我身は。わかみを大慈大悲心ものうきことなく。つねにまもりたまふとおもへとなり。攝取不捨のこゝろをあらはしたまふ。念佛衆生攝取不捨の文を釋したまへるなり。

日本源空聖人のゝたまはく。

選擇本願念佛集にいはく。南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本といふは。安養淨刹の往生の正因は。念佛を本とすとまふすことなり。正因といふは。淨土へむまるゝたねとまふすなり。

えたる人なり。つねにまもりたまふとまふすは。天魔波旬にやふられす。悪鬼悪神にみたられす。摂取不捨したまふゆへなり。摂護不捨といふは。おさめまもりてらすとなり。總不論照摂餘雑業行者といふは。總はすへてといふ。みなといふ。すへて雑行雑修の人をはみなてらさす。おさめまもりたまはすとなり。てらしまもりたまはすとまふすは。摂取不捨の利益にあつからすとなり。本願の行者にあらさるゆへなりとしるへし。しかれは摂護不捨と釋したまはす。現生護念増上縁といふは。このよにてまもりたまふとまふすみことなり。増上縁はすくれたる強縁なりとなり。

首楞嚴院源信和尚のたまはく。

我亦在彼摂取之中といふは。われまたかの摂取のなかにありとのたまへるなり。煩悩障眼といふは。われら煩悩にまなこさへらるとな

は。ひころの稱念の功によりて最後臨終のとき。はしめて善知識のすゝめにあふて。信心をえむとき。願力攝して往生をうるものもあるへしとなり。臨終の來迎をまつものはかくのことくなるへしと。

又曰。言護念增上緣者といふは。まことの信心をえたるひとを。このよにてつねにまもりたまふとまふすとなり。但有專念阿彌陀佛衆生といふは。ひとすちにふたこゝろなく。彌陀佛を念したてまつるとまふすなり。彼佛心光常照是人といふは。彼はかのといふ。佛心光は無碍光佛の御こゝろとまふすなり。常照はつねにてらすとまふす。つねといふは。ときをきらはす。日をへたてす。ところをわかす。まことの信心ある人をは。つねにてらしたまふなり。てらすといふは。かの佛心光におさめとりたまふとなり。佛心光はすなはち阿彌陀佛の御こゝろにをさめと〔一本無〕りたまふとしるへし。是人は信心を

ふは願力にのせたまふとしるなり。願力にのせて安養淨刹にむまれしむるとなり。若不生者不取正覺といふは。ちかひを信したるもの。もし本願の實報土にむまれすは。佛にならしとちかひたまへる御のりなり。此即是願往生行人といふは。これすなはち往生をねかふ人といふなり。命欲終時といふは。いのちおはらむとせむときといふ。願力攝得往生といふは。大願業力攝取して。往生をえしむといへるこゝろなり。すてに尋常のとき信樂をえたる人なり。臨終のときはしめて信心決定して。攝取にあつかるものにあらす。ひころかの心光に攝護せられまひらせたる金剛心をえたる人なれは。正定聚に住するゆへに。臨終のときにあらす。かねて尋常のときよりつねに攝護してすてたまはされは。攝得往生とまふすなり。このゆへに攝生増上縁となつくるなり。またまことに尋常のときより信なからむ人

然ははしめてはからはすとなり。

又曰。言攝生增上緣者といふは。攝生は十方衆生を誓願におさめとりたまふとまふすこゝろなり。如無量壽經四十八願中說といふは。如來の本願をときたまへるみことなりとしるへしとなり。若我成佛とまふすは。法藏菩薩ちかひたまはく。もしわれ佛になりたらむときとなり。十方衆生といふは。十方のよろつの衆生なり。すなはちわれらなり。願生我國といふは。安養淨刹にむまれむとねかへとなり。稱我名字といふは。われ佛にな。らむにゝわかなをとなへられむとなり。下至十聲といふは。名字をとなへられむこと。しもとこゑせむものとなり。下至といふは。十聲にあまれるもの。一念二念。聞名のものを。往生にもらさすきらはぬことをあらはししめす。なり。乗我願力といふは。乗はのるへしといふ。また智なり。智とい

尊號眞像銘文 末

善導和尙ののたまはく。言南無者といふは。南無はすなはち歸命とまふすことなり。歸命はすなはち釋迦彌陀の二尊の勅命にしたかひめしにかなふとまふすことはなり。このゆへに即是歸命とのたまへり。亦是發願廻向之義といふは。二尊のめしにしたかふて。安樂淨土にむまれむとねかふこゝろなりとのたまへるなり。言阿彌陀佛者といふは。即是其行とのたまへり。即是其行は。これすなはち法藏菩薩の選擇の本願なり。安養淨土の正定の業因なりとのたまへること ゝろなり。以斯義故といふは。この義をもてのゆへにといへること ゝろなり。必得往生といふは。かならす往生をえしむといふなり。必はかならすといふ。かならすといふは自然のこゝろをあらはす。自

尊號眞像銘文末

いふは。うたかふこゝろのくもをなかくはらしぬれは。安樂淨土へかならすむまるゝなり。無碍光佛の攝取不捨の心光をもて。信心をえたるひとをつねにてらしたまふゆへに。佛光圓頂といへり。佛光圓頂といふは。佛心のひかりあきらかに。信心のひとのいたゝきをつねにてらしたまふとほめたまへるなり。

尊號眞像銘文 本

るなり。皆見といふは。化佛菩薩をみむとおもふ人は。みなみたてまつるとなり。化佛菩薩とまふすは。彌陀の化佛觀音勢至等の聖衆なり。明知稱名とまふすは。あきらかにしりぬ。佛のみなをとなふれは往生すといふことを要術といふ。往生の要には。如來のみなをとなふるにすきたることなしとなり。宜哉源空とまふすは。宜哉はよしといふなり。源空は聖人の御ななり。慕道化物といふは。慕道は無上道をねかひしたふといふなり。化物といふは衆生を利益すとまふすなり。信珠在心といふは。金剛の信心をめてたきたまにたとへたまふ。信心のたまをこゝろにえたる人は。生死のやみにまとはさるゆへに。心照迷境といふなり。心照迷境といふは。信心のたまをもて愚癡のやみをはらひあきらかにてらすとなり。疑雲永晴といふは。疑雲は願力をうたかふこゝろくもにたとへたるなり。永晴と

のかたの罪業を懺悔するになるとまふすなり。即發願廻回といふは。南無阿彌陀佛をとなふるは。すなはち安樂淨土に往生せむとおもふになる。と一本なり。一切善根莊嚴淨土といふは。阿彌陀の三字に一切善根をおさめたまへるゆへに。名號をとなふれは。淨土を莊嚴するになるとしるへしとなり。智榮禪師。善導をほめたまへるなり。

日本源空聖人の銘にいはく。

四明山權律師劉官讚普勸道俗念彌陀佛といふは。普勸はあまねくすゝむとなり。道俗は道にふたりあり。俗にふたりあり。道のふたりは一には僧。二には比丘尼なり。俗にふたりは。一には佛のみのりを信し行する男なり。二には佛のみのりを信し行する女なり。念彌陀佛とまふすは。尊號を稱念するなり。能念皆見化佛菩薩とまふすは。能念はよく尊號を念すといふ。よく念すといふは。ふかく信す

するひとは。むなしくこゝにとゞまらすとなり。能令速滿足功德大寶海といふは。能はよしといふ。令はせしむといふ。速はすみやかにとしといふ。よく本願力を信樂するひとは。すみやかにとく功德の大寶海を。信者のそのみに滿足せしむるなり。如來の功德のきはなくひろくおほきなることを。大海のみつのみちみてるかことしとたとへたてまつれるなり。

光明寺善導和尚の銘にいはく。智榮とまふすは震旦の聖人なり。善導の別德をほめたまふていはく。善導は阿彌陀佛の化身なりとのたまへり。稱佛六字といふは。南無阿彌陀佛の六字をとなふるとなり。即嘆佛といふは。すなはち南無阿彌陀佛をとなふるは。ほめたてまつることはになるとなり。また即懺悔といふは。南無阿彌陀佛をとなふるは。すなはち無始よりこ

實功德相といふは。我は天親論主のわれとなのりたまへる御ことはなり。依はよるといふ。修多羅によるとなり。修多羅は天竺のことは。佛の經典をまふすなり。佛敎に大乘あり。また小乘あり。みな修多羅とまふす。いま修多羅とまふすは。大乘なり。小乘にはあらす。いまの三部の經典は大乘修多羅なり。この三部大乘によるとなり。眞實功德相といふは。誓願の尊號なり。說願偈總持といふは。本願の心をあらはすことはを偈といふなり。總持といふは智慧なり。無碍光の智を總持とまふすなり。與佛敎相應といふは。この論の心は釋尊の敎勅彌陀の誓願にあひかなへりとなり。觀彼世界相勝過三界道といふは。かの安樂世界をみそなはすに。ほとりきはなきこと虛空のことし。ひろくおほきなること虛空のことしとなり。觀佛本願力遇無空過者といふは。如來の本願力をみそなはすに。願力を信

は。世親菩薩のわかみとのたまへるなり。一心といふは。教主世尊のみことをふたこゝろなくうたかひなしとなり。すなはちこれまことの信心なり。歸命盡十方無碍光如來とまふすは。歸命は南無なり。歸命とまふすは。如來の勅命にしたかひたてまつるなりく盡十方無碍光如來とまふすは。すなはち阿彌陀如來なり。この如來は光明なり。盡十方といふは。盡はつくすといふ。ことことくといふ。十方世界をつくしてこと〲くみちたまへるなり。無碍といふは、さはることなしとなり。衆生の煩惱惡業にさへられさるなり。光如來とまふすは。阿彌陀佛なり。この如來はすなはち不可思議光佛とまふす。この如來は智慧の相なり。十方微塵刹土にみちたまへりとしるへしとなり。願生安樂國といふは。世親菩薩、かの無碍光佛の願行を信して。安樂國にむまれむとねかひたまへるなり。我依修多羅眞

其國不逆違自然之所牽といふは。其國はそのくにといふ。不逆違はさかさまならすといふ。たかはすとなり。逆はさかさまといふ。違はたかふといふなり。眞實信をえたるひとは。大願業力のゆへに。自然に淨土の業因たかはすして。かの業力にひかるゝゆへにゆきやすく。無上大涅槃にのほるにきはまりなしとのたまへるなり。しかれは自然之所牽とまふすなり。他力の至心信樂の業因の自然に。ひ（なり一本）くとなり。

婆藪（聖一本下同）般豆菩薩論曰といふは。婆藪般豆は天竺のことはなり。震旦には天親菩薩とまふす。またいまは世親菩薩とまふす。論曰は。世親菩薩。彌陀の本願を釋したまへる御ことを論といふなり。曰は。こゝろをあらはすことはなり。この論をは淨土論といふ。また往生論といふなり。世尊我一心といふは。世尊は釋迦如來なり。我といふ

のこゝろなり。横と超はすなはち他力眞宗の本意なり。截といふはきるといふ。五惡趣のきつなをよこさまにきるなり。惡趣自然閉といふは。願力に歸命すれは。五道生死をとつるゆへに自然閉といふなり。閉はとつといふ。本願の業因にひかれて自然に安樂にむまるゝなり。昇道無窮極といふは。昇はのほるといふ。のほるといふは無上涅槃にいたる。これを昇といふなり。道は大涅槃道なり。無窮極といふは。きはまりなしとなり。易往而無人といふは。易往はゆきやすしとなり。本願力に乘すれは。本願の實報土にむまるゝことうたかひなけれは。ゆきやすきなり。無人といふは。ひとなしといふ。ひとなしといふは。眞實信心の人はありかたきゆへに。實報土にむまるゝ人まれなりとなり。しかれは源信和尚は。報土にむまるゝ人はおほからす。化土にむまるゝ人はすくなからすとのたまへり。

むるをむねとすとおもへとなり。不退といふは佛にかならすなるへきみとさたまるくらゐなり。これすなはち正定聚のくらゐにいたるを。むねとすとときたまへるみのりなり。必得超絶去往生安養國といふは。必はかならすといふ。かならすといふは自然といふこゝろなり。得はえたりといふ。超はこえてといふ。絶はたちはなるといふ。去はすつといふ。ゆくといふ。さるといふ。娑婆世界をたちすて。流轉生死をこえはなれて。安養淨土に往生をうへしとなり。安養といふは。安樂淨土なり。横截五惡趣惡趣自然閉といふは。横はよこさまといふ。よこさまといふは。如來の願力を信するゆへに。行者のはからひにあらす。五惡趣を自然にたちすて。四生をはなるゝを横といふ。他力とまふすなり。これを横超といふなり。横は竪に對することはなり。超は迂に對することはなり。竪と迂とは自力聖道

といふは。唯除はたゞのぞくといふことゝはなり。五逆のつみひとをきらひ。謗法のおもきとかをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして。十方一切の衆生。みなもれす往生すへしとしらせむとなり。其佛本願力といふは。彌陀の本願力とまふすなり。聞名欲往生といふは。聞と云は。如來のちかひの御なを信すとまふすなり。欲往生といふは。安樂淨刹にむまれむとおもへとなり。皆悉到彼國といふは。御ちかひのみなを信して。むまれむとおもふ人は。みなもれすかの淨土にいたるとまふす御ことなり。自致不退轉といふは。自はおの（を一本下同）つからといふ。おのつからといふは衆生のはからひにあらす。しからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり。自然といふことはなり。致といふは。いたるといふ。むねとすといふ。如來の本願の御名を信するひとは。自然に不退のくらゐにいたらし

の至心信樂をもて。安樂淨土にむまれむとおもへとなり。乃至十念とまふすは。如來のちかひの名號をとなへむことを、すゝめたまふに。返數のさだまりなきほとをあらはし。時節をさためさるを衆生にしらせむとおほしめして。乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへるなり。如來より御ちかひをたまはりぬるには。尋常の時節をとりて。臨終の稱念をまつへからす。たゝ如來の至心信樂をふかくたのむへし。この眞實信心をえむとき。攝取不捨の心光にいりぬれは。正定聚のくらゐにさたまるとみえたり。若不生者不取正覺といふは。若不生者は。もしむまれすはといふみことなり。不取正覺は。佛にならしとちかひたまへる御のりなり。この本願のやうは。唯信鈔によく〳〵みえたり。唯信とまふすは。すなはちこの眞實信樂をひとすちにとるこゝろをまふすなり。唯除五逆誹謗正法

尊號眞像銘文 本

大無量壽經言といふは。四十八願をときたまへる經なり。設我得佛といふは。もしわれ佛になりたらむときといふ御ことはなり。十方衆生といふは。十方のよろつの衆生といふなり。至心信樂といふは。至心は眞實とまふすなり。眞實とまふすは。如來の御ちかひの眞實なるを至心とまふすなり。煩惱具足の衆生は。もとより眞實の心なし。淸淨の心なし。濁惡邪見のゆへなり。信樂といふは。如來の本願眞實にましますを。ふたこゝろなくふかく信してうたかはされは信樂とまふすなり。この至心信樂は。すなはち十方の衆生をして。わか眞實なる誓願を信樂すへしと。すゝめたまへる御ちかひの至心信樂なり。凡夫自力のこゝろにはあらす。欲生我國といふは。他力

尊號眞像銘文

光明寺釋云。含華未出。或生邊界。或墮宮胎。已憬興師云。由疑佛知。雖生彼國。而在邊地。不被聖化事。若胎生宜之重捨已これらの眞文にて。難思往生とまふすことを。よく／＼こゝろえさせたまふへし。

康元二年三月二日書寫之

愚禿親鸞 八十五歳

佛智故。生彼胎宮。乃至若此衆生。識其本罪。深自悔責。求離彼處。乃至彌勒當知。其有菩薩。生疑惑者。爲失大利。略鈔

又無量壽如來會言。佛告彌勒。若有衆生。隨於疑悔。積集善根。希求佛智。普偏智。不思議智。無等智。威德智。廣大智。於自善根。不能生信。以此因緣。於五百歲。住宮殿中。乃至阿逸多汝觀殊勝智者。彼因廣慧力故。受彼化生。於蓮華中。結跏趺坐。汝觀下劣之輩。乃至不能修習諸功德故。無因奉事無量壽佛。是諸人等。皆爲昔緣疑悔所致。乃至佛告彌勒。如是如是。若有隨於疑悔。種諸善根。希求佛智乃至廣大智。於自善根。不能生信。由聞佛名起信心故。雖生彼國。於蓮華中。不得出現。彼等衆生。處華胎中。猶如園苑宮殿之想。乃至略出

願成就文。經言。其胎生者。所處宮殿或百由旬。或五百由旬。各於其中受諸快樂。如忉利天上。亦皆自然。爾時慈氏菩薩。白佛言。世尊何因何緣。彼國人民胎生化生。佛告慈氏。若有衆生。以疑惑心。修諸功德。願生彼國、不了佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。無等無倫最上勝智。於此諸智。疑惑不信。然猶信罪福。修習善本。願生其國。此諸衆生。生彼宮殿。壽五百歲。常不見佛。不聞經法。不見菩薩聲聞聖衆。是故於彼國土謂之胎生。乃至彌勒當知。彼化生者。智慧勝故。其胎生者。皆無智慧。乃至佛告彌勒。譬如轉輪聖王有七寶牢獄。種種莊嚴。張設牀帳。懸諸繒幡。若諸小王子。得罪於王。輒内彼獄中。繫以金鎖。乃至佛告彌勒。此諸衆生。亦復如是。以疑惑、

稱不可說不可思議の大悲の誓願をうたがふ。そのつみふかくおもくして。七寶の牢獄にいましめられて。いのち五百歳のあひた。自在なることあたはす。三寶をみたてまつらす。つかへたてまつることなしと。如來はときたまへり。しかれとも。如來の尊號を稱念するゆへに。胎宮にとゝまる。德號によるかゆへに。難思往生とまふすなり。不可思議の誓願疑惑するつみによりて。難思議往生とはまふさすとしるへきなり。植諸德本の願文。大經言。設我得佛。十方衆生。聞我名號。係念我國。植諸德本。至心廻向。欲生我國。不果遂者。不取正覺。文

同本異譯無量壽如來會言。若我成佛。無量國中所有衆生。聞說我名。以己善根。廻向極樂。若不生者。不取菩提。文

云此經下文言。何以故。皆由懈慢執心不牢固。是知。雜修之者爲執心不牢之人。故生懈慢國也。若不雜修專行此業。此即執心牢固。定生極樂國。乃至又報淨土生者極少化淨土中者生不少。故經別說實不相違也。已上略出 これらの文のこゝろにて。雙樹林下往生とまふすことを。よくよくこゝろえたまふへし。

彌陀經往生といふは。植諸德本の誓願によりて。不果遂者の眞門にいり。善本德本の名號をえらひて。萬善諸行の少善をさしおく。しかりといへとも。定散自力の行人は。不可思議の佛智を疑惑して信受せす。如來の尊號をおのれか善根として。みつから淨土に廻向して。果遂のちかひをたのむ。不可思議の名號を稱念しなから。不可

其道場樹無量光色高四百萬里者。不取正覺。文

道場樹願成就文。經言。又無量壽佛。其道場樹高四百萬里。其本周圍五十由旬。枝葉四布二十萬里。一切衆寶自然合成。以月光摩尼持海輪寶衆寶之王。而莊嚴之。周匝條間。垂寶瓔珞。百千萬色種種異變。無量光炎照耀無極。珍妙寶網羅覆其上。乃至一切皆得甚深法忍。住不退轉。至成佛道。六根清徹。無諸惱患。已上略出

首楞嚴院要集引感禪師釋いはく。問。菩薩處胎經第二說。西方去此閻浮提十二億那由佗有懈慢界。乃至發意衆生欲生阿彌陀佛國者。深著懈慢國土。不能前進生阿彌陀佛國。億千萬衆時有一人。能生阿彌陀佛國云云。以此經准難。可得生。答。群疑論引善導和尚前文而釋此難。又自助成

應發無上菩提之心。修行功德。願生彼國。佛語阿難。其中輩者。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。雖不能行作沙門大修功德。當發無上菩提之心。一向專念無量壽佛。多少修善。奉持齋戒。起立塔像。飯食沙門。懸繒燃燈。散華燒香。以此廻向。願生彼國。其人臨終。乃至具如眞佛。與諸大衆現其人前。乃至佛告阿難。其下輩者。十方世界諸天人民。其有至心欲生彼國。假使不能作諸功德。當發無上菩提之心。一向專意。乃至十念。念無量壽佛。願生其國。若聞深法。歡喜信樂。不生疑惑。乃至一念。念於彼佛。以至誠心。願生其國。此人臨終。夢見彼佛。亦得往生。功德智慧次如中輩者也。已上略鈔

大經言。設我得佛。國中菩薩。乃至少功德者。不能知見

發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不與大衆圍繞現其人前者。不取正覺。文

又悲華經大施品言。願我成阿耨多羅三藐三菩提已。其餘無量無邊阿僧祇諸佛世界所有衆生。若發阿耨多羅三藐三菩提心。修諸善根。欲生我界者。臨終之時。我當與大衆圍繞現其人前。其人見我。即於我前。得心歡喜。以見我故。離諸障閡。即便捨身。來生我界。文

至心發願の成就文。大經言。佛告阿難。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。凡有三輩。其上輩者。捨家棄欲而作沙門。發菩提心。一向專念無量壽佛。修諸功德。願生彼國。此等衆生。臨壽終時。無量壽佛與諸大衆現其人前。乃至阿難。其有衆生。欲於今世見無量壽佛。

經優婆提舍願生偈曰。云何廻向。不捨一切苦惱衆生。心常作願。廻向爲首。得成就大悲心故。これは大無量壽經の宗致としたまへり。これを難思議往生とまふすなり。

觀經往生といふは。修諸功德の願により。至心發願のちかひにいりて。萬善諸行の自善を廻向して。淨土を忻慕せしむるなり。しかれは無量壽佛。觀經には定善散善。三福九品の諸善。あるいは自力の稱名念佛をときて。九品往生をすゝめたまへり。これは他力の中に。自力を宗致としたまへり。このゆへに觀經往生とまふすは。これみな方便化土の往生なり。これを雙樹林下往生とまふすなり。至心發願の願。大經に言。設我得佛。十方衆生。

これをこゝろえて。佗力には義なきを義とすとしるへし。二還相廻向といふは。浄土論曰。以本願力廻向故。是名出第五門。これは還相の廻向なり。一生補處の悲願にあらわれたり。大慈大悲の願。大經にのたまはく。設我得佛。佗方佛土諸菩薩衆。來生我國。究竟必至一生補處。除其本願自在所化。爲衆生故。被弘誓鎧。積累德本。度脫一切。遊諸佛國。修菩薩行。供養十方諸佛如來。開化恆沙無量衆生。使立無上正眞之道。超出常倫。諸地之行現前。修習普賢之德。若不爾者。不取正覺。文 この悲願は。如來の還相廻向の御ちかひなり。如來の二種の廻向によりて。眞實の信樂をうる人は。かならす正定聚のくらゐに住するかゆへに。佗力とまふすなり。しかれは無量壽

生。卽入正定聚。此是國土名字爲佛事。安可思議。乃至莊嚴眷屬功德成就者。偈言如來淨華衆正覺華化生故。此云何不思議。凡是雜生世界。若胎若卵。若濕若化。眷屬若干。苦樂萬品。以雜業故。彼安樂國土。莫非是阿彌陀如來正覺淨華之所化生。同一念佛無別道故。遠通夫四海之內皆爲兄弟也。眷屬無量。焉可思議。又言願往生者。本則三三之品。今無一二之殊。亦如淄澠食陵反一味。焉可思議。已上又論曰。莊嚴淸淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。此云何不思議。有凡夫人煩惱成就。亦得生彼淨土。三界繫業。畢竟不牽。則是不斷煩惱得涅槃分。焉可思議。已上鈔要 この阿彌陀如來の往相廻向の選擇本願をみたてまつるなり。これを難思議往生とまふす。

國者。皆悉住於正定之聚。所以者何。彼佛國中。無諸邪聚及不定聚。文

又如來會言。彼國衆生。若當生者。皆悉究竟無上菩提。到涅槃處。何以故。若邪定聚及不定聚。不能了知建立彼因故。已上抄要この眞實の稱名と。眞實の信樂をえたる人は。すなわち正定聚のくらゐに住せしめむとちかひたまへるなり。この正定聚に住するを。等正覺をなるとものたまへるなり。等正覺とまふすは。すなわち補處の彌勒菩薩とおなしくらゐとなるとときたまへり。しかれは大經には。次如彌勒とのたまへり。淨土論曰。莊嚴妙聲功德成就者。偈言梵聲悟深遠微妙聞十方故。此云何不思議。經言。若人但聞彼國土清淨安樂。尅念願生。亦得往

乃至十念。若不生者。不取菩提。唯除造無間惡業。誹謗正法及諸聖人。文

また眞實證果あり。すなわち必至滅度の悲願にあらわれたり。證果の悲願。大經にのたまはく。設我得佛。國中人天。不住定聚必至滅度者。不取正覺。文

同本異譯無量壽如來會言。若我成佛。國中有情。若不決定成等正覺。證大涅槃者。不取菩提。文

無量壽如來會言。他方佛國諸有衆生。聞無量壽如來名號。能發一念淨信。歡喜愛樂。所有善根迴向。願生無量壽國者。隨願皆生。得不退轉乃至無上正等菩提。除五無間誹謗正法及謗聖者。

必至滅度證大涅槃願成就文。大經言。其有衆生。生彼

たまはく。設我得佛。十方世界無量諸佛。不悉咨嗟稱我名者。不取正覺。文

稱名信樂悲願成就文經言。十方恆沙諸佛如來。皆共讃嘆無量壽佛威神功德不可思議。所有衆生。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心廻向。願生彼國。即得往生。住不退轉。唯除五逆誹謗正法。文

また眞實信心あり。すなわち念佛往生の悲願にあらわれたり。信樂の悲願は。大經にのたまはく。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆誹謗正法。文

同本異譯無量壽如來會言。若我證得無上覺時。餘佛刹中諸有情類。聞我名已。所有善根心心廻向。願生我國。

校異

淨土三經往生文類

大經往生といふは。如來選擇の本願。不可思議の願海。これを他力とまふすなり。これすなわち念佛往生の願因によりて。必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して。かならす眞實報土にいたる。これは阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるかゆゑに。無上涅槃のさとりをひらく。これを大經の宗致とす。このゆゑに大經往生とまふす。また難思議往生とまふすなり。この如來の往相廻向につきて。眞實の行業あり。すなわち諸佛稱名の悲願にあらわれたり。稱名の悲願は。大無量壽經にの

由レ疑ニ佛智一。雖レ生ニ彼國一、而在ニ邊地一。不レ被ニ聖化一事。若胎生宜ニ之重捨一上已これらの眞文にて。難思往生とまふすことを。よくくこゝろうへし。

淨土三經往生文類

建長七歳乙卯八月六日

愚禿親鸞八十三歳書之

菩提。

又言。無量壽如來會言。佛告彌勒。若有衆生。隨於疑悔。積集善根。希求佛智。普徧智。不思議智。無等智。威德智。廣大智。於自善根。不能生信。以此因緣。於五百歲。住宮殿中。乃至阿逸多汝觀殊勝智者。彼因廣慧力故。受彼化生。於蓮華中。結跏趺坐。汝觀下劣之輩。乃至不能修習諸功德。故無因奉事無量壽佛。是諸人等。皆爲昔緣疑悔所致。乃至佛告彌勒。如是如是。若有隨於疑悔。種諸善根。希求佛智乃至廣大智。於自善根。不能生信。由聞佛名。起信心故。雖生彼國。於蓮華中。不得出現。彼等衆生。處華胎中。猶如園苑宮殿之想。已上略鈔

光明寺釋云。含華未出。或生邊界。或墮宮殿。已上憬興師云。

佛智。不思議智。不可稱智。大乘廣智。無等無倫最上勝智。於此諸智。疑惑不信。然猶信罪福。修習善本。願生其國。此諸衆生。生彼宮殿。壽五百歲。常不見佛。不聞經法。不見菩薩聲聞聖衆。是故彼國土。謂之胎生。乃至彌勒當知。彼化生者。智慧勝故。其胎生者。皆無智慧。乃至佛告彌勒。譬如轉輪聖王有七寶牢獄。種種莊嚴。張設牀帳。懸諸繒幡。若諸小王子。得罪於王。輙內彼獄中。繫以金鎖。乃至佛告彌勒。此諸衆生。亦復如是。以疑惑佛智故。生彼胎宮。乃至若此衆生。識其本罪。深自悔責。求離彼處。乃至彌勒當知。其有菩薩。生疑惑者。爲失大利。已上略鈔

植諸德本願文。無量壽如來會言。若我成佛。無量國中所有衆生。聞說我名。以己善根。廻向極樂。若不生者。不取

陀經往生といふ。他力の中の自力なり。尊號を稱するゆゑに。疑城胎宮にむまるといへども。不可稱不可說不可思議の他力をうたがふ。そのつみおもくして牢獄にいましめられて。いのち五百歲なり。尊號の德によるかゆゑに。難思往生とまふすなり。

植諸德本願文。大經言。設我得佛。十方衆生。聞我名號。係念我國。植諸德本。至心廻向。欲生我國。不果遂者。不取正覺。

又言。其胎生者。所處宮殿或百由旬。或五百由旬。各於其中。受諸快樂。如忉利天上。亦皆自然。爾時慈氏菩薩白佛言。世尊何因何緣。彼國人民胎生化生。佛告慈氏。若有衆生。以疑惑心。修諸功德。願生彼國。不了

此經下文言。何以故。皆由懈慢執心不牢固。是知。雜修之者。爲執心不牢之人。故生懈慢國也。若不雜修專行此業。此即執心牢固。定生極樂國。乃至又報淨土生者極少化淨土中生者不少故。經別說實不相違也。已上略鈔 これらの文のこゝろにて。雙樹林下往生とまふすことを。よくよくこゝろえたまふへし。

彌陀經往生といふは。不果遂者の誓願によりて。植諸德本の眞門にいる。諸善萬行を貶して。少善根となつけたり。善本の名號をえらひて。多善根多功德とのたまへり。しかるに係念我國の人。不可思議の佛力を疑惑して信受せす。善本德本の尊號をおのれか善根とす。みつから淨土に廻向せしむ。これを彌陀經の宗とす。このゆゑに彌

間。垂寶瓔珞。百千萬色。種種異變。無量光炎照耀無極。珍妙寶網羅覆其上。一切莊嚴隨應而現。微風徐動吹諸枝葉。演出無量妙法音聲。其聲流布徧諸佛國。其聞音者。得深法忍。住不退轉。至成佛道。耳根淸徹。不遭苦患。目覩其色。耳聞其音。鼻知其香。舌嘗其味。身觸其光。心以法緣。一切皆得甚深法忍。住不退轉。至成佛道。六根淸徹。無諸惱患。略抄

首楞嚴院要集引感禪師釋云。問。菩薩處胎經第二說。西方去此閻浮提十二億那由佗有懈慢界。乃至發意衆生。欲生阿彌陀佛國者。深著懈慢國土。不能前進生阿彌陀佛國。億千萬衆時有一人。能生阿彌陀佛國云云。以此經准難可得生。答。群疑論引善導和尙前文而釋此難。又自助成云。

眞佛。與諸大衆。現其人前。即隨化佛。往生其國。住不退轉。功德智慧。次如上輩者也。佛告阿難。其下輩者。十方世界諸天人民。其有至心欲生彼國。假使不能作諸功德。當發無上菩提之心。一向專意乃至十念。念無量壽佛。願生其國。若聞深法。歡喜信樂。不生疑惑。乃至一念。念於彼佛。以至誠心。願生其國。此人臨終夢見彼佛。亦得往生。功德智慧。次如中輩者也。

道場樹願文。 大經言。設我得佛。國中菩薩乃至少功德者。不能知見其道場樹無量光色高四百萬里者。不取正覺。

道場樹願成就文。 經言。又無量壽佛。其道場樹高四百萬里。其本周圍五十由旬。枝葉四布二十萬里。一切衆寶自然合成。以月光摩尼持海輪寶衆寶之王而莊嚴之。周匝條

修諸功德願成就文。大經言。佛告阿難。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。凡有三輩。其上輩者。捨家棄欲。而作沙門。發菩提心。一向專念無量壽佛。修諸功德。願生彼國。此等衆生。臨壽終時。無量壽佛與諸大衆。現其人前。即隨彼佛往生其國。便於七寶華中自然化生。住不退轉。智慧勇猛。神通自在。是故阿難。其有衆生。欲於今世見無量壽佛。應發無上菩提之心修行功德願生彼國。佛語阿難。其中輩者。十方世界諸天人民。其有至心願生彼國。雖不能行作沙門大修功德。當發無上菩提之心。一向專念無量壽佛。多少修善。奉持齋戒。起立塔像。飯食沙門。懸繒燃燈。散華燒香。以此廻向願生彼國。其人臨終。無量壽佛化現其身。光明相好具如

の諸善をときて。九品往生をすゝめしむ。これ他力の中に自力なり。これを觀經の宗とす。このゆへに觀經往生といふ。みな方便化土の往生なり。これを雙樹林下往生とまふすなり。

修諸功德願文。大經言。設我得佛。十方衆生。發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不與大衆圍繞現其人前者。不取正覺。

修諸功德願文。悲華經大施品言。願我成阿耨多羅三藐三菩提已。其餘無量無邊阿僧祇諸佛世界所有衆生。若發阿耨多羅三藐三菩提心。修諸善根。欲生我界者。臨終之時。我當與大衆圍繞現其人前。其人見我。即於我前。得心歡喜。以見我故。離諸障閡。即便捨身來生我界。

非是阿彌陀如來正覺淨華之所花生。同一念佛無別道。故遠通。夫四海之內皆爲兄弟也。眷屬無量。焉可思議。已上鈔要

又言。願往生者。本則三三之品。今無一二之殊。亦如淄澠食陵反一味。焉可思議。已上

又論曰。莊嚴淸淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。此云何不思議。有凡夫人煩惱成就。亦得生彼淨土。三界繫業。畢竟不牽。則是不斷煩惱得涅槃分。焉可思議。已上鈔要

いまこの眞文をよく〳〵こゝろえて。難思議往生の義をしるへしとなり。

觀經往生といふは。修諸功德の願により。至心發願のちかひにいりて。萬善諸行の自善を廻向して。淨土を忻慕せしむ。無量壽佛觀經に。定善散善を分別し。三福九品

量壽如來名號。能發一念淨信。歡喜愛樂。所有善根廻向。願生無量壽國者。隨願皆生。得不退轉乃至無上正等菩提。除五無間誹謗正法及誹謗聖者。

必至滅度願成就文。如來會言。彼國衆生。若當生者。皆悉究竟無上菩提。到涅槃處。何以故。若邪定聚及不定聚。不能了知建立彼因故。已上 要鈔

淨土論曰。莊嚴妙聲功德成就者。偈言梵聲悟深遠微妙聞十方故。此云何不思議。經言。若人但聞彼國土清淨安樂。尅念願生。亦得往生。即入正定聚。此是國土名字爲佛事。安可思議。乃至 莊嚴眷屬功德成就者。偈言如來淨華衆正覺華化生故。此云何不思議。凡是雜生世界。若胎若卵。若濕若化。眷屬若干。苦樂萬品。以雜業故。彼安樂國土。莫

至心信樂本願文。無量壽如來會言。若我證得無上覺時餘佛刹中諸有情類。聞我名已。所有善根心心迴向。願生我國。乃至十念。若不生者。不取菩提。唯除造無間惡業誹謗正法及諸聖人。

必至滅度願文。大經言。設我得佛。國中人天。不住定聚必至滅度者。不取正覺。

必至滅度願文。無量壽如來會言。若我成佛。國中有情。若不決定成等正覺證大涅槃者。不取菩提。

本願成就文。經言。諸有衆生。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心迴向。願生彼國。即得往生。住不退轉。唯除五逆誹謗正法。

本願成就文。無量壽如來會言。佗方佛國諸有衆生。聞無

淨土三經往生文類

大經往生といふは。如來選擇の本願。不可思議の願海。これを佗力とまふす。これすなはち念佛往生の願因いたふれさよりて。必至滅度の願果をうるなり。現生正定聚のくらゐに住して。かならず眞實報土にいたる。これは阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるかゆゑに。無上涅槃さとりをひらく。これを大經の宗とす。このゆゑに大經往生とまふす。また難思議往生とまふすなり。

至心信樂本願文。大經言。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆誹謗正法。

淨土三經往生文類

已上一百十四首

日本記平氏撰聖德太子傳上宮紀諸樂古京藥師寺沙門景戒撰日本現報善惡靈異記等見矣也

康元二歲丁巳二月卅日

愚禿親鸞八十五歲

眞蹟在二八代顧永寺一平假字文字也

聖德太子和讃

十人一度にまうすことを
ひとりももらさずきこしめす
ことはりいますによりてこそ
とよきゝみゝとはまうしけれ

皇子の御誕生のか
御ありさまをたづぬれば
僧の威儀にていますゆへ
聖徳太子とまうすなり

勝鬘法華經等の
義疏をつくりてひろめしめ
有情をわたしたまふゆへ
聖徳太子とまうすなり

王宮のみなみにすましめて
儲君とあがめまし〳〵て
まつりことをまかせてぞ
上宮太子とまうしける

百濟國よりたてまつる
石の彌勒菩薩は
ふるきみやこの元興寺の
東の精舍におはします
太子のつくりておはします
御てらそのかずあまたなり
四天王寺　法隆寺
中宮寺　橘寺

蜂岡寺　池後寺
葛城寺　日向寺
このほか御寺きこゆれと
傳記緣起をひらくへし
太子の御名はあまたいます
厩戸豐聽耳皇子なり
御むまれところゆへ
厩戸ともあらはせり

ひとたひいななきよはゝりて
たをれしぬとそみえたりし
そのかはねをはすなはちに
御廟のかたにうつまれき

太子崩御のその日にそ
衡山よりの御經は
にわかにうせまし〱ぬ
戀慕渇仰つきかたし

妹子かもちてわたれりし
經はかりこそいますなれ
まことにふしきおほきこと
奉讃きはなくあはれなり

新羅國よりたてまつる
釋迦牟尼佛の尊像は
やましな寺の東の
精舍にいまにおはします

太子みやこにまし〱て
きさきにかたりおはします
おゆあみみくしをあらはせて
きよき御衣をそきたまひし
われもろともにこよひは
さりなむとゆかをならへてそ
ふしまろひぬとみえたまふ
あくるあしたにひさしくも

御かほもとのことくにて
はなはたからはしくおはします
御とし四十九歳なり
佛法のともしひきえたまふ
くろこまいなゝきよはひけり
くさみつくはすかなしみて
御こしにしたかひまいりでぞ
御廟にいたりつきにける

太子みやこにかへりますのちにうえひとしにをはる太子かなしみましくてやうやくおさめおはしますうえひとしにてそののちにむらさきの御衣をとりよせてもとのことくに皇太子着服してそおはします

大臣已下の七人はそしりあやしむことしけし勅命をくたしましくてゆきて方岳をみるへしと臣下ゆきみるにかはねなしひつきはなはたかうはしくみなひとをとろきあやしみてまことにあたのひとならす

うえひとふしたるそのうへに
むらさきのうへの御衣を
といておほひまし〳〵て
御うたをたまひてのたまはく

しなてあるや
かたをかやまにいゝうえて
ふせるそのたひひと
あはれをやなし

うえひと頭をもちあけて
御かへりことをたてまつる
あはれかなしき御ことかな
奉讃まことにつきかたし

いかるかや
とみのおがはのたえはこそ
わかおほきみの
御なはわすれめ

われあまたの身をうけて
佛道をおこなひきたらしむ
わつかに小國の太子として
たへなるみのりを流布せしむ
法なきところに一乘の
深義をひろめときをきつ
五濁のあしき世世までも
ひさしくあそはむとおもはれす

きさきなみたをなかしてそ
かなしみあはれみまし〳〵き
太子難波よりしてそ
いかるかの宮にかへります
かたをか山のほとりにて
うえたるひとふしたりき
くろこまあゆますとゝまれり
太子むまよりをりてこそ

われしになんその日には
おなしくあなにうつむへし
きさきこたへてまうさしむ
千秋萬歳いふまても

あしたゆふへにいたるまて
つかへまつらんとそおもふ
いかなるこゝろいましてか
をはりことを令旨ある

太子こたへおはします
はしめあれはをはりある
さたまれるよのことはりを
ゆめ〳〵おとろきおもはされ

ひとたひかならすむまれしめ
ひとたひはかならすしぬること
人のつねのみちなれは
むかしもいまもたえぬなり

このうちにいりてこそ
さしはさめる一巻の
御経をとりて雲をしのき
さりまし〳〵しとこそかたりし
太子衡山にいりたまふ
そのときしりぬあきらかに
夢殿にいりまし〳〵し
ほとなりけりといふことを

上宮太子の后妃は
かしはての氏の夫人なり
御かたはらにさふらふに
太子かたりてのたまはく
君わかこゝろのことくにて
ひとつのこともたかはねは
まことにさいはいなりけりと
太子の御意にあひかなふ

百濟國よりきたれりし
道欣等の十人は
衡山にして法華を
ときたまひしそのときに
われらは盧岳の道士とて
とき〱まいりひと〱と
をの〱なのりまうして
太子の悲哀をあらはせる

妹子の大臣のちのとき
また衡山にわたされき
衡山にまたゆきたるに
老僧ひとりのこりてぞ
青龍の車にのりてこそ
五百人をしたがへて
東の方よりそらをふみ
きたりいますとをしへしむ

すきにしとしに妹子か
もちてきたりしその經は
弟子たりし僧の持經なり
三人老僧みなしらす

おもふあまりにひかれつゝ
わかたましゐをつかはして
とりよせきたる經なりと
太子くはしく命しける

すきにしとしの經をみて
いま經をあはすれは
なき文字ひとつありとみゆ
さきの經にはさらににす

いまこの所持の經巻は
きなる紙にてひとまきに
玉の軸にておはします
老僧しらてをしへたり

いりてあしたにいてたまひ
閻浮提のことをかたらす
このうちにいりてこそ
諸經の疏をは製れりし
七日七夜いてすして
戸をとち御こえもしたまはす
高麗の惠慈まうさしむ
太子は三昧定にいらしめり

おとろかしますことなかれ
八日といふにいてたまひ
玉の机のうへにこそ
ひとまきの經おはしませ
惠慈法師をめしてこそ
ことをかたりてのたまはく
吾衡山にありしとき
たもちし經はこれなりき

妹子勅使にしたかひて
般若寺にそいたりける
門にひとりの沙彌ありて
見てすなはちいりにけり
しわおひたる僧三人
つえをついてそいてきたる
思禪師の使とて
よろこひえみてをしへしむ

蓮華一部をひとまきに
あはせかきける御經を
勅使の妹子にをしへしめ
とらしたりとそ奏しける
いかるかの寢殿の
かたはらにいへをつくりて
夢殿とそなつけたる
日ことにみたひおゆあみて

この地に寺をたてたまふ
橘寺とまうすなり
ふれし華はこの寺に
いまにおさめてをかれたり
小野の妹子の大臣を
勅使としたまひてぞ
衡山におはしてたもてりし
法華をとりにつかはしき

妹子にをしへて令旨あり
赤縣の南に衡山あり
般若寺といふ寺にあり
くはしくたつねていたるへし
むかしの同法しにけむ
いま三人はかりあり
御經わたさむ勅使とて
わか使とそなのるへし

調使麿ばかりこそ
御馬の右にはそへりしか
ひと〲あふきそちをみる
信州のくにゝくたります
三越坂をめくりてそ
三日ありてかへります
日本國のありさまを
さはることなくみそなはす

推古天皇のみまへにて
勝鬘經を講しまし〲き
三日講じをはりし夜
そらより蓮華ふりくたる
華のなかさは二三尺
方三四丈の地にふりみてる
あくるあしたに蓮華を
みかとあやのみみたまひき

太子御伯父崇俊王
この天皇の御宇には
太子の御とし十九歳
かふりしたまふときこえたり
そのとき百濟のつかひにて
阿佐王子きたれり
太子をおかみまうさしむ
敬禮救世大慈觀音菩薩

妙敎流通東方日國
四十九歳傳燈演說と禮しけり
儲君そのとき眉間より
しろきひかりをはなたしむ
甲斐の國よりたてまつる
あしよつしろき黑駒に
駕して雲にそいりたまふ
東のかたへそいましける

物部の府都の大神の
あらくはなてるやといひて
太子の御あぶみにあたりしに
おそれはさらにましまさす
舎人跡見の赤檮には
かさねて勅命くだされき
四天王にいのりつゝ
箭をはなたしめたまへりき

守屋かむねにあたりしに
木よりさかさまにおちにけり
御かたのつはものせめゆきて
守屋か頭を切てけり
玉造の岸のうへに
四天王寺をたてたまふ
佛法これよりさかりなり
王家もいよ〳〵さかりなり

おちをのゝきてみたひまて
しりぞきかへしそのときに
令旨をことにくだされて
軍兵こはくさかりなり
秦の川勝に命してぞ
白膠木をとらしめて
四王の像をきざみつゝ
もとゞりにさしほこにさゝく

願をゝこしてのたまはく
わかたゝかひをかたしめよ
四天王を造立し
寺塔をたてんと令旨あり
馬子の大臣ねかひつゝ
御かたのつはものかたふくに
守屋の連さはかしく
いちゐの木にこそのほりしか

人々はかりことをなしてこそ
群兵をまうけよといひければ
これをきゝて阿都のいへに
こもりて兵士をもとめける
中臣の勝海の連もろともに
兵士ををこして安屋を
あひたすけむとかまへつゝ
天皇を呪咀したてまつる

蘇我の大臣はからひて
儲君に奏聞せしめてぞ
守屋をうたんとさためしに
御かたの軍衆むらかりき
守屋の連ことさらに
つはものををこし城をつき
群兵こはくさかりにて
御かたのいくささはかしく

太子の御父用明王
くらゐにつきて二年に
朕も三寶に歸依せむと
勅宣ありときこえたる
馬子の大臣勅宣に
したかはしむと奏してそ
法師をめして内裏に
いれはしめしめたまひけり

太子よろこひまし〱て
大臣の手をとりてこそ
なみたをなかしてのたまへり
三寶のたえなるを人しらす
大臣こゝろをよせしめて
うれしくもあるとおほせける
このゝちある人ひそかにて
守屋の連につけしめき

即はちかさやまふをこりき
病いたむことやきさく如く也
ふたりの大臣もろともに
おほきにとかをかなしみき

帝王へことを奏せしむ
この病ふくるしみいたむこと
たえしのふへきこともなし
ねかはくは三寶に祈らんと

そのとき勅宣くたされて
三人の尼をめしてこそ
馬子の大臣にたまはせて
いのちあらしめたまひしか

そののち寺を建立し
佛法これより興せしむ
病ふもとゝまりしつまりて
人民わつらひなかりけり

よきことことにをこなへは
さいはいきたるとおもふへし
あしきことををこなへは
わさはいことにきたるなり
ふたりのひとはいまさらに
わさはいにあらむと奏せしむ
守屋の連寺をやふる
佛經堂塔ほろほしき

やけのこりし佛像は
難波のほりえにすてられき
三人の尼はせめうちて
をひいたさしむときこえたり
この日そらにはくもなくて
おほきにかせふきあめふりき
太子かさねて令旨あり
わさはいまにをこりぬ

弓削の守屋と中臣の
勝海のむらしもろともに
皇に奏しまうさしむ
この國もとより神をあかむ
馬子の大臣佛法を
をこしをこなふこのゆへに
やまふもをこりたみもしぬ
ひとのいのちはとゝまらし

帝王御ことにのたまはく
まうすところはあきらけし
佛法をはやくとゝめよと
勅宣くにゝくたされき
太子奏せしめまし〳〵き
ふたりのひとはもろともに
因果のことはりしらぬなり
わさはいさためて身にあらん

いへのひむかしに寺をたつ
尼三人をすゑやしなふ
大臣塔をつくれりき
太子ことに令旨あり
塔は佛舎利のうつはもの
釋迦佛の御舎利を
はからさるにもをのつから
出來りましますことあらん

そのとき齋飯のうへにして
佛舎利一粒えたりけり
瑠璃のつほにいれたまひ
塔に安置禮しける
太子大臣ひとつにて
三寶ひろめまし〱き
そのときくにのうちにして
やまふをこりてひとしにき

日羅上人新羅より
難波の館につきたれりし
これをあやしみきこしめし
太子ひそかにみそなはす
そのとき日羅ひざまづき
たなごゝろをあはせてぞ
敬禮救世觀世音大菩薩
傳燈東方粟散王と禮せしむ

日羅おほきにその身より
ひろきひかりをはなちけり
太子そのとき眉間の
ひかりをはなちたまひけり
百濟國より彌勒の
かの像をわたされき
蘇我の馬子の宿禰の
この像を尊敬し

太子六歳の御ときに
百濟國より法師尼と
經論わたりたりしに
皇に奏したまひけり
六齋日をしへしむ
この日は梵天帝釋の
國のまつりことみた玉ふに
ものゝいのちをころさざれ

皇よろこびましくて
勅宣國にくだされて
この日日にはことさらに
ものゝいのちをたすくへし
新羅國より佛像を
たてまつられきそのときに
太子奏したまひけり
西國のひじり釋迦牟尼佛

御厩のほとりにいたるほど
おほえすしてそ誕生し
女孺のいたいてすみやかに
寝殿にいりたまひけり
金色のひかり西方より
きたりいりてそてらしける
御身はなはたかちはしく
日數をふるにもにほひあり

太子誕生ありしより
よつきののちにめつらしく
よくものかたりしたまひて
みたりになきましまさす
太子御とし二歳の
二月十五のあしたにそ
ひむがしにむかひて合掌し
南無佛と再拜し

歸命尊重聖德皇
用明天皇の親王のとき
穴太部の皇女の
御はらよりぞ誕生せる
皇女の御夢にみたまひき
金色の聖僧あらはれて
われ世をすくふねかひあり
しはらく御はらにやとるへし

われこれ救世菩薩なり
いへ西方にありとしめしてそ
踊てみくちにいりたまふ
はらまれいます菩薩なり
敏達天皇のあめのした
おさめまします元年の
正月朔日に夫人は
みやこのうちをそ御遊せし

聖德太子和讃

愚禿親鸞作

大日本國粟散王聖德太子奉讃

和國の敎主聖德皇
廣大恩德謝しかたし
一心に歸命したてまつり
奉讃不退ならしめよ

上宮皇子方便し
和國の有情をあはれみて
如來の悲願を弘宣せり
慶喜奉讃せしむへし

六八の弘誓のそのなかに
第三十五の願に
彌陀はことに女人を
引接せんとちかひしか

多聞淨戒えらはれす
破戒罪業きらはれす
たゝよく念するひとのみそ
瓦礫も金と變しける

金剛堅固の信心は
佛の相續よりおこる
他力の方便なくしては
いかてか決定心をえん

大願海のうちには
煩惱のなみこそなかりけれ
弘誓のふねにのりぬれは
大悲の風にまかせたり

超世の悲願きゝしより
われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねと
こゝろは淨土にあそふなり

帖外九首和讃

四十八願成就して
正覺の彌陀となりたまふ
たのみをかけしひとはみな
往生かならずさだまりぬ

極樂無爲の報土には
雜行むまるゝことかたし
如來要法をえらんでは
專修の行をおしへしむ

兆載永劫の修行は
阿彌陀の三字におさまれり
五劫思惟の名號は
五濁のわれらに付屬せり

阿彌陀如來の三業は
念佛行者の三業と
彼此金剛の心なれは
定聚のくらゐにさだまりぬ

いふことはなを義のあるへし
これは佛智の不思議にてあるなり
よしあしの文字をもしらぬひとはみな
まことのこゝろなりけるを
善惡の字しりかほは
おほそらことのかたちなり
是非しらす邪正もわかぬこの
みなり
小慈小悲もなけれとも
名利に人師をこのむなり

なり
自然といふはもとよりしからしむるといふことはなり彌陀佛の御ちかひのもとより行者のはからひにあらすして南無阿彌陀佛とたのませたまひてむかへんとはからはせたまひたるによりて行者のよからんともあしからんともおもはぬを自然とはまふすそときゝてさふらふちかひのやうは無上佛にならしめんとちかひたまへるなり無上佛とまふすはかたちもなくましますかたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなりかたちましますとしめすときは無上涅槃とはまふさすかたちもましまさぬやうをしらせんとてはしめに彌陀佛とそきゝならひてさふらふ彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなりこの道理をこゝろゑつるのちにはこの自然のことはつねにさたすへきにはあらさるなりつねに自然をさたせは義なきを義とすと

五　弓削の守屋の大連
邪見きはまりなきゆへに
よろつのものをすゝめんと
やすくほとけとまふしけり

親鸞八十八歳御筆

獲の字は因位のときうるを獲といふ得の字は果位のときにいたりてうることを得といふなり名の字は因位のときのなを名といふ號の字は果位のときのなを號といふ自然といふは自はおのつからといふ行者のはからひにあらすしからしむといふことはなり然といふはしからしむといふことは行者のはからひにあらす如來のちかひにてあるかゆへに法爾といふは如來の御ちかひなるかゆへにしからしむるを法爾といふこの法爾は御ちかひなりけるゆへにすへて行者のはからひなきをもちてこのゆへに他力には義なきを義とすとしるへき

一
善光寺の如來の
われらをあはれみまし〳〵て
なにはのうらにきたります
御名をもしらぬ守屋にて

二
そのときほとをりけとまふしける
疫癘あるひはこのゆへと
守屋かたくひはみなともに
ほとをりけとそまふしける

三
やすくすゝめんためにとて
ほとけと守屋かまふすゆへ
ときの外道みなともに
如來をほとけとさためたり

四
この世の佛法のひとはみな
守屋かことはをもとゝして
ほとけとまふすをたのみにて
僧そ法師はいやしめり

十四
罪業もとよりかたちなし
妄想顚倒のなせるなり
心性もとよりきよけれど
この世はまことのひとぞなき

十五
末法惡世のかなしみは
南都北嶺の佛法者の
輿かく僧達力者法師
高位をもてなす名としたり

十六
佛法あなづるしるしには
比丘比丘尼奴婢として
法師僧徒のたふとさも
僕從ものゝ名としたり

已上十六首これは愚禿かかなしみなきにして述懷としたりこの世の本寺本山のいみしき僧とまふすも法師とまふすもうきことなり

釋親鸞書之

十

外道梵士尼乾志に
こゝろかはらぬものとして
如來の法衣をつねにきて
一切鬼神をあかむめり

十一

かなしきかなやこのころの
和國の道俗みなともに
佛敎の威儀をもととして
天地の鬼神を尊敬す

十二

五濁邪惡のしるしには
僧そ法師といふ御名を
奴婢僕使になつけてそ
いやしきものとさためたる

十三

無戒名字の比丘なれと
末法濁世の世となりて
舍利弗目連にひとしくて
供養恭敬をすゝめしむ

六
蛇蝎奸詐のこゝろにて
自力修善はかなふまし
如來の廻向をたのまては
無慚無愧にてはてそせん

七
五濁増のしるしには
この世の道俗こと〱く
外儀は佛教のすかたにて
内心外道を歸敬せり

八
かなしきかなや道俗の
良時吉日えらはしめ
天神地祇をあかめつ
卜占祭祀つとめとす

九
僧そ法師のその御名は
たうときこととき ゝしかと
提婆五邪の法にゝて
いやしきものになつけたり

二 外儀のすかたはひとことに
賢善精進現せしむ
貪瞋邪僞おほきゆへ
奸詐もゝはし身にみてり

三 悪性さらにやめかたし
こゝろは蛇蝎のことくなり
修善も雜毒なるゆへに
虚假の行とそなつけたる

四 無慚無愧のこの身にて
まことのこゝろはなけれとも
彌陀の回向の御名なれは
功德は十方にみちたまふ

五 小慈小悲もなき身にて
有情利益はおもふまし
如來の願船いまさすは
苦海をいかてかわたるへき

九
上宮皇子方便し
和國の有情をあはれみて
如來の悲願を弘宣せり
慶喜奉讃せしむへし

十
多生曠劫この世まて
あはれみかふれるこの身なり
一心歸命たへすして
奉讃ひまなくこのむへし

十一
聖德皇のおあはれみに
護持養育たへすして
如來二種の廻向に
すゝめいれしめおはします

已上聖德奉讃　十一首

愚禿悲歎述懐

一
淨土眞宗に歸すれとも
眞實の心はありかたし
虛假不實のわか身にて
清淨の心もさらになし

五　他力の信をえんひとは
佛恩報せんためにとて
如來二種の迴向を
十方にひとしくひろむへし

六　大慈救世聖德皇
父のことくにおはします
大悲救世觀世音
母のことくにおはします

七　久遠劫よりこの世まて
あはれみましますしるしには
佛智不思議につけしめて
善惡淨穢もなかりけり

八　和國の敎主聖德皇
廣大恩德謝しかたし
一心に歸命したてまつり
奉讚不退ならしめよ

皇太子聖德奉讚

愚禿善信作

一
佛智不思議の誓願の
聖德皇のめぐみにて
正定聚に歸入して
補處の彌勒のごとくなり

二
救世觀音大菩薩
聖德皇と示現して
多々（ちちをいふなり）のごとくすてずして
阿摩（はゝをいふなり）のごとくにそひたまふ

三
無始よりこのかたこの世まで
聖德皇のあはれみに
多々のごとくにそひたまひ
阿摩のごとくにおはします

四
聖德皇のあはれみて
佛智不思議の誓願に
すゝめいれしめたまひてぞ
住正定聚の身となれる

二十一
自力の心をむねとして
不思議の佛智をたのまねは
胎宮にむまれて五百歳
三寶の慈悲にはなれたり

二十二
佛智の不思議を疑惑して
罪福信し善本を
修して淨土をねかふをは
胎生といふとときたまふ

二十三
佛智うたかふつみふかし
この心おもひしるならは
くゆるこゝろをむねとして
佛智の不思議をたのむへし

已上二十三首佛智不思議の彌陀
の御ちかひをうたかふつみとか
をしらせんとあらはせるなり

十七
ときに慈氏菩薩の
世尊にまふしたまひけり
何因何緣いかなれは
胎生化生となつけたる

十八
如來慈氏にのたまはく
疑惑の心をもちながら
善本修するをたのみにて
胎生邊地にとゝまれり

十九
佛智疑惑のつみゆへに
五百歲まで牢獄に
かたくいましめおはします
これを胎生ときたまふ

二十
佛智不思議をうたかひ
罪福信する有情は
宮殿にかならすむまるれは
胎生のものとときたまふ

十三
七寶の宮殿にむまれては
五百歳のとしをへて
三寶を見聞せさるゆへ
有情利益はさらになし

十四
邊地七寶の宮殿に
五百歳まていてすして
みつから過咎をなさしめて
もろ〳〵の厄をうくるなり

十五
罪福ふかく信しつゝ
善本修習するひとは
疑心の善人なるゆへに
方便化土にとまるなり

十六
彌陀の本願信せねは
疑惑を帶してむまれつゝ
はなはすなはちひらけねは
胎に處するにたとへたり

九
佛智不思議をうたかひて
善本徳本たのむひと
邊地懈慢にむまるれは
大慈大悲はえさりけり

十
本願疑惑の行者には
含花末出のひともあり
或生邊地ときらひつゝ
或墮宮胎とすてらるゝ

十一
如來の諸智を疑惑して
信せすなからなをもまた
罪福ふかく信せしめ
善本修習すくれたり

十二
佛智を疑惑するゆへに
胎生のものは智慧もなし
胎宮にかならすむまるゝを
牢獄にいるとたとへたり

五
轉輪皇の王子の
皇につみをうるゆへに
金鎖をもちてつなきつゝ
牢獄にいるかことくなり

六
自力稱名のひとはみな
如來の本願信せねは
うたかふつみのふかきゆへ
七寶の獄にそいましむる

七
信心のひとにおとらしと
疑心自力の行者も
如來大悲の恩をしり
稱名念佛はけむへし

八
自力諸善のひとはみな
佛智の不思議をうたかへは
自業自得の道理にて
七寶の獄にそいりにける

一 不了佛智のしるしには
如來の諸智を疑惑して
罪福信じ善本を
たのめは邊地にとまるなり

二 佛智の不思議をうたかひて
自力の稱念このむゆへ
邊地懈慢にとゝまりて
佛恩報するこゝろなし

三 罪福信する行者は
佛智の不思議をうたかひて
疑城胎宮にとゝまれは
三寶にはなれたてまつる

四 佛智疑惑のつみにより
懈慢邊地にとまるなり
疑惑のつみのふかきゆへ
年歳劫數をふるとゝく

五十五
釋迦の教法ましませと
修すへき有情のなきゆへに
さとりうるもの末法に
一人もあらしとときたまふ

五十六
三朝淨土の大師等
哀愍攝受したまひて
眞實信心すゝめしめ
定聚のくらゐにいれしめよ

五十七
他力の信心うるひとを
うやまひおほきによろこへは
すなはちわか親友そと
教主世尊はほめたまふ

五十八
如來大悲の恩德は
身を粉にしても報すへし
師主知識の恩德も
ほねをくたきても謝すへし

已上正像末和讃　五十八首

五十一
往相廻向の大慈より
還相廻向の大悲をう
如來の廻向なかりせは
淨土の菩提はいかゝせん

五十二
彌陀觀音大勢至
大願のふねに乘してそ
生死のうみにうかみつゝ
有情をよはふてのせたまふ

五十三
彌陀大悲の誓願を
ふかく信せんひとはみな
ねてもさめてもへたてなく
南無阿彌陀佛をとなふへし

五十四
聖道門のひとはみな
自力の心をむねとして
他力不思議にいりぬれは
義なきを義とすと信知せり

四十七
不思議の佛智を信するを
報土の因としたまへり
信心の正因うることは
かたきかなかになをかたし

四十八
無始流轉の苦をすてゝ
無上涅槃を期すること
如來二種の廻向の
恩德まことに謝しかたし

四十九
報土の信者はおほからす
化土の行者はかすおほし
自力の菩提かなはねは
久遠劫より流轉せり

五十
南無阿彌陀佛の廻向の
恩德廣大不思議にて
往相廻向の利益には
還相廻向に廻入せり

四十三
十方無量の諸佛の
證誠護念のみことにて
自力の大菩提心の
かなはぬほとはしりぬへし

四十四
眞實信心うることは
末法濁世にまれなりと
恒沙の諸佛の證誠に
えかたきほとをあらはせり

四十五
往相還相の廻向に
まうあはぬ身となりにせは
流轉輪廻もきはもなし
苦海の沈淪いかゝせん

四十六
佛智不思議を信すれは
正定聚にこそ住しけれ
化生のひとは智慧すくれ
無上覺をそさとりける

三十九
彌陀智願の廣海に
凡夫善惡の心水も
はむふのぜんのこゝろあくのこゝろをみつにたとへたるなり
歸入しぬれはすなはちに
大悲心とそ轉すなる
あくのこゝろぜんとなるをてんずるなりといふなり

四十
造惡このむわか弟子の
邪見放逸さかりにて
末世にわか法破すへしと
蓮華面經にときたまふ

四十一
念佛誹謗の有情は
阿鼻地獄に墮在して
むけんぢごくなり
八萬劫中大苦惱
ひまなくうくとそときたまふ

四十二
眞實報土の正因を
二尊のみことにたまはりて
正定聚に住すれは
かならす滅度をさとるなり

三十五

無明長夜の燈炬なり
（つねのともしびをみだのほんくわんにたとへまふすなり　つねのともしびをとういふ　おほきなるともしびをこといふ）

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり（ふねいかだ）

罪障おもしとなけかされ

三十六

願力無窮にましませは

罪業深重もおもからす

佛智無邊にましませは

散亂放逸もすてられす
（ちりみたるはしきおゝのこゝろといふ）

三十七

如來の作願をたつぬれは

苦惱の有情をすてすして

廻向を首としたまひて

大悲心をは成就せり

三十八

眞實信心の稱名は

彌陀廻向の法なれは

不廻向となつけてそ

自力の稱念きらはるゝ

三十一
無碍光佛のみことには
未來の有情利せんとて
大勢至菩薩に
智慧の念佛さつけしむ

三十二
濁世の有情をあはれみて
勢至念佛すゝめしむ
信心のひとを攝取して
淨土に歸入せしめけり

三十三
釋迦彌陀の慈悲よりぞ
願作佛心はえしめたる
信心の智慧にいりてこそ
佛恩報する身とはなれ

三十四
智慧の念佛うることは
法藏願力なせるなり
信心の智慧なかりせば
いかてか涅槃をさとらまし

二十七

眞實信心うるゆへに
すなはち定聚にいりぬれは
補處の彌勒におなしくて
無上覺をさとるなり

二十八

像法のときの智人も
自力の諸教をさしおきて
時機相應の法なれは
念佛門にそいりたまふ

二十九

彌陀の尊號となへつゝ
信樂まことにうるひとは
憶念の心つねにして
佛恩報するおもひあり

三十

五濁惡世の有情の
選擇本願信すれは
不可稱不可說不可思議の
功德は行者の身にみてり

二十三
如來二種の廻向を
ふかく信するひとはみな
等正覺にいたるゆへ（しやうぢやうしゆのくらゐなり）
憶念の心はたへぬなり

二十四
彌陀智願の廻向の
信樂まことにうるひとは
攝取不捨の利益ゆへ
等正覺にいたるなり

二十五
五十六億七千万
彌勒菩薩はとしをへん
まことの信心うるひとは
このたひさとりをひらくへし

二十六
念佛往生の願により
等正覺にいたるひと
すなはち彌勒におなしくて
大般涅槃をさとるへし

十九
淨土の大菩提心は
願作佛心をすゝめしむ
すなはち願作佛心を
度衆生心となづけたり

二十
度衆生心といふことは
よろづのしゆじやうほとけになさんとなり
彌陀智願の廻向なり
廻向の信樂うるひとは
大般涅槃をさとるなり

二十一
如來の廻向に歸入して
願作佛心をうるひとは
自力の廻向をすてはてゝ
利益有情はきはもなし

二十二
彌陀の智願海水に
みたのほんくわんをうみにたとへまふすなり
他力の信水いりぬれは
眞實報土のならひにて
煩惱菩提一味なり
ほむなうとくとくとひとつになるなり

十五
自力聖道の菩提心
こゝろもことはもおよはれす
常没流轉の凡愚は
いかてか發起せしむへき

十六
三恒河沙の諸佛の
出世のみもとにありしとき
大菩提心おこせとも
自力かなはて流轉せり

十七
像末五濁の世となりて
釋迦の遺教かくれしむ
彌陀の悲願ひろまりて
念佛往生さかりなり

十八
超世無上に攝取し
選擇五劫思惟して
光明壽命の誓願を
大悲の本としたまへり

十一
九十五種世をけかす
唯佛一道きよくます
菩提に出到してのみそ
火宅の利益は自然なる

十二
五濁の時機いたりては
道俗ともにあらそひて
念佛信するひとをみて
疑謗破滅さかりなり

十三
菩提をうましきひとはみな
專修念佛にあたをなす
頓教毀滅のしるしには
生死の大海きはもなし

十四
正法の時機とおもへとも
底下の凡愚となれる身は
清淨眞實のこゝろなし
發菩提心いかゝせん

七 無明煩惱しけくして
塵數のことく遍滿す（ちりのことくしけく）
愛憎違順することは
高峯岳山にことならす（たかきみねおかのあくのこゝろをたとへたり）

八 有情の邪見熾盛にて
叢林棘刺のことくなり（くさむらはやしうばらからたちのことくあくのこゝろしけきなり）
念佛の信者を疑謗して
破壞瞋毒さかりなり（やぶりいかりはらだつなり）

正像末和讃

九 命濁中夭刹那にて（ひとのいのちみぢかくもろしとなり）
依正二報滅亡し
背正歸邪まさるゆへ（たゞしきことをそむきひかことをこのむなり）
横にあたをおこしける（よこさま）

十 末法第五の五百年
この世の一切有情の
如來の悲願を信せすは
出離その期はなかるへし

三
正像末の三時には
彌陀の本願ひろまれり
像季末法のこの世には
諸善龍宮にいりたまふ

四
大集經にときたまふ
この世は弟五の五百年
闘諍堅固なるゆへに
白法隱滯したまへり

五
數万歳の有情も
果報やうやくおとろへて
二万歳にいたりては
五濁惡世の名をえたり

六
劫濁のときうつるには
有情やうやく身小なり
五濁惡邪まさるゆへ
毒蛇惡龍のことくなり

正像末淨土和讃

愚禿善信集

一
釋迦如來かくれましく゛て
二千餘年になりたまふ
正像の二時はおはりにき
如來の遺弟悲泣せよ

二
末法五濁の有情の
行證かなはぬときなれは
釋迦の遺法ことく゛く
龍宮にいりたまひにき

康元二歳丁巳二月九日夜寅時夢告云

彌陀の本願信すへし
本願信するひとはみな
攝取不捨の利益にて
無上覺をはさとるなり

五濁惡世の衆生の
選擇本願信すれは
不可稱不可說不可思議の
功德は行者の身にみてり

天竺
龍樹菩薩
天親菩薩

震旦
曇鸞和尚
道綽禪師
善導禪師

和朝
源信和尚
源空聖人

已上七八

聖德太子

敏達天皇元年
正月一日誕生

當佛滅後一千五百二十一年也

南無阿彌陀佛をとけるには
衆善海水のことくなり
かの清淨の善身にえたり
ひとしく衆生に廻向せん

十八
本師源空のおはりには
光明紫雲のごとくなり
音樂哀婉雅亮にて
異香みぎりに暎芳す

十九
道俗男女預參し
卿上雲客群集す
頭北面西右脇にて
如來涅槃の儀をまもる

二十
本師源空命終時
建曆弟二壬申歳
初春下旬弟五日
淨土に還歸せしめけり

己上源空聖人

己上七高僧和讃　一百十七首

十四
命終その期ちかつきて
本師源空のたまはく
往生みたひになりぬるに
このたひことにとけやすし

十五
源空みつからのたまはく
靈山會上にありしとき
聲聞僧にまじはりて
頭陀を行して化度せしむ

十六
粟散片州に誕生して
念佛宗をひろめしむ
衆生化度のためにとて
この土にたひ／＼きたらしむ

十七
阿彌陀如來化してこそ
本師源空としめしけれ
化縁すてにつきぬれは
淨土にかへりたまひにき

十

承久の太上法皇は
本師源空を歸敬しき
釋門儒林みなともに
ひとしく眞宗に悟入せり

十一

諸佛方便ときいたり
源空ひしりとしめしつ
無上の信心おしへてそ
涅槃のかとをはひらきける

十二

眞の智識にあふことは
かたきかなかになをかたし
流轉輪廻のきはなきは
疑情のさはりにしくそなき

十三

源空光明はなたしめ
門徒につねにみせしめき
賢哲愚夫もえらはれす
豪貴鄙賤もへたてなし

六
源空智行の至徳には
聖道諸宗の師主も
みなもろともに歸せしめて
一心金剛の戒師とす

七
源空存在せしときに
金色の光明はなたしむ
禪定博陸まのあたり
拜見せしめたまひけり

八
本師源空の本地をば
世俗のひと〴〵あひつたへ
綽和尚と稱せしめ
あるひは善導としめしけり

九
源空勢至と示現し
あるひは彌陀と顯現す
上皇群臣尊敬し
京夷庶民欽仰す

二
智慧光のちからより
本師源空あらはれて
淨土眞宗をひらきつゝ
選擇本願のへたまふ

三
善導源信すゝむとも
本師源空ひろめすは
片州濁世のともからは
いかてか眞宗をさとらまし

四
曠劫多生のあひたにも
出離の强縁しらさりき
本師源空いまさすは
このたひむなしくすきなまし

五
源空三五のよはひにて
無常のことはりさとりつゝ
厭離（よをいとふなり）の素懐（もとのこゝろといふ）をあらはして
菩提のみちにいらしめし

八 煩惱にまなこさへられて
攝取の光明みされとも
大悲ものうきことなくて
つねにわか身をてらすなり

九 彌陀の報土をねかふひと
外儀のすかたはことなりと
本願名號信受して
寤寐にわすることなかれ
（ねてもさめてといふなり）

十 極惡深重の衆生は
他の方便さらになし
ひとへに彌陀を稱してそ
淨土にむまるとのへたまふ

己上源信大師

一 源空聖人　付二釋文一　二十首

本師源空世にいてゝ
弘願の一乘ひろめつゝ
日本一州こと〳〵く
淨土の機緣あらはれぬ

四
本師源信和尚は
懐感禪師の釋により
處胎經をひらきてぞ
懈慢界をあらはせる

五
專修のひとをほむるには
千無一失とおしへたり
せんにひとつのとかむしとなり
雜修のひとをきらふには
萬不一生とのへたまふ
まんにひとりもはうとにむまれすとなり

六
報の淨土の往生は
おほからすとぞあらはせる
化土にむまるゝ衆生をは
すくなからすとおしへたり

七
男女貴賤こと〳〵く
彌陀の名號稱するに
となふるなり
行住座臥もえらはれす
あるくとゝまるゐるふすなり
時處諸緣もさはりなし
ときところよろつのことなり

二十六
娑婆永劫の苦をすてゝ
淨土無爲を期すること
本師釋迦のちからなり
長時に慈恩を報すへし

已上善導大師

源信大師 付二釋文一 十首

一
源信和尚のたまはく
われこれ故佛とあらはれて（もとのほとけとまふすことなり）
化緣すてにつきぬれは
本土にかへるとしめしけり

二
本師源信ねんころに
一代佛教のそのなかに
念佛一門ひらきてそ
濁世末代おしへける

三
靈山聽衆とおはしける
源信僧都のおしへには
報化二土をおしへてそ
專雜の得失さためたる

二十二

五濁増のときいたり
疑謗のともからおほくして（みたのちかゐをうたかふものそしるものなり）
道俗ともにあひきらひ
修するをみてはあたをなす

二十三

本願毀滅のともからは（そしりほろほすなり）
生盲闡提となつけたり（むまれてよりめしゐたるものせんたいははとけになりかたし）
大地微塵劫をへて
なかく三塗にしつむなり

二十四

西路を指授せしかとも（おしへさつけしに）
自鄣彰他せしほとに（わかみをさへひとをさへみたるなり）
曠劫已來もいたつらに
むなしくこそはすきにけれ

二十五

弘誓のちからをかふらすは
いつれのときにか娑婆をいてん
佛恩ふかくおもひつゝ
つねに彌陀を念すへし

十八

利他の信樂うるひとは
願に相應するゆへに
敎と佛語にしたかへは
外の雜緣さらになし

十九

眞宗念佛きゝえつゝ
一念無疑なるをこそ
希有最勝人とほめ
正念をうとはさためたれ

二十

本願相應せさるゆへ
雜緣きたりみたるなり
信心亂出するをこそ（みたれうしなふこゝろなり）
正念うすとはのへたまへ

二十一

信は願より生すれは
念佛成佛自然なり
自然はすなはち報土なり
證大涅槃うたかはず

十四
眞心徹到するひとは
金剛心なりければ
三品の懺悔するひとゝ
ひとしと宗師はのたまへり

十五
五濁惡世のわれらこそ
金剛の信心はかりにて
なかく生死をすてはてゝ
自然の淨土にいたるなれ

十六
金剛堅固の信心の
さたまるときをまちえてそ
彌陀の心光攝護して
なかく生死をへたてける

十七
眞實信心えさるをは
一心かけぬとおしへたり
一心かけたるひとはみな
三信具せすとおもふへし

十

佛法力の不思議には
諸邪業繫さはらねは
彌陀の本弘誓願を
増上緣となつけたり

十一

願力成就の報土には
自力の心行いたらねは
大小聖人みなながら
如來の弘誓に乘すなり

十二

煩惱具足と信知して
本願力に乘すれは
すなはち穢身すてはてゝ
法性常樂證せしむ

十三

釋迦彌陀は慈悲の父母
しやかはちゝなゝみだはゝゝなりとたとへたまへり
種種に善巧方便し
われらか無上の信心を
發起せしめたまひけり
ひらきおこしたまふなり

六 佛號むねと修すれとも
現世をいのる行者をは
これも雜修となつけてそ
千中無一ときらはるゝ

七 こゝろはひとつにあらねとも
雜行雜修これにたり
淨土の行にあらぬをは
ひとへに雜行となつけたり

八 善導大師證をこひ
定散二心をひるかへし
貪瞋二河の譬喩をとき
弘願の信心守護せしむ

九 經道滅盡ときいたり
如來出世の本意なる
弘願眞宗にあひぬれは
凡夫念してさとるなり

二 世世に善導いてたまひ
法照少康としめしつゝ
功徳藏をひらきてそ
諸佛の本意とけたまふ

三 彌陀の名願によらされは
百千万劫すくれとも
いつゝのさはりはなれねは
女身をいかてか轉すへき

四 釋迦は要門ひらきつゝ
定散諸機をこしらへて
正雜二行方便し
ひとへに專修をすゝめしむ

五 助正ならへて修するをは
すなはち雜修となつけたり
一心をえさるひとなれは
佛恩報するこゝろなし

五 濁世の起惡造罪は
あくをおこしつみをつくることのおほきことをいふ
暴風駛雨にことならず
諸佛これらをあはれみて
すゝめて淨土に歸せしめり

六 一形惡をつくれども
專精にこゝろをかけしめて
もつぱらこのみてといふ
つねに念佛せしむれは
諸鄣自然にのぞこりぬ

七 縦令一生造惡の
たとひ一こあくをつくるものなりともみだのちかひをたのみまひらせて
わうじやうすへしとなり
衆生引攝のためにとて
稱我名字と願しつゝ
わかなをとなへよとくわんしたまへり
若不生者とちかひたり
もしむまれずはほとけにならじとちかひたまへるなり

已上道綽大師

善導大師 付二釋文一 二十六首

一 大心海より化してこそ
善導和尚とおはしけれ
末代濁世のためにとて
十方諸佛に證をこふ

道綽禪師　付釋文　七首

一　本師道綽禪師は
聖道萬行さしおきて
唯有淨土一門を
通入すへきみちととく

二　本師道綽大師は
涅槃の廣業さしおきて
本願他力をたのみつゝ
五濁の群生すゝめしむ

三　末法五濁の衆生は
聖道の修行せしむとも
ひとりも證をえしとこそ
教主世尊はときたまへ

四　鸞師のおしへをうけつたへ
綽和尚はもろともに
在此起心立行は
（しやはせかいにてはたいしんをおこしぎやうをたつるはみなじりきなりとしるへし）
此是自力とさためたり
（これはこれじりきなりといふ）

三十一
決定の信なきゆへに
念相續せさるなり
念相續せさるゆへ
決定の信をえさるなり

三十二
決定の信をえさるゆへ
信心不淳とのへたまふ（しんしむあつからすといふことなり）
如實修行相應は（おしへのことくしんするこゝろなり）
信心ひとつにさためたり

三十三
萬行諸善の小路より
本願一實の大道に
歸入しぬれは涅槃の
さとりはすなはちひらくなり

三十四
本師曇鸞大師をは
梁の天子蕭王は
おはせしかたにつねにむき
鸞菩薩とそ禮しける

已上曇鸞和尚

二十七

無碍光如來の名號と
かの光明智相とは
無明長夜の闇を破し
衆生の志願をみてたまふ
（こゝろざしねがふことなり）

二十八

不如實修行といへること
鸞師釋してのたまはく
一者信心あつからす
若存若亡するゆへに
（あるときはさもとおもふあるときはかなふましとおもふなり）

二十九

二者信心一ならす
決定なきゆへなれは
三者信心相續せす
餘念間故とのへたまふ
（まじへるかゆへにしんなしといふなり）

三十

三信展轉相成す
（あひしやうずるなり）
行者こゝろをとゝむへし
信心あつからさるゆへに
決定の信なかりけり

二十三
安楽仏国に生するは
畢竟成仏の道路にて
（ひろきみちせはきみち）
無上の方便なりけれは
諸仏浄土をすゝめけり

二十四
諸仏三業荘厳して
畢竟平等なることは
衆生虚誑の身口意を
治せんかためとのへたまふ

二十五
安楽仏国にいたるには
無上宝珠の名号と
真実信心ひとつにて
無別道故とときたまふ

二十六
如来清浄本願の
無生の生なりけれは
本則三三の品なれと
（もとはこゝのしなのしやうは、のゝにたまれぬれはひとりもかはることなしとなり）
一二もかはることそなき

十九

無碍光の利益より
威徳廣大の信をえて
かならす煩惱のこほりとけ
すなはち菩提のみつとなる

二十

罪鄣功徳の躰となる
こほりとみつのことくにて
こほりおほきにみつおほし
さはりおほきに徳おほし

二十一

名號不思議の海水は
逆謗の屍骸もとゝまらす（しにかはねはいはにたとへたり）
衆惡の萬川歸しぬれは（よろつのあくをよろつのかはにたとへたり）
功徳のうしほに一味なり（ひとつあぢはひとなるなり）

二十二

盡十方無碍光の
大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれは
智慧のうしほに一味なり

十五
往相の廻向ととくことは
彌陀の方便ときいたり
悲願の信行えしむれは
生死すなはち涅槃なり

十六
還相の廻向ととくことは
利他教化の果をえしめ
すなはち諸有に廻入して
普賢の徳を修するなり

十七
論主の一心ととけるをは
曇鸞大師のみことには
煩惱成就のわれらか
他力の信とのへたまふ

十八
盡十方の無碍光は
無明のやみをてらしつゝ
一念歡喜するひとを
かならす滅度にいたらしむ

十一
天親菩薩のみことをも
鸞師ときのへたまはずは
他力廣大威德の
心行いかてかさとらまし

十二
本願圓頓一乘は
逆惡攝すと信知して
煩惱菩提體無二と
すみやかにとくさとらしむ

十三
いつゝの不思議をとくなかに
佛法不思議にしくぞなき
佛法不思議といふことは
彌陀の弘誓になつけたり

十四
彌陀の廻向成就して
往相還相ふたつなり
これらの廻向によりてこそ
心行ともにえしむなれ

七
魏の天子はたふとみて
神鸞とこそ號せしか
おはせしところのその名をは
鸞公巖となつけたる

八
淨業さかりにすゝめつゝ
玄忠寺にそおはしける
魏の興和四年に
遙山寺にこそうつりしか

九
六十有七ときいたり
淨土の往生とけたまふ
そのとき靈瑞不思議にて
一切道俗歸敬しき

十
君子ひとへにおもくして
勅宣くたしてたちまちに
汾州汾西秦陵の
勝地に靈廟たてたまふ

三 世俗の君子幸臨し
勅して淨土のゆへをとふ
十方佛國淨土なり
なにゝよりてか西にある

四 鸞師こたへてのたまはく
わか身は智慧あさくして
いまた地位にいらされは（ふたいのくらいにいたらすとなり）
念力ひとしくおよはれす

五 一切道俗もろともに
歸すへきところそさらになき
安樂勸歸のこゝろさし
鸞師ひとりさためたり

六 魏の主勅して并州の
大巖寺にそおはしける
やうやくおはりにのそみては
汾州にうつりたまひにき

九
信心すなはち一心なり
一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心
この心すなはち他力なり

十
願土にいたればすみやかに
無上涅槃を證してぞ
すなはち大悲をおこすなり
これを廻向となつけたり

已上天親菩薩

一　曇鸞和尚 付二釋一文　三十四首

本師曇鸞和尚は
菩提流支のおしへにて
仙經なかくやきすてゝ
淨土にふかく歸せしめき

二
四論の講說さしおきて
本願他力をときたまひ
具縛の凡衆をみちびきて
涅槃のかとにぞいらしめし

五
天人不動の聖衆は
弘誓の智海より生す
心業の功徳清浄にて
虚空のことく差別なし

六
天親論主は一心に
無碍光に歸命す
本願力に乘すれは
報土にいたるとのへたまふ

七
盡十方の無碍光佛
一心に歸命するをこそ
天親論主のみことには
願作佛心（ほとけにならんとねかふこゝろなり）とのへたまへ

八
願作佛の心はこれ
度衆生（しゆしやうをわたすこゝろなり）のこゝろなり
度衆生の心はこれ
利他眞實の信心なり

天親菩薩付二釋文一　十首

一
釋迦の敎法おほけれと
天親菩薩はねんころに
煩惱成就のわれらには
彌陀の弘誓をすゝめしむ

二
安養淨土の莊嚴は
唯佛與佛の知見なり
究竟せること虛空にして
廣大にして邊際なし

三
本願力にあひぬれは
むなしくすくるひとそなき
功德の寶海みちくて
煩惱の濁水へたてなし

四
如來淨華の聖衆は
正覺のはなより化生して
衆生の願樂こと〳〵く
すみやかにとく滿足す

七
生死の苦海ほとりなし
ひさしくしつめるわれらをは
彌陀弘誓のふねのみそ
のせてかならすわたしける

八
智度論にのたまはく
如來は無上法皇なり
菩薩は法臣としたまひて
尊重すへきは世尊なり

九
一切菩薩ののたまはく
われら因地にありしとき
無量劫をへめくりて
萬善諸行を修せしかと

十
恩愛はなはたたちかたく
生死はなはたつきかたし
念佛三昧行してそ
罪障を滅し度脫せし

已上龍樹菩薩

三
本師龍樹菩薩は
大乘無上の法をとき
歡喜地を證してそ
ひとへに念佛すゝめける

四
龍樹大士世にいてゝ
難行易行のみちおしへ
流轉輪廻のわれらをは
弘誓のふねにのせたまふ

五
本師龍樹菩薩の
おしへをつたへきかんひと
本願こゝろにかけしめて
つねに彌陀を稱すへし

六
不退のくらゐすみやかに
えんとおもはんひとはみな
恭敬の心に執持して
彌陀の名號稱すへし

高僧和讃

愚禿親鸞作

龍樹菩薩 付釋文一 十首

一
本師龍樹菩薩は
智度十住毘婆娑等
つくりておほく西をほめ
すゝめて念佛せしめたり

二
南天竺に比丘あらん
龍樹菩薩となつくへし
有無の邪見を破すへしと
世尊はかねてときたまふ

己上大勢至菩薩

源空聖人御本地也

「△異此二字無」經言

我本因地以念佛心

入無生忍今於此界

攝念佛人歸於淨土

△異有此讚文即在上經文前

無明法性ことなれど

心はすなはちひとつなり

この心すなはち涅槃なり

この心すなはち如來なり

五　子の母をおもふかことくにて
衆生佛を憶すれは
現前當來とをからす
如來を拜見うたかはす

六　染香人のその身には
香氣あるかことくなり
これをすなはちなつけてそ
香光莊嚴とまふすなる

七　われもと因地にありしとき
念佛の心をもちてこそ
無生忍にはいりしかは
いまこの娑婆界にして

八　念佛のひとを攝取して
淨土に歸せしむるなり
大勢至菩薩の
大恩ふかく報すへし

一 勢至念佛圓通して
五十二菩薩もろともに
すなはち座よりたたしめて
佛足頂禮せしめつゝ

二 敎主世尊にまふさしむ
往昔恒河沙劫に
佛世にいてたまへりき
無量光とまふしけり

三 十二の如來あひつきて
十二劫をへたまへり
最後の如來をなつけてそ
超日月光とまふしける

四 超日月光この身には
念佛三昧おしへしむ
十方の如來は衆生を
一子のことく憐念す

十三
南無阿彌陀佛をとなふれは
觀音勢至はもろともに
恒沙塵數の菩薩と
かけのことくに身にそへり

十四
無礙光佛のひかりには
無數の阿彌陀まし〳〵て
化佛おの〳〵こと〳〵く
眞實信心をまもるなり

十五
南無阿彌陀佛をとなふれは
十方無量の諸佛は
百重千重圍繞して
よろこびまもりたまふなり

已上現世利益

首楞嚴經によりて大勢至菩薩
和讃したてまつる　八首

九
南無阿彌陀佛をとなふれは
炎魔法王尊敬す
五道の冥官みなともに
よるひるつねにまもるなり

十
南無阿彌陀佛をとなふれは
他化天の大魔王
釋迦牟尼佛のみまへにて
まもらんとこそちかひしか

十一
天神地祇はこと〳〵く
善鬼神となつけたり
これらの善神みなともに
念佛のひとをまもるなり

十二
願力不思議の信心は
大菩提心なりけれは
天地にみてる惡鬼神
みなこと〳〵くおそるなり

五

南無阿彌陀佛をとなふれは
梵王帝釋歸敬す
諸天善神ことごとく
よるひるつねにまもるなり

六

南無阿彌陀佛をとなふれは
四天大王もろともに
よるひるつねにまもりつゝ
よろつの惡鬼をちかつけす

七

南無阿彌陀佛をとなふれは
堅牢地祇は尊敬す
かけとかたちとのことくにて
よるひるつねにまもるなり

八

南無阿彌陀佛をとなふれは
難陀跋難大龍等
無量の龍神尊敬し
よるひるつねにまもるなり

現世利益和讃　十五首

一　阿彌陀如來來化して（きたりてあはれみたまふ）
　息災延命のためにとて（しちなんをとゞめいのちをのへたまふなり）
　金光明の壽量品（しゆりやうほむはみたのときたまへるなり）
　ときおきたまへるみのりなり

二　山家の傳敎大師は
　國土人民をあはれみて
　七難消滅の誦文には
　南無阿彌陀佛をとなふへし

三　一切の功德にすくれたる
　南無阿彌陀佛をとなふれは
　三世の重鄣みななから
　かならす轉して輕微なり（かろくなしすくなくなすうすくなす）

四　南無阿彌陀佛をとなふれは
　この世の利益きはもなし
　流轉輪廻のつみきへて
　定業中天のそこりぬ

六 平等心をうるときを
一子地となつけたり
一子地は佛性なり
安養にいたりてさとるへし

七 如來すなはち涅槃なり
涅槃を佛性となつけたり
凡地にしてはさとられす
安養にいたりて證すへし

八 信心よろこふそのひとを
如來とひとしとときたまふ
大信心は佛性なり
佛性すなはち如來なり

九 衆生有礙（よろつのことさへらるゝこゝろなり）のさとりにて
無礙の佛智をうたかへは
曾婆羅頻陀羅地獄にて
多劫衆苦にしつむなり

已上諸經意

二 久遠實成阿彌陀佛
五濁の凡愚をあはれみて
釋迦牟尼佛としめしてぞ
迦耶城には應現する

三 百千俱胝の劫をへて
百千俱胝のしたをいたし
したこと無量のこゑをして
彌陀をほめんになをつきし

四 大聖易往とときたまふ（しやかふちなり ゆきやすしとなり）
淨土をうたがふ衆生をば
無眼人とぞなづけたる（まなこなきひとゝいふ）
無耳人とぞのべたまふ（みゝなきひとゝいふ）

五 無上上は眞解脱（まことにさとりひらくなり）
眞解脱は如來なり
眞解脱にいたりてぞ
無愛無疑とはあらはるゝ（よくのこゝろなしうたがふこゝろなしとなり）

四 諸佛の護念證誠は
悲願成就のゆへなれは
金剛心をえんひとは
彌陀の大恩報すへし

五 五濁惡時惡世界
濁惡邪見の衆生には
彌陀の名號あたへてそ
恒沙の諸佛すゝめたる

已上彌陀經意

諸經のこゝろによりて

彌陀和讃　九首

一 無明の大夜をあはれみて
法身光輪きはもなく
無礙光佛としめしてそ
安養界に影現する

九
定散諸機各別の
自力の三心ひるかへし
如來利他の信心に
通入せんとねかふへし

已上觀經意

彌陀經意　五首

一
十方微塵世界の
念佛の衆生をみそなはし
攝取してすてされは
阿彌陀となつけたてまつる

二
恒沙塵數の如來は
萬行の少善きらひつゝ
名號不思議の信心を
ひとしくひとへにすゝめしむ

三
十方恒沙の諸佛は
極難信ののりをとき
五濁惡世のためにとて
證誠護念せしめたり

五 耆婆大臣おさへてぞ
却行而退せしめつゝ
闍王つるきをすてしめて
韋提をみやに禁しける

六 彌陀釋迦方便して
阿難目連富樓那韋提
達多闍王頻婆娑羅
耆婆月光行雨等

七 大聖おの〳〵もろともに
凡愚底下のつみひとを
逆惡もらさぬ誓願に
方便引入せしめけり

八 釋迦韋提方便して
淨土の機縁熟すれは
雨行大臣證として
闍王逆惡興せしむ

觀經意　九首

一
恩德廣大釋迦如來
韋提夫人に勅してぞ
光臺現國のそのなかに
安樂世界をえらはしむ

二
頻婆娑羅王勅せしめ
宿因その期をまたずして
仙人殺害のむくひには
七重のむろにとぢられき

三
阿闍世王は瞋怒して
我母是賊としめしてぞ
無道に母を害せんと
つるぎをぬきてむかひける

四
耆婆月光ねんごろに
是栴陀羅とはぢしめて
不宜住此と奏してぞ
闍王の逆心いさめける

十九
善知識にあふことも
おしふることもまたかたし
よくきくこともかたければ
信することもなをかたし

二十
一代諸教の信よりも
弘願の信樂なをかたし
難中之難とときたまひ（かたきかなかにかたしとなり）
無過此難とのへたまふ（これにすきてかたきことなしとなり）

廿一
念佛成佛これ眞宗
萬行諸善これ假門
權實眞假をわかすして
自然の淨土をえそしらぬ

廿二
聖道權假の方便に
衆生ひさしくとゝまりて
諸有に流轉の身とそなる
悲願の一乘歸命せよ

已上大經意

十五
果遂の願によりてこそ
釋迦は善本德本を
彌陀經にあらはして
一乘の機をすゝめける

十六
定散自力の稱名は
果遂のちかひに歸してこそ
おしへされとも自然に
眞如の門に轉入する

十七
安樂淨土をねかひつゝ
他力の信をえぬひとは
佛智不思議をうたかひて
邊地懈慢にとまるなり

十八
如來の興世にあひかたく
諸佛の經道きゝかたし
菩薩の勝法きくことも
無量劫にもまれらなり

十一
至心發願欲生と
十方衆生を方便し
衆善の假門ひらきてぞ
現其人前と願しける

十二
臨終現前の願により
釋迦は諸善をことごとく
觀經一部にあらはして
定散諸機をすゝめけり

十三
諸善萬行ことごとく
至心發願せるゆへに
往生淨土の方便の
善とならぬはなかりけり

十四
至心廻向欲生と
十方衆生を方便し
名號の眞門ひらきてぞ
不果遂者と願しける

七

無碍光佛のひかりには
清淨歡喜智慧光
その德不可思議にして
十方諸有を利益せり

八

至心信樂欲生と
十方諸有をすゝめてぞ
不思議の誓願あらはして
眞實報土の因とする

九

眞實信心うるひとは
すなはち定聚のかずにいる
不退のくらゐにいりぬれは
かならす滅度にいたらしむ

十

彌陀の大悲ふかけれは
佛智の不思議をあらはして
變成男子の願をたて
女人成佛ちかひたり

三 大寂定にいりたまひ
如來の光顏たへにして
阿難の慧見をみそなはし
問斯慧義とほめたまふ

四 如來興世の本意には
よにいでたまうこゝろはといふ
本願眞實ひらきてぞ
難値難見とときたまひ
まうあひかたくみたてまつりかたしとなり
猶靈瑞華としめしける
うとむくゑのさくことのまれなるかことくとなり

五 彌陀成佛のこのかたは
いまに十劫とときたれど
塵點久遠劫よりも
ひさしき佛とみえたまふ

六 南無不可思議光佛
饒王佛のみもとにて
十方淨土のなかよりぞ
本願選擇攝取する

已上四十八首　愚禿親鸞作

阿彌陀如來　觀世音菩薩　大勢至菩薩

釋迦牟尼如來　富樓那尊者　大目犍連　阿難尊者

頻婆娑羅王　韋提夫人　耆婆大臣　月光大臣

提婆尊者　阿闍世王　雨行大臣　守門者

淨土和讃　愚禿親鸞作

大經意　二十二首

一
尊者阿難座よりたち
世尊の威光を瞻仰し（みたてまつる）
生希有心（ありがたきこゝろといふ）とをとろかし
未曾見（いまだむかしみにてまつらず）とぞあやしみし

二
如來の光瑞希有（ひかりありがたしとなり）にして
阿難はなはだこゝろよく
如是之義ととへりしに
出世（ほとけのよにいでたまふなり）の本意あらはせり

四十五
十方三世の無量慧
おなしく一如に乗してそ
二智圓滿道平等
攝化隨緣不思議なり

四十六
彌陀の淨土に歸しぬれは
すなはち諸佛に歸するなり
一心をもちて一佛を
ほむるは無碍人をほむるなり

四十七
信心歡喜慶所聞
乃曁一念至心者
南無不可思議光佛
頭面に禮したてまつれ

四十八
佛慧功德をほめしめて
十方の有緣にきかしめん
信心すてにえんひとは
つねに佛恩報すへし

四十一
一一のはなのなかよりは
三十六百千億の
佛身もひかりもひとしくて
相好金山のごとくなり

四十二
相好ごとに百千の
ひかりを十方にはなちてぞ
つねに妙法ときひろめ
衆生を佛道にいらしむる

四十三
七寶の寶池いさぎよく
八功德水みちみてり
無漏の依果不思議なり
功德藏を歸命せよ

四十四
三塗苦難ながくとぢ
但有自然快樂音
このゆへ安樂となつけたり
無極尊を歸命せよ

卅七
寶林寶樹微妙音
自然清和の伎樂にて
哀婉雅亮すぐれたり
清淨樂を歸命せよ

卅八
七寶樹林くにゝみつ
光耀たがひにかゝやけり
華菓枝葉またおなじ
本願功德聚を歸命せよ

卅九
清風寶樹をふくときは
いつゝの音聲いだしつゝ
宮商和して自然なり
清淨勳を禮すべし

四十
一一のはなのなかよりは
三十六百千億の
光明てらしてほがらかに
いたらぬところはさらになし

卅三
七寶講堂道場樹
方便化身の淨土なり
十方來生きはもなし
講堂道場禮すへし

卅四
妙土廣大超數限
本願莊嚴よりおこる
淸淨大攝受に
稽首歸命せしむへし

卅五
自利利他圓滿して
歸命方便巧莊嚴
こゝろもことはもたへたれは
不可思議尊を歸命せよ

卅六
神力本願及滿足
明了堅固究竟願
慈悲方便不思議なり
眞無量を歸命せよ

廿九
たとひ大千世界に
みてらん火をもすぎゆきて
佛の御名をきくひとは
ながく不退にかなふなり

三十
神力無極の阿彌陀は
無量の諸佛ほめたまふ
東方恒沙の佛國より
無數の菩薩ゆきたまふ

卅一
自餘の九方の佛國も（こゝのつのはうぶちとよりごくらくにむまるゝなり）
菩薩の往觀みなおなし（わうしやうしほとけをみたてまつる）
釋迦牟尼如來偈をときて
無量の功德をほめたまふ

卅二
十方の無量菩薩衆
德本うへんためにとて
恭敬をいたし歌嘆す（ほめはむるなり）
みなひと婆伽婆を歸命せよ（ほとけのみななり）

廿五
安樂佛土の依正は
法藏願力のなせるなり
天上天下にたくひなし
大心力を歸命せよ

廿六
安樂國土の莊嚴は
釋迦無碍のみことにて
とくともつきしとのへたまふ
無稱佛を歸命せよ

廿七
己今當の往生は（くわこにむまるこんしやうにむまるみらいにむまるゝなり）
この土の衆生のみならす
十方佛土よりきたる
無量無數不可計なり（かそふへからすとなり）

廿八
阿彌陀佛の御名をきゝ
歡喜讃仰せしむれは（よろこひほめあふくとなり）
功德の寶を具足して
一念大利無上なり

廿一
顔容端政たくひなし
精微妙軀非人天（たへなるみなり　にんにあらすてんにあらす）
虚無之身無極體（はふしんによらいなり）
平等力を歸命せよ

廿二
安樂國をねかふひと
正定聚にこそ住すなれ
邪定不定聚くにゝなし
諸佛讃嘆したまへり

廿三
十方諸有の衆生は
阿彌陀至徳の御名をきゝ
眞實信心いたりなは
おほきに所聞を慶喜せん（しんすることをゑてよろこふなり）

廿四
若不生者のちかひゆへ（もしむまれすはとちかひたまへるなり）
信樂まことにときいたり
一念慶喜するひとは（しんをゑてのちによろこふことなり）
往生かならすさたまりぬ

十七
觀音勢至もろともに
慈光世界を照曜し
有緣を度してしはらくも
休息あることなかりけり（やすむことなしとなり）

十八
安樂淨土にいたるひと
五濁惡世にかへりては
釋迦無尼佛のことくにて
利益衆生はきはもなし

十九
神力自在なることは
測量すへきことそなき（はかりはかることなし）
不思議の德をあつめたり
無上尊を歸命せよ

二十
安樂聲聞菩薩衆
人天智慧ほからかに
身相莊嚴みなおなし
他方に順して名をつらぬ（したかひてにんありてんありといふ）

十三
光明月日に勝過して
超日月光となづけたり
釋迦嘆してなをつきず
無等等を歸命せよ

十四
彌陀初會の聖衆は
算數のおよぶことぞなき
淨土をねかはんひとはみな
廣大會を歸命せよ

十五
安樂無量の大菩薩
一生補處にいたるなり
普賢の德に歸してこそ
穢國にかならす化するなり

十六
十方衆生のためにとて
如來の法藏あつめてぞ
本願弘誓に歸せしむる
大心海を歸命せよ

九
無明の闇を破するゆへ（やみにてくらし　やぶるなり）
智慧光佛となつけたり
一切諸佛三乘衆
ともに嘆譽したまへり（はめ　はむるなり）

十
光明てらしてたへされは
不斷光佛となつけたり
聞光力のゆへなれは（みたのおんちからをしんしまひらすなり）
心不斷にて往生す（みたのせいくわんをしんせるこゝろたへすしてわうしやうすとなり）

十一
佛光測量なきゆへに
難思光佛となつけたり
諸佛は往生嘆しつゝ（はめるなり）
彌陀の功德を稱せしむ

十二
神光の離相をとかされは（むけくわうふちのおんかたちをいひひらくことなしとなり）
無稱光佛となつけたり
因光成佛のひかりをは（ひかりきはなからんとちかひたまひてむけくわうふちとなりておはしますとしるへし）
諸佛の嘆するところなり（はめたまふなり）

五
清浄光明ならびなし
遇斯光のゆへなれば
一切の業繋ものぞこりぬ
畢竟依を帰命せよ

六
佛光照曜最第一
光炎王佛となづけたり
三塗の黒闇ひらくなり
大應供を帰命せよ

七
道光明朗超絶せり
清浄光佛とまふすなり
ひとたび光照かふるもの
業垢をのぞき解脱をう

八
慈光はるかにかふらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ
大安慰を帰命せよ

一

彌陀成佛のこのかたは
いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく
世の盲冥をてらすなり

二

智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光曉かふらぬものはなし
眞實明に歸命せよ

三

解脱の光輪きはもなし
光觸かふるものはみな
有無をはなるとのべたまふ
平等覺に歸命せよ

四

光雲無碍如虚空
一切の有碍にさはりなし
光澤かふらぬものぞなき
難思議を歸命せよ

十住毗婆沙論曰

自在人我禮　清淨人歸命

無量德稱讚

讚阿彌陀佛偈和讚　愚禿親鸞作

南無阿彌陀佛

本願功德聚　清淨勳

功德藏無極尊

南無不可思議光　已上略抄已

十住毘婆娑論曰

自在人我禮　清淨人歸命

無量德稱讚　已上

讚阿彌陀佛偈和讚　愚禿親鸞作

南無阿彌陀佛

無稱佛婆伽婆

講堂清淨大攝受

不可思議尊道場樹

眞無量清淨樂

本願功德聚清淨勳

功德藏無極尊

南無不可思議光

已上阿彌陀如來尊號也異 已上略抄之

又號二無稱光一 號二超日月光一

無等等廣大會

大心海無上尊

平等力大心力

無稱佛婆伽婆

講堂清淨大攝受

不可思議尊道場樹

眞無量清淨樂

又號光炎王　大應供
又號清淨光　又號歡喜光
大安慰　又號智慧光
又號不斷光　又號難思光
又號無稱光　號超日月光
無等等　廣大會
大心海　無上尊
平等力　大心力

又號無量光　眞實明
又號無邊光　平等覺
又號無碍光　難思議
又號無對光　畢竟依
又號光炎王　大應供
又號清淨光　又號歡喜光
大安慰　又號智慧光
又號不斷光　又號難思光

讃阿彌陀佛偈曰　曇鸞和尚造　御撰

南無阿彌陀佛　釋名無量壽傍經奉讃亦曰安養

成佛已來歷十劫壽命方將無有量

法身光輪徧法界照世盲冥故頂禮

又號無量光　眞實明

又號無邊光　平等覺

又號無礙光　難思議

又號無對光　畢竟依

讃阿彌陀佛偈曰

曇鸞御造

南無阿彌陀佛

釋名無量壽傍經奉讃亦曰安養

成佛已來歷十劫

壽命方將無有量

法身光輪徧法界

照世盲冥故頂禮

淨土和讃

稱讃淨土經言　玄弉三藏譯

假使經於百千倶胝那由多劫以其　△他異

無量百千倶胝那由多舌一一舌上　△他異

出無量聲讃其功德亦不能盡文

彌陀の名號となへつゝ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
佛恩報するおもひあり

誓願不思議をうたかひて
御名を稱する往生は
宮殿のうちに五百歳
むなしくすくとそときたまふ

和讃

親鸞聖人全集　下卷

目次

親鸞聖人全集

文學博士　南條文雄
文學博士　前田慧雲
文學博士　村上專精
監修

親鸞聖人全集